松山市文化財調査報告書 161

来住町遺跡 8 次調査
来住町遺跡 12 次調査
久米窪田森元遺跡 4 次調査

2013

松山市教育委員会

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

来住町遺跡 8 次調査
（きしまち）

来住町遺跡 12 次調査
（きしまち）

久米窪田森元遺跡 4 次調査
（くめくぼたもりもと）

2013

松山市教育委員会

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

序　　言

本書は、松山市東部の来住・久米地区で平成９年、同１０年、同１３年に実施した緊急調査による発掘調査報告書です。

来住・久米地区には、全国的に知られている国史跡「久米官衙遺跡群　久米官衙遺跡　来住廃寺跡」があります。

今回報告します来住町遺跡８次調査と同１２次調査では、古墳時代、古代、中世の建物跡が検出され、この官衙があった古代を含め、来住台地南方域における古墳時代後期から中世までの集落様相を解明する貴重な資料を得ることができました。また、久米窪田森元遺跡４次調査では、古代の瓦や木製品とともに、建物跡が確認され、官衙周辺施設の存在が明らかになりました。

このような成果を上げることができましたのは、関係各位の埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力の賜物と心より感謝申しあげる次第です。

本書が、松山市民をはじめ多くの方々の埋蔵文化財保護意識の向上と埋蔵文化財調査の一助となり、考古学研究等にご活用いただければ幸いに存じます。

平成25年3月

松山市教育長　　山　本　　昭　弘

例　言

1．本書は、財団法人松山市生涯学習振興財団松山市埋蔵文化財センターが平成９年～平成１３年に松山市来住町、久米窪田町で実施した３遺跡についての発掘調査報告書である。

2．整理作業及び報告書作成作業は、公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センターが行った。

3．遺構の略号は、竪穴建物 (竪穴住居)：ＳＢ、土坑：ＳＫ、溝：ＳＤ、柱穴：ＳＰ、不明遺構：ＳＸ、掘立柱建物：掘立、自然流路：ＳＲとし、遺跡ごとに通し番号を１から付記した。

4．遺構の測量は、調査担当者の指示のもと補助員、作業員が実施した。

5．遺物の実測及び掲載図の製図は、髙尾和長、山本健一、宮内慎一の指示のもと田﨑真理、矢野久子、多知川富美子、中村紫、木西嘉子、西本三枝、平岡直美、山下満佐子、篠森千里、戸川安子、岩本美保、佐伯利枝、村上真由美が行った。

6．掲載の遺構図、遺物図は、スケール下に縮尺を表記した。

7．掲載の遺構図の方位は真北を示す。

8．基準点測量は、株式会社パスコに業務委託した。

9．写真図版は、遺構撮影は調査担当者と大西朋子が、遺物の撮影は大西朋子が担当し、図版作成は報告担当者と協議のうえ大西朋子が行った。

10. 本報告書に関する資料は、松山市立埋蔵文化財センターが保管・収蔵している。

11. 本書は髙尾和長、宮内慎一、山本健一が執筆し、編集は宮内、山本の協力を得て髙尾が行った。

目　　次

第１章　はじめに……（高尾）　……1

第１節　調査に至る経緯……1
第２節　調査・刊行組織……1
第３節　立地・環境　……3

第２章　来住町遺跡８次調査……（宮内）　……7

第１節　調査の経過……7
第２節　層　位……8
第３節　遺構と遺物……13
第４節　小　結……32

第３章　来住町遺跡 12 次調査……（高尾）　……41

第１節　調査の経過……41
第２節　Ａ区の調査……43
第３節　Ｂ区の調査……47
第４節　小　結……57

第４章　久米窪田森元遺跡４次調査……（山本）　……63

第１節　調査の経過……63
第２節　層　位……66
第３節　遺構と遺物……69
第４節　小　結……86

第５章　まとめ……（高尾）……94

挿図目次

第１章　はじめに

第 1 図　調査地周辺遺跡分布図（縮尺 1/25,000）……5
第 2 図　来住町遺跡１次～１３次調査位置図（縮尺 1/2,000）……6

第２章　来住町遺跡８次調査

第 3 図　調査地測量図（縮尺 1/1,000）……7
第 4 図　西壁土層図（1）（縮尺 1/40）……10
第 5 図　西壁土層図（2）（縮尺 1/40）……11
第 6 図　遺構配置図（縮尺 1/300）……12
第 7 図　ＳＢ１測量図（縮尺 1/80）……13
第 8 図　ＳＢ１出土遺物実測図（縮尺 1/3）……14
第 9 図　掘立１測量図・出土遺物実測図（縮尺 1/3、1/80）……15
第 10 図　掘立２測量図・出土遺物実測図（縮尺 1/3、1/80）……16
第 11 図　ＳＫ１測量図・出土遺物実測図（縮尺 1/4、1/80）……17
第 12 図　掘立４測量図・出土遺物実測図（縮尺 1/3、1/80）……18
第 13 図　掘立５測量図（縮尺 1/80）……19
第 14 図　掘立６・８・９測量図（縮尺 1/80）……20
第 15 図　ＳＤ１出土遺物実測図（縮尺 1/3）……21
第 16 図　ＳＲ１断面図（縮尺 1/40）……23
第 17 図　ＳＲ１下層出土遺物実測図（1）（縮尺 1/3）……25
第 18 図　ＳＲ１下層出土遺物実測図（2）（縮尺 1/3）……26
第 19 図　ＳＲ１下層出土遺物実測図（3）（縮尺 1/3）……27
第 20 図　ＳＲ１上層出土遺物実測図（1）（縮尺 1/3）……28
第 21 図　ＳＲ１上層出土遺物実測図（2）（縮尺 1/3、1/4）……29
第 22 図　ＳＲ１地点不明出土遺物実測図（縮尺 1/3、1/4）……29
第 23 図　掘立３・７測量図（縮尺 1/80）……30
第 24 図　ＳＤ４出土遺物実測図（縮尺 1/3）……31
第 25 図　包含層出土遺物実測図（縮尺 1/3、2/3）……32

第３章　来住町遺跡 12 次調査

第 26 図　調査地位置図（縮尺 1/1,000）……42
第 27 図　Ａ区・Ｂ区測量図（縮尺１/400）……42
第 28 図　Ａ区遺構配置図・土層図（縮尺 1/80）……43
第 29 図　ＳＢ１測量図（縮尺 1/60）……44
第 30 図　ＳＢ１出土遺物実測図（縮尺 1/3）……44
第 31 図　掘立３測量図（縮尺 1/60）……45
第 32 図　ＳＸ１測量図（縮尺 1/30）……46

第 33 図　ＳＸ１出土遺物実測図（縮尺 1/3）……46
第 34 図　ＳＸ２測量図（縮尺 1/30）……46
第 35 図　Ａ区ＳＰ・地点不明出土遺物実測図（縮尺 1/3）……46
第 36 図　Ｂ区遺構配置図（縮尺 1/120）……47
第 37 図　Ｂ区北壁・西壁土層図（縮尺 1/100）……48
第 38 図　掘立１測量図（縮尺 1/60）……49
第 39 図　掘立２測量図・出土遺物実測図（縮尺 1/3、1/4、1/60）……50
第 40 図　ＳＫ１測量図・出土遺物実測図（縮尺 1/2、1/3、1/40）……51
第 41 図　ＳＤ１測量図（縮尺 1/20、1/40 ）……52
第 42 図　ＳＸ３測量図（縮尺１/80）……53
第 43 図　ＳＸ３出土遺物実測図（1）（縮尺 1/3、2/3、1/4）……54
第 44 図　ＳＸ３出土遺物実測図（2）（縮尺 1/2）……55
第 45 図　ＳＸ４測量図（縮尺 1/40）……56
第 46 図　Ｂ区地点不明出土遺物実測図（1）（縮尺 1/3、1/4）……56
第 47 図　Ｂ区地点不明出土遺物実測図（2）（縮尺 1/2、2/3）……57

第４章　久米窪田森元遺跡４次調査

第 48 図　周辺調査地位置図（縮尺 1/5.000）……63
第 49 図　調査地位置図（縮尺 1/2.500）……64
第 50 図　遺構配置図（縮尺 1/200）……65
第 51 図　１区北壁土層図（縮尺 1/50）……67
第 52 図　１区東壁土層図（縮尺 1/50）……68
第 53 図　ＳＲ５測量図（縮尺 1/80）……70
第 54 図　ＳＲ５出土遺物実測図（縮尺 1/4）……71
第 55 図　掘立１測量図（縮尺 1/50）……72
第 56 図　掘立２測量図（縮尺 1/50）……73
第 57 図　ＳＲ４測量図（縮尺 1/80）……77
第 58 図　ＳＲ４出土遺物実測図（1）（縮尺 1/3）……78
第 59 図　ＳＲ４出土遺物実測図（2）（縮尺 1/3）……79
第 60 図　ＳＲ４出土遺物実測図（3）（縮尺 1/3）……80
第 61 図　土器溜り測量図（縮尺 1/50）……81
第 62 図　土器溜り出土遺物実測図（1）（縮尺 1/3）……82
第 63 図　土器溜り出土遺物実測図（2）（縮尺 1/6）……83
第 64 図　中世の柱穴出土遺物実測図（縮尺 1/3）……85
第 65 図　Ⅳ②層出土遺物実測図（縮尺 1/3）……85
第 66 図　追加資料・久米窪田森元遺跡３次調査出土遺物実測図（縮尺 1/3）……85
第 67 図　来住町遺跡周辺調査地位置図（縮尺 1/2,000）……95
第 68 図　久米窪田遺跡周辺調査地位置図（縮尺 1/4,000）……96

表 目 次

第１章　はじめに

表 1　調査地一覧 ……4

第２章　来住町遺跡８次調査

表 2　検出遺構一覧 ……9
表 3　竪穴住居一覧 ……34
表 4　掘立柱建物一覧
表 5　溝一覧
表 6　自然流路一覧 ……35
表 7　土坑一覧
表 8　柱穴一覧
表 9　ＳＢ１出土遺物観察表　土製品 ……36
表10　掘立１・２出土遺物観察表　土製品 ……37
表11　ＳＫ１出土遺物観察表　金属製品
表12　掘立４出土遺物観察表　土製品
表13　ＳＤ１出土遺物観察表　土製品
表14　ＳＲ１下層出土遺物観察表　土製品
表15　ＳＲ１上層出土遺物観察表　土製品 ……39
表16　ＳＲ１上層出土遺物観察表　金属製品
表17　ＳＲ１地点不明出土遺物観察表　土製品 ……40
表18　ＳＲ１地点不明出土遺物観察表　金属製品
表19　ＳＤ４出土遺物観察表　土製品
表20　包含層出土遺物観察表　土製品
表21　包含層出土遺物観察表　石製品

第３章　来住町遺跡 12 次調査

表 22　竪穴建物一覧 ……58
表 23　掘立柱建物一覧
表 24　土坑一覧
表 25　溝一覧
表 26　性格不明遺構一覧 ……59
表 27　ＳＢ１出土遺物観察表　土製品
表 28　ＳＢ１出土遺物観察表　石製品
表 29　ＳＸ１出土遺物観察表　土製品
表 30　ＳＰ出土遺物観察表　土製品

表 31　Ａ区地点不明出土遺物観察表　土製品
表 32　掘立２出土遺物観察表　土製品 ……60
表 33　掘立２出土遺物観察表　石製品
表 34　ＳＫ１出土遺物観察表　土製品
表 35　ＳＫ１出土遺物観察表　石製品
表 36　ＳＸ３出土遺物観察表　土製品
表 37　ＳＸ３出土遺物観察表　金属製品 ……61
表 38　ＳＸ３出土遺物観察表　石製品
表 39　Ｂ区地点不明出土遺物観察表　土製品 ……62
表 40　地点不明出土遺物観察表　石製品
表 41　地点不明出土遺物観察表　金属製品

第４章　久米窪田森元遺跡４次調査

表 42　掘立柱建物址一覧 ……87
表 43　土坑一覧
表 44　溝一覧
表 45　自然流路一覧
表 46　土器溜り一覧
表 47　ＳＲ５出土遺物観察表　土製品 ……88
表 48　ＳＲ５出土遺物観察表　木製品
表 49　ＳＫ９出土遺物観察表　木製品
表 50　ＳＲ３出土遺物観察表　木製品
表 51　ＳＲ４出土遺物観察表　土製品
表 52　ＳＲ４出土遺物観察表　木製品 ……90
表 53　土器溜り出土遺物観察表　土製品 ……91
表 54　土器溜り出土遺物観察表　土製品　瓦 ……92
表 55　ＳＰ出土遺物観察表　土製品
表 56　ＳＰ出土遺物観察表　石製品
表 57　Ⅳ②層出土遺物観察表　土製品
表 58　久米窪田森元遺跡３次調査（追加資料）　土製品

写真図版目次

第２章　来住町遺跡８次調査

図版 1　1．北半部遺構検出状況（南より）　2．南半部遺構検出状況（南より）
図版 2　1．北半部完掘状況（南より）　2．南半部完掘状況（南より）
図版 3　1．西壁土層（東より）　2．ＳＢ１検出状況（北より）
　　3．掘立１検出状況（北東より）

図版４　１．掘立２検出状況（北西より）　　２．ＳＲ１検出状況（東より）
　　３．足跡①検出状況（西より）
図版５　１．ＳＲ１下層出土遺物
図版６　１．出土遺物（ＳＲ１上層：55 ～ 57・70・74、ＳＲ１地点不明：75・78・86・87、
　　ＳＫ１：12・13、包含層：92）

第３章　来住町遺跡 12 次調査

図版７　１．Ａ区遺構検出状況（西より）　　２．Ａ区遺構完掘状況（西より）
　　３．Ａ区遺構完掘状況（南西より）
図版８　１．Ｂ区遺構検出状況（北より）
図版９　１．Ｂ区遺構完掘状況（北より）　　２．掘立１・掘立２完掘状況（北より）
図版 10　１．ＳＫ１遺物出土状況（南より）　２．ＳＫ１完掘状況（南東より）
図版 11　１．ＳＸ３遺物出土状況（南東より）　２．ＳＸ３完掘状況（南西より）
図版 12　１．出土遺物（ＳＢ１：３、ＳＫ１：14、ＳＸ３：20・26・38・40・41、
　　地点不明：49・52）

第４章　久米窪田森元遺跡４次調査

図版 13　１．１区遺構検出状況（南東より）　２．１区遺構検出状況（西より）
図版 14　１．１区遺構完掘状況（西より）
図版 15　１．２区遺構検出状況（南東より）　２．２区遺構完掘状況（東より）
図版 16　１．３区遺構検出状況（南東より）　２．３区遺構完掘状況（南東より）
図版 17　１．ＳＲ５北半部完掘状況（北より）　２．掘立１・掘立２完掘状況（東より）
　　３．掘立１、Ｐ１０８・Ｐ１０９半裁状況（南より）
図版 18　１．ＳＫ８完掘状況（東より）　　２．ＳＫ９完掘状況（東より）
　　３．ＳＤ３・ＳＤ４完掘状況（北西より）
図版 19　１．ＳＲ４遺物出土状況（北東より）　２．ＳＲ４完掘状況（北東より）
　　３．ＳＰ１１７柱材出土状況（南西より）
図版 20　１．土器溜り遺物出土状況（西より）　２．土器溜り遺物出土状況（北より）
図版 21　１．ＳＲ５出土遺物
図版 22　１．出土遺物（ＳＫ９：13、ＳＲ３：14～17、ＳＲ４①：26～28・34・35）
図版 23　１．ＳＲ４出土遺物 ②
図版 24　１．ＳＲ４出土遺物 ③
図版 25　１．出土遺物（ＳＲ４④：62・63・桃核、土器溜り①：69・71・74・75・82・83）
図版 26　１．出土遺物（土器溜り②：85・86・89・90、柱穴：91・92、
　　久米窪田森元遺跡３次：93～97）

第1章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

平成９年～平成13年の間に、松山市来住町２４３番３、242番１の一部、230番の一部、237番1, 240番1、久米窪田町８５９番１、８６０番１、の３ヶ所について、埋蔵文化財の確認願いが開発関係者より、松山市教育委員会文化教育課に提出された。確認願いが申請された来住町は松山市が指定する『№１２７ 来住廃寺跡』、久米窪田町は『№１２９ 鷹子遺物包含地２』内にあり周知の遺跡地として知られており、各申請地周辺では、現在までに数々の発掘調査が行われている。

文化教育課では、確認申請が提出された３地点について埋蔵文化財の有無と遺跡の範囲や性格を確認するため、順次試掘調査を実施した。調査の結果、申請地内には遺構や遺物が検出され、遺跡の存在が想定される状況にあった。

試掘調査の結果より、文化教育課と申請者及び関係者は発掘調査について協議を行い、弥生時代から古代の集落域やその構造を明らかにすることを目的とした調査を実施することとした。

発掘調査は、松山市立埋蔵文化財センター、財団法人生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体になり、申請者及び関係者の協議のもと、申請者および関係者の協力を受け平成９年、平成１０年、平成13年に実施した。

第２節　調査・刊行組織

来住町遺跡８次調査　調査組織（平成１０年４月１日時点）

松山市埋蔵文化財センター	所　　長	河口　雄三
	次　　長	田所　延行
	係　　長	田城　武志
	主　　任	栗田　正芳
	調　査　員	相原　秀仁
	調　査　員	宮内　慎一

来住町遺跡１２次調査　調査組織（平成１３年４月１日時点）

松山市埋蔵文化財センター	所　　長	中川　　隆
	専　門　監	野本　　力
	次長兼調査係長	西尾　幸則
	調　査　員	髙尾　和長

久米窪田森元遺跡４次調査　調査組織（平成９年４月１日時点）

松山市埋蔵文化財センター	所　　長	河口　雄三
	次　　長	田所　延行
	係　　長	田城　武志
	主　　任	栗田　正芳
	調　査　員	山本　健一

刊行組織（平成２４年度）

松山市教育委員会	教　育　長	山本　昭弘（１０月２日～）
		山内　　泰（前任～１０月１日）
	事務局長	嶋　　啓吾
	企　画　官	渡部　満重
	企　画　官	前田　昌一
文化財課	課　　長	駒澤　正憲
	主　　幹	篠原　昭二
	主　　査	楠　　寛輝

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

	理　事　長	一色　哲昭
	事務局長	松澤　史夫
	事務局次長	近藤　　正
	施設利用推進部長	玉井　弘幸
埋蔵文化財センター	所　　長	田城　武志
	主　　査	栗田　茂敏
	主　　任	髙尾　和長（調査担当）
	調　査　員	大西　朋子（写真担当）

第３節　立地・環境（第１図）

（１）立地

道後平野には高縄山系に源を発し、北東から南西に流れる石手川と、四国山脈東三方が森に水源を持ち、西流する重信川の２大河川がある。この２河川はいくつかの支流を集めながら西流し、海岸から約４㎞で合流し、伊予灘に注いでいる。報告を行う３遺跡は松山平野の南東部にあり、重信川、石手川の支流の小野川、堀越川、内川により形成された扇状地上に位置する。

（２）環境

ここでは３遺跡がある来住・久米地区を中心とした遺跡について、時代別に概要を説明する。

旧石器時代

鷹子新畑遺跡の北部の丘陵上にある五郎兵衛谷古墳の調査に伴って、サヌカイト製の角錐状石器が出土している。平井町の山田池では、ナイフ形石器が表面採集されている。

縄文時代

久米窪田森元遺跡からは、土坑内から後期後葉の一括資料である貴重な土器片が 40 点余り出土している。晩期では、久米高畑遺跡 36 次調査より円形竪穴式住居址、久米高畑遺跡 26 次調査と同 35 次調査からは、土坑が確認されている。

弥生時代

弥生時代の遺跡は前期から後期まで、集落関連の遺構と遺物の検出例が急増する。特に注目されるのは、前期から中期初頭の大型の溝を複数検出した久米高畑遺跡 23 次調査、25 次調査、28 次調査、29 次調査があり、環濠集落の存在が明らかになりつつある。また土坑も 120 基以上検出され、その中には断面形態より貯蔵穴と考えられるものがある。

中期では来住廃寺 15 次調査の包含層中から、凹線文期の土器片が多数出土している。久米窪田古屋敷Ｃ遺跡からは、Ｌ字状に折れ曲がる大型の溝から該期の土器が出土している。

後期では久米高畑遺跡 35 次調査、50 次調査、59 次調査、61 次調査、65 次調査で竪穴住居が検出されている。65 次調査検出の竪穴住居には、ベッド状遺構が付設されている。床面には焼土と炭化物が確認できることから、火災により焼失したか住居廃絶時の祭祀行為として火が放たれたことを示すものと考えられる。

古墳時代

古墳時代の遺構は、来住町遺跡８次調査、久米高畑遺跡 10 次調査、26 次調査、35 次調査、60 次調査、64 次調査において竪穴住居、掘立柱建物、土坑、溝が検出されている。中ノ子遺跡の東にある開遺跡では方形住居、掘立柱建物が検出され、出土遺物から６世紀初頭から後半までの住居の変遷が検討されている。平井遺跡５次調査、６次調査、下苅屋３次調査、古市遺跡１次調査、２次調査、五楽遺跡２次調査では竪穴住居、掘立柱建物、土坑などの集落関連遺構が多数検出されている。出土した遺物には生焼けや焼け歪みのある須恵器が含まれており、これらの遺跡や周辺地域は松山平野東部古窯址群からの須恵器運搬に伴う中継地点あるいは集積地として機能していた可能性が高いと考え

られる。古墳では平野部にタンチ山古墳、前方後円墳の二つ塚古墳と波賀部神社古墳、丘陵部に五郎兵衛谷古墳がある。

古代

来住台地上には、松山市の国指定史跡久米官衙遺跡群がある。史跡内の調査は現在までに120ヶ所以上の調査が行われ、古代の回廊状遺構、評庁院、正倉院が発見され地方官衙の様相が明らかとなりつつある。

中世

中世では鷹子新畑遺跡３次調査、北久米遺跡７次調査、来住町遺跡１４次調査において掘立柱建物や井戸などの集落関連遺構を検出している。一方、来住町遺跡６次調査からは水田耕作に伴う鋤址などの生産関連遺構を検出している。

表１　調査地一覧

No.	遺跡名	所　在	調査担当	申請面積㎡	調査期間
1	来住町遺跡８次調査	来住町242番１の一部、243番	相原秀仁 宮内慎一	1,272	H 10.4.16 ～ H10.7.17
2	来住町遺跡12次調査	来住町230番の一部、237番1、240番1	髙尾和長	1,430.56	H 13.4.9 ～ H13.5.25
3	久米窪田森元遺跡４次調査	久米窪田町859番１、860番１	山本健一	1,330.01	H 9.12.15 ～ H.10.3.31

【文献】

重松佳久　1992 「小野川水系における旧石器文化」『来住・久米地区の遺跡』
松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

栗田茂敏　1989 「久米窪田森元遺跡」松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ　松山市教育委員会

2000 「古市遺跡」「下苅屋遺跡」松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

相原秀仁　2001 「五楽遺跡Ⅱ次調査」松山市埋蔵文化財調査年報12
松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

小笠原善治 1998 「久米高畑遺跡36次調査」松山市埋蔵文化財調査年報Ⅹ
松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

小玉亜紀子 1997 「久米高畑遺跡26次調査」松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ
松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

河野史知　2004 「久米高畑遺跡35次調査」『来住・久米地区の遺跡Ⅴ』
松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

橋本雄一　1995 「久米高畑遺跡23次調査」松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ
松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

髙尾和長　2000 「久米高畑遺跡25次調査」松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

宮内慎一　1992 「久米窪田古屋敷Ｃ遺跡」『来住・久米地区の遺跡』
松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

2000 「久米高畑遺跡27次調査」『来住・久米地区の遺跡Ⅴ』
松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

相原秀仁　1999 「来住廃寺７次調査」松山市埋蔵文化財調査年報11
松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

宮内慎一　1996 「開遺跡１次調査」『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

森光晴　1986 「波賀部神社古墳」「二ツ塚」『愛媛県史　資料編　考古』 愛媛県史編纂委員会

栗田茂敏　1996 「駄馬姥ヶ懐窯址」『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

(S=1:25,000)

❶ 来住町遺跡８次調査　❷ 来住町遺跡１２次調査　❸ 久米窪田森元遺跡４次調査

❹ 五楽遺跡２次調査　❺ 古市遺跡１次調査　❻ 古市遺跡２次調査　❼ 下苅屋遺跡　❽ 下苅屋遺跡３次調査　❾ 平井遺跡５次調査
❿ 平井遺跡６次調査　⓫ 五郎兵衛谷古墳　⓬ 鷹子新畑遺跡　⓭ 鷹子新畑遺跡３次調査　⓮ タンチ山古墳　⓯ 久米窪田森元遺跡
⓰ 久米窪田古屋敷Ｃ遺跡　⓱ 二つ塚古墳　⓲ 北久米遺跡７次調査　⓳ 南久米沖台Ｂ遺跡　⓴ 来住町遺跡６次調査　㉑ 来住町遺跡 14 次調査
㉒ 久米高畑遺跡 10 次調査　㉓ 久米高畑遺跡 23 次調査　㉔ 久米高畑遺跡 25 次調査　㉕ 久米高畑遺跡 26 次調査　㉖ 久米高畑遺跡 28 次調査　㉗ 久米高畑遺跡 29 次調査
㉘ 久米高畑遺跡 35 次調査　㉙ 久米高畑遺跡 50 次調査　㉚ 久米高畑遺跡 59 次調査　㉛ 久米高畑遺跡 60 次調査　㉜ 久米高畑遺跡 61 次調査　㉝ 久米高畑遺跡 64 次調査
㉞ 久米高畑遺跡 65 次調査　㉟ 来住廃寺遺跡 15 次調査　㊱ 開遺跡　㊲ 中ノ子Ｉ遺跡　㊳ 波賀部神社古墳

第１図　　調査地周辺遺跡分布図

第２図　　来住町遺跡１次～１３次調査位置図

第２章　来住町遺跡８次調査

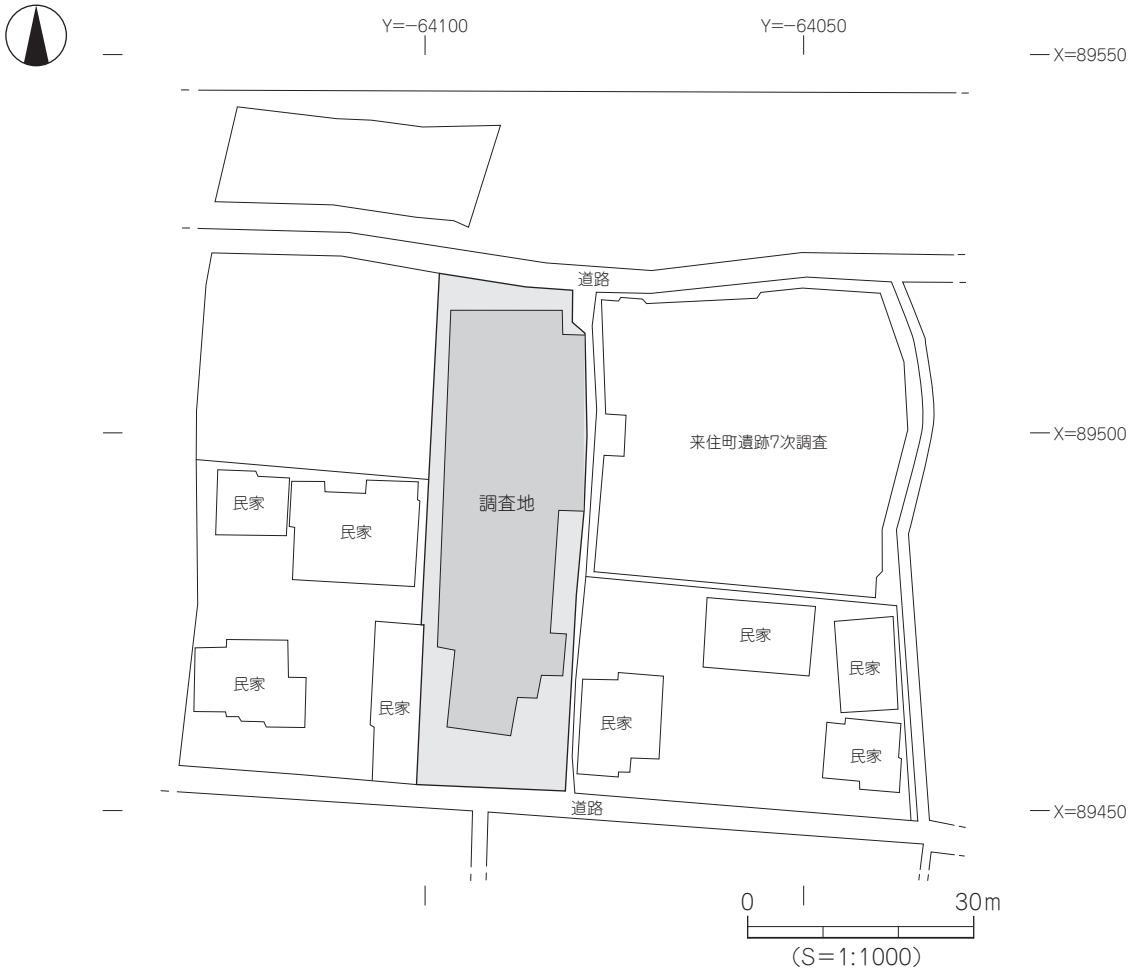
第１節　調査の経緯

（１）調査に至る経緯

本調査は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『No.127　久米官衛遺跡群（旧来住廃寺跡）』内における宅地開発に伴う事前発掘調査である。調査地は来住台地から小野川に至る微高地上、標高約40.6ｍ前後に立地する。平成９年現在、来住町遺跡としては、７回の発掘調査が実施され、弥生時代から中世までの集落関連遺構や遺物が数多く確認されている。特に、本調査地に隣接する来住町遺跡７次調査では、古墳時代の竪穴住居や古代の掘立柱建物のほか、自然流路が発見されている。

これらのことから、当該地における埋蔵文化財の有無を確認するため、1997（平成９）年３月に財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は試掘調査を実施した。その結果、竪穴住居や溝のほかに自然流路を検出し、遺物は須恵器片や土師器片が出土した。この結果を受け､埋文センターと申請者である大西美鈴氏との間で遺跡の取り扱いについての協議が行われ、宅地開発によって消失する遺跡について記録保存のための発掘調査を実施することになった。

発掘調査は調査地や周辺地域の古墳時代や古代の集落構造解明を主目的とし、埋文センターが主体となり、申請者及び株式会社愛媛飼料の協力のもと、1998（平成10）年４月より開始した。



第３図　　調査地測量図

（２）調査の経緯

1998（平成 10）年４月 16 日、屋外調査を開始する。排土置き場の都合上、調査は北半部と南半部とに分けて実施した。申請者の立会いのもとに調査区を設定し、北半部から重機の使用により表土掘削を行う。５月８日より遺構検出作業を開始し、掘立柱建物や溝、自然流路、足跡を検出する。５月 22 日より遺構の掘り下げや測量作業を行い、６月 17 日、北半部の調査を終了する。引き続き、６月 23 日より、南半部の調査を開始する。南半部では、竪穴住居や掘立柱建物、土坑を検出する。７月２日より遺構の掘り下げや測量作業を行い、７月 10 日、完掘状況写真を撮影する。重機の使用により埋め戻し作業を行い、７月 17 日、屋外調査を終了する。

（３）調査組織

所 在 地：松山市来住町 242 番１の一部、243 番
調査期間：1998（平成 10）年４月 16 日～同年７月 17 日
調査面積：1,272㎡
調査協力：大西　美鈴
　　株式会社　愛媛飼料
調査主体：財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
調査担当：相原　秀仁・宮内　慎一

第２節　層　位

調査地は標高約 40.6 m前後に立地し、調査以前は水田として利用されていた。調査地の基本層位は、以下の六層である。（第４・５図、図版３）

第Ⅰ層：近現代の水田耕作に伴う耕土〔灰オリーブ色土（5Y5/4)〕で、層厚５～ 22cmを測る。
第Ⅱ層：近世～近現代の水田耕作に伴う耕土で、土色の違いにより五種類に分層される。
　第Ⅱ①層－灰白色土（10YR8/2）で調査区全域にみられ、層厚２～ 8cmを測る。
　第Ⅱ②層－黄褐色土（10YR5/6）で調査区全域にみられ、層厚２～ 5cmを測る。
　第Ⅱ③層－褐灰色土（10YR6/1）で調査区南半部にみられ、層厚２～ 6cmを測る。
　第Ⅱ④層－灰黄褐色土（10YR5/2）で調査区全域にみられ、層厚３～ 15cmを測る。本層中からは、江戸時代の陶磁器片や土師器片が少量出土した。
　第Ⅱ⑤層－灰黄褐色土（10YR4/2）で調査区全域にみられ、層厚３～ 10cmを測る。
第Ⅲ層：黒褐色（10YR3/1）を呈する粘質土で、調査区北半部に堆積がみられ、層厚５～ 30cmを測る。本層下面にて、自然流路や溝等を検出した。
第Ⅳ層：黒褐色（2.5Y3/1）を呈するシルト質の土壌で、調査区北東部と南西部に堆積がみられ、層厚５～ 40cmを測る。本層下面にて、掘立柱建物や足跡を検出した。
第Ⅴ層：黒褐色（10YR3/1）を呈する粘質土に、黄色シルト（2.5Y7/8）がブロック状に混入する土

層で、調査区ほぼ全域に堆積がみられ、層厚５～15cmを測る。本層下面にて、掘立柱建物を検出した。

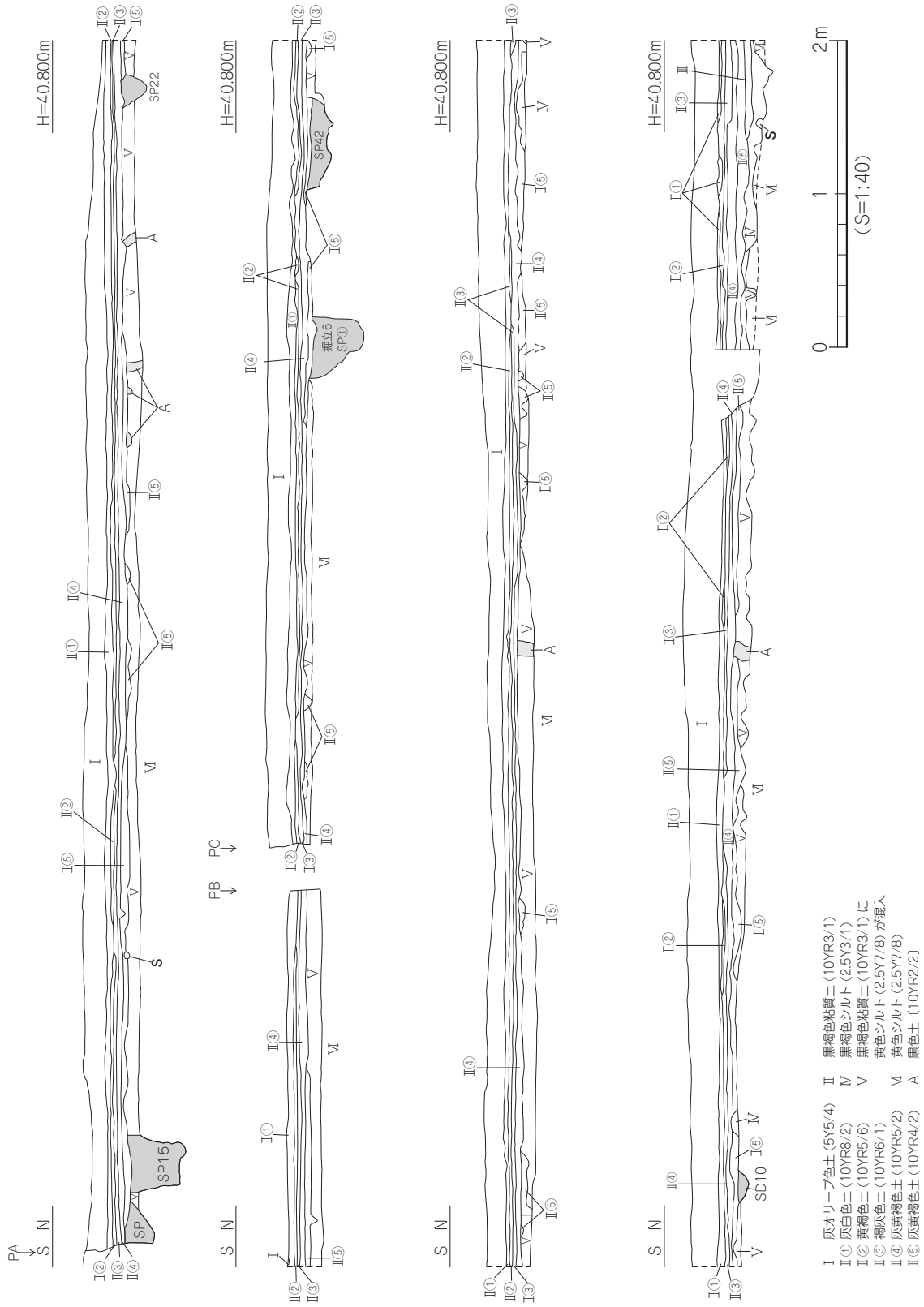
第Ⅵ層：黄色シルト（2.5Y7/8）で、来住台地上で検出される地山と呼ばれる土壌である。調査では本層上面にて、すべての遺構を検出した。本層上面の標高を測量すると、調査区南東部が最も高く、北西部に向けて緩やかな傾斜をなす（比高差 15cm）。

検出遺構や出土遺物等より、第Ⅴ層は古墳時代、第Ⅲ層・Ⅳ層は古代までに堆積した土層と考えられる。なお、調査にあたり調査区内を５m四方のグリッドに分けた（第６図）。

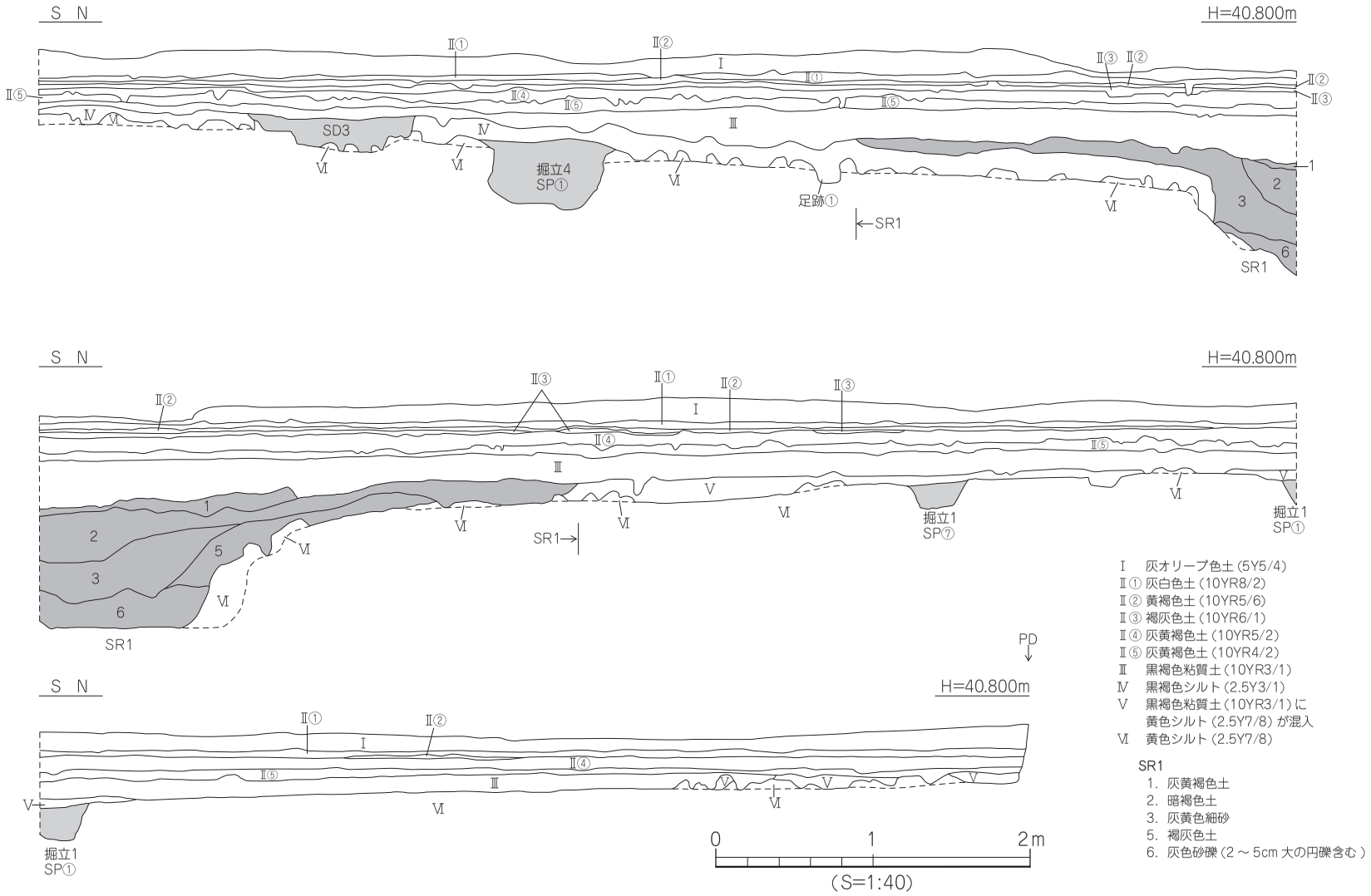
今回の調査では、竪穴住居１棟、掘立柱建物９棟、溝 10 条、自然流路１条、土坑１基、柱穴 122 基及び足跡を検出した。遺物は弥生土器や土師器、須恵器、瓦器のほか、石器が数点出土した。なお、遺物の出土量は遺物収納用箱（44 × 60 × 14cm）約 10 箱分である。検出した遺構は、表２に記す。

表２　検出遺構一覧

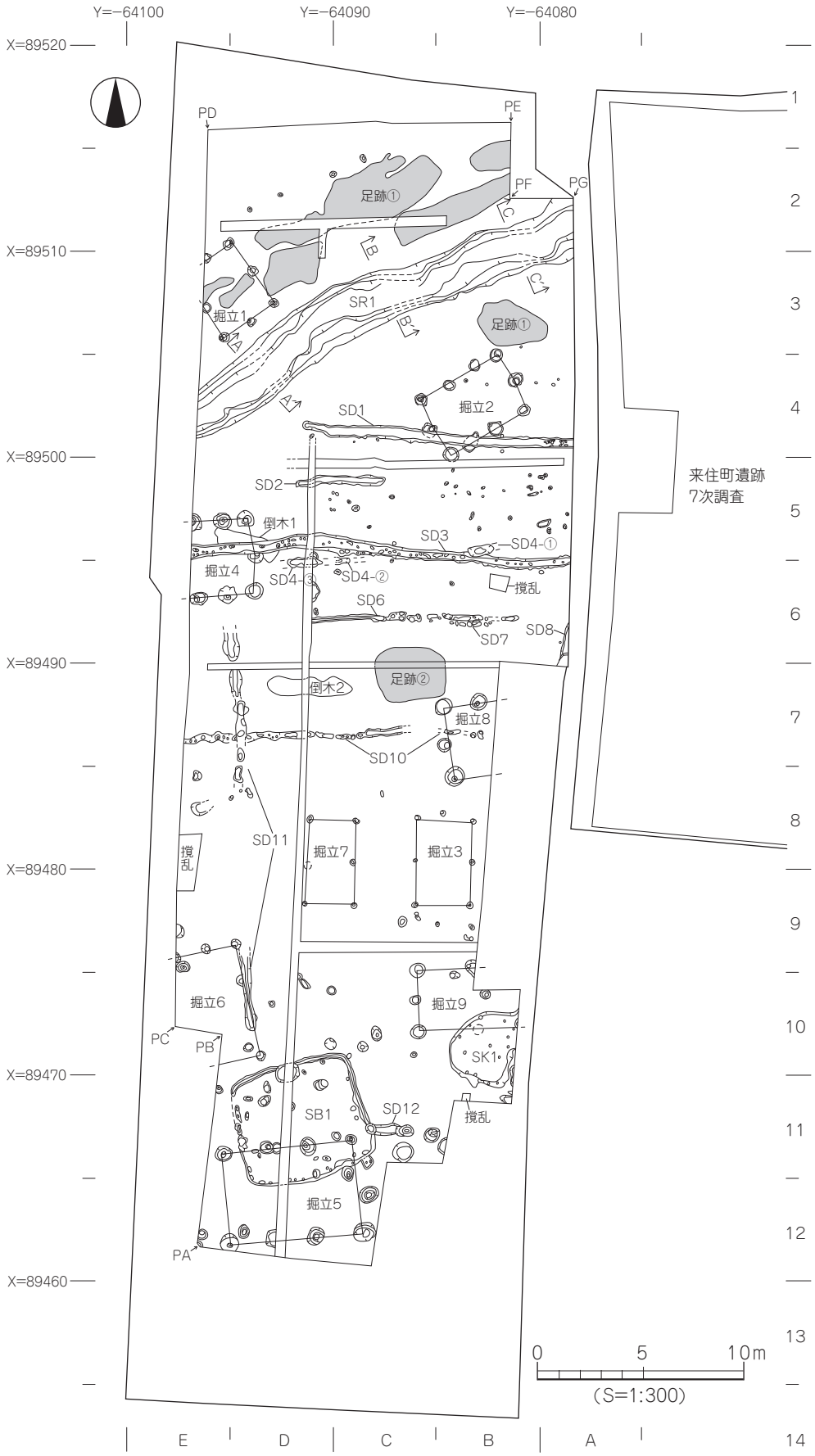
時　期	検　出　遺　構					
	竪穴住居	掘立柱建物	溝	自然流路	土　坑	足　跡
古墳時代後期	SB1	掘立１ 掘立２	SD12	SR1	SK1	
７世紀前半		掘立４ 掘立５ 掘立６ 掘立８ 掘立９		SR1		
７世紀中葉			SD1 SD2 SD3 SD6 SD7 SD10 SD11	SR1		足跡①
７世紀後半				SR1		
中　世		掘立３ 掘立７	SD4 SD8			足跡②


H=40.800m
PA
S N
SP22
SP15
SP
PB
PC
SP42
掘立6
SP①
SD10
0
1
2m
(S=1:40)
Ⅰ　灰オリーブ色土（5Y5/4）
Ⅱ① 灰白色土（10YR8/2）
Ⅱ② 黄褐色土（10YR5/6）
Ⅱ③ 褐灰色土（10YR6/1）
Ⅱ④ 灰黄褐色土（10YR5/2）
Ⅱ⑤ 灰黄褐色土（10YR4/2）
Ⅲ　黒褐色粘質土（10YR3/1）
Ⅳ　黒褐色シルト（2.5Y3/1）
Ⅴ　黒褐色粘質土（10YR3/1）に
黄色シルト（2.5Y7/8）が混入
Ⅵ　黄色シルト（2.5Y7/8）
Ａ　黒色土（10YR2/2）

第４図　西壁土層図（1）


S N
H=40.800m
SD3
掘立4
SP①
足跡①
SR1
掘立1
SP⑦
掘立1
SP①
PD
I 灰オリーブ色土 (5Y5/4)
II① 灰白色土 (10YR8/2)
II② 黄褐色土 (10YR5/6)
II③ 褐灰色土 (10YR6/1)
II④ 灰黄褐色土 (10YR5/2)
II⑤ 灰黄褐色土 (10YR4/2)
III 黒褐色粘質土 (10YR3/1)
IV 黒褐色シルト (2.5Y3/1)
V 黒褐色粘質土 (10YR3/1) に
黄色シルト (2.5Y7/8) が混入
VI 黄色シルト (2.5Y7/8)
SR1
1. 灰黄褐色土
2. 暗褐色土
3. 灰黄色細砂
5. 褐灰色土
6. 灰色砂礫 (2 ～ 5cm 大の円礫含む)
0 1 2m
(S=1:40)

第５図　　西壁土層図（2）


Y=−64100
Y=−64090
Y=−64080
X=89520
X=89510
X=89500
X=89490
X=89480
X=89470
X=89460
PD
PE
PF
PG
PA
PB
PC
足跡①
足跡②
SR1
掘立1
掘立2
掘立3
掘立4
掘立5
掘立6
掘立7
掘立8
掘立9
SD1
SD2
SD3
SD4-①
SD4-②
SD4-③
SD6
SD7
SD8
SD10
SD11
SD12
倒木1
倒木2
撹乱
SB1
SK1
来住町遺跡
7次調査
0
5
10m
(S=1:300)
E
D
C
B
A
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14

第６図　　遺構配置図

第３節　遺構と遺物

本調査では、古墳時代から中世までの遺構を検出した。

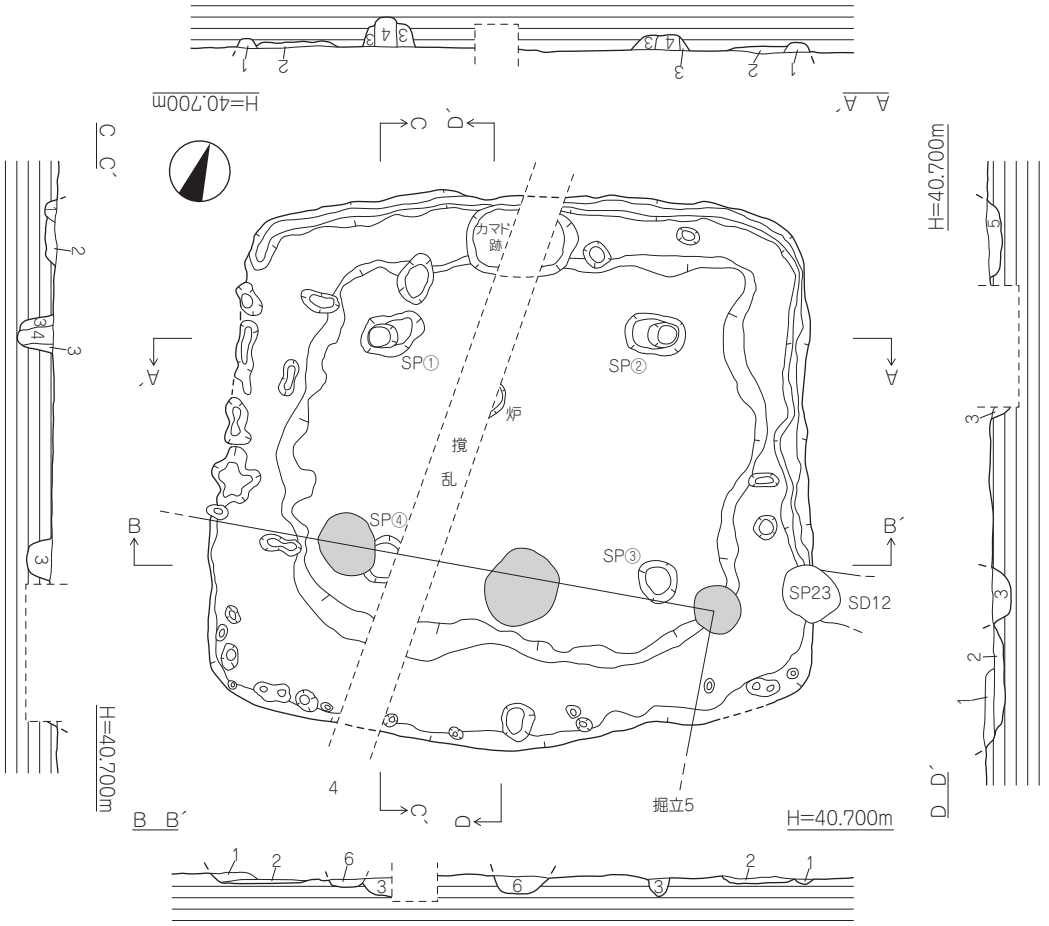
（１）古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、竪穴住居１棟、掘立柱建物２棟、溝１条、土坑１基である。

１）竪穴住居（ＳＢ）

ＳＢ１（第７・８図、図版３）

調査区南半部、C10 ～ D12 区に位置する方形竪穴住居であるが、第Ⅴ層掘り下げ時に平面プランが不明確であったため、第Ⅵ層上面まで掘り下げた結果、壁体は大半が消失し、住居床面にて柱穴や周壁溝のみを検出した。SB1 南側は掘立５柱穴に削平され、住居東側壁体は SP23 に一部削平されている。住居中央部には、北東－南西方向の撹乱が存在する。東西長 6.15 m、南北長 5.90 m、壁高 8cmを測る住居で、埋土は黒褐色土単層である。住居床面にて 10 数基の柱穴を検出した。このうち、SP ①・②・③・④の４本は主柱穴と考えられ、規模は径 60 ～ 70cm、深さ 18 ～ 35cmを測る。柱穴



第７図　　ＳＢ１測量図

掘り方埋土は、黒褐色土に黄色シルトが斑点状に少量混入するものである。なお、柱痕はSP①・②で検出され、径25cmを測り、柱痕埋土は黒色土である。このほか、住居床面にて周壁溝を検出した。周壁溝はほぼ全周するが、住居南壁で一部途切れる箇所がある。また、住居南壁と西壁側では小ピットが列をなす。

住居床面中央部の凹凸部分には、貼床を施した痕跡が認められた。貼床は黒褐色土と黄色シルトの混合土を使用し、6～8cm程度の厚みで施されている。

住居北側壁体中央部にて、カマド跡と思われる焼土塊を検出した。また、住居中央部には径35～40cm、深さ8cmを測る炉址を検出した。炉址内からは、少量ではあるが焼土を検出した。

遺物は住居埋土中より、須恵器や土師器が出土した。

出土遺物（1～9）

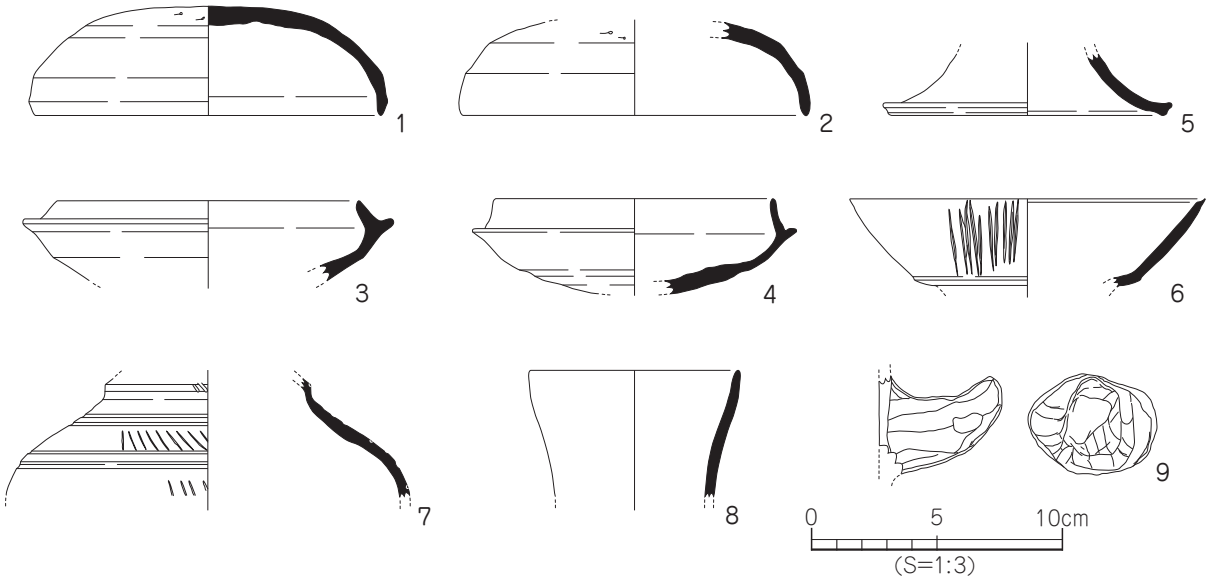
1・2は須恵器坏蓋。天井部は扁平で、口縁端部は尖り気味に仕上げる。3・4は須恵器坏身。3のたちあがりは低く内傾し、端部は尖る。4のたちあがり端部は尖り気味に丸く仕上げ、受部端に沈線状の凹みが巡る。5は高坏の脚部で、脚端部は上下方に肥厚し、脚端面はナデ凹む。6は甕の口縁部片で、口縁端部は内傾し、口縁部外面には斜線文を施す。7は短頸壺で、肩部に沈線と列点文を施す。8は提瓶の口縁部で、口縁端部は尖り気味に仕上げる。9は土師器甑の把手部で、断面形態は舌状を呈する。

時期：出土した須恵器の特徴より、SB1の廃棄・埋没時期は6世紀後半とする。

２）掘立柱建物（掘立）

掘立１（第9図、図版3）

調査区北西部、D2～E3区で検出した建物で、建物上面は第Ⅴ層が覆う。2間×2間の南北棟で、桁行長3.56ｍ、梁行長3.02ｍを測る。各柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径36～56cm、深さ5～24cmを測る。柱穴掘り方埋土は、黒褐色土に黄色シルトがブロック状に混入するも



第８図　　ＳＢ１出土遺物実測図

のである。柱痕は 4 基の柱穴で検出され、柱痕径 14 ～ 20㎝を測る。柱痕埋土は、黒色土である。遺物は SP ⑤内より須恵器坏蓋が出土したほか、各柱穴内より須恵器片や土師器片が少量出土した。

出土遺物（10）

10 は SP ⑤出土の須恵器坏蓋。天井部は扁平で、口縁端部は尖り気味に仕上げる。天井部 1/3 の範囲に、回転ヘラケズリ調整を施す。

時期：出土した須恵器の特徴より掘立 1 は古墳時代後期、6 世紀後半以降の建物と考えられる。

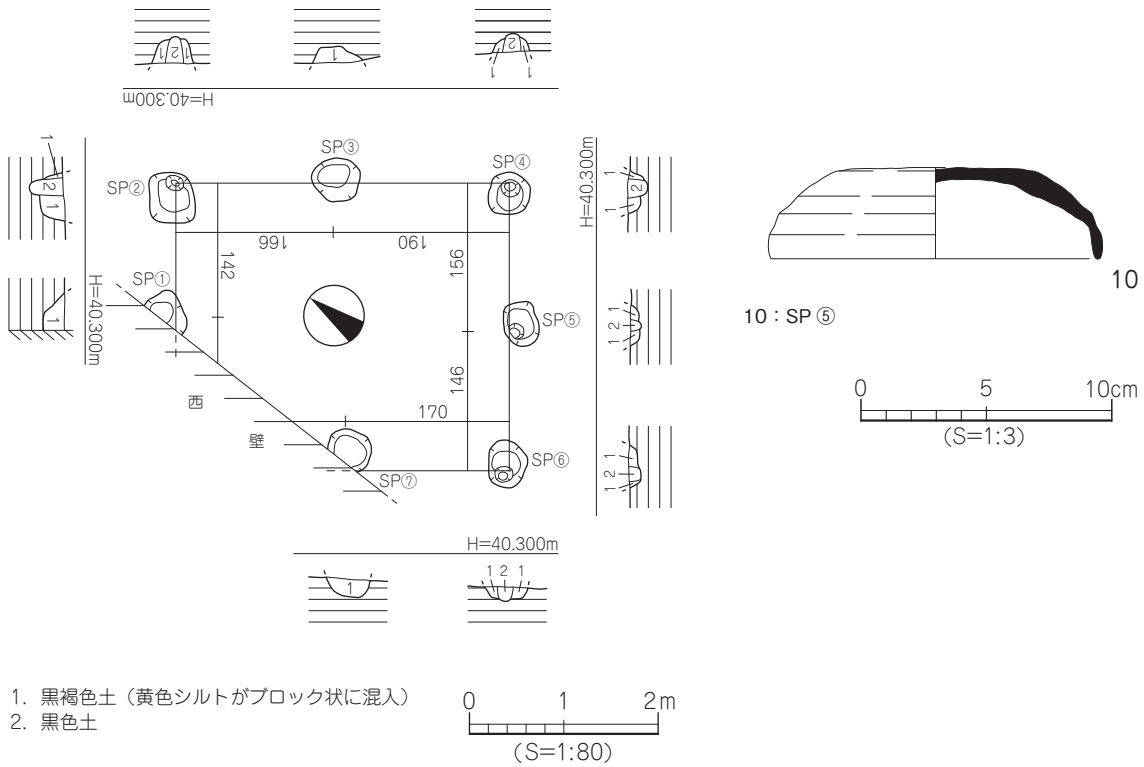
掘立 2（第 10 図、図版 4）

調査区北東部、B3 ～ C5 区で検出した建物で、建物上面は第 V 層が覆う。また、建物柱穴は溝 SD1 により一部削平されている。3 間 × 2 間の東西棟で、桁行長 4.24 m、梁行長 2.99 m を測る。各柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径 50 ～ 80㎝、深さ 20 ～ 44㎝を測る。柱穴掘り方埋土は二層あり、1 層は黒褐色土（黄色シルトがブロック状に混入）、2 層は暗褐色土（黄色シルトがブロック状に混入）である。柱痕は 4 基の柱穴で検出され、径 25 ～ 30㎝を測る。柱痕埋土は、黒色土である。遺物は、柱穴掘り方埋土中より須恵器や土師器の小片が数点出土した。図化しうる遺物を 1 点掲載した。

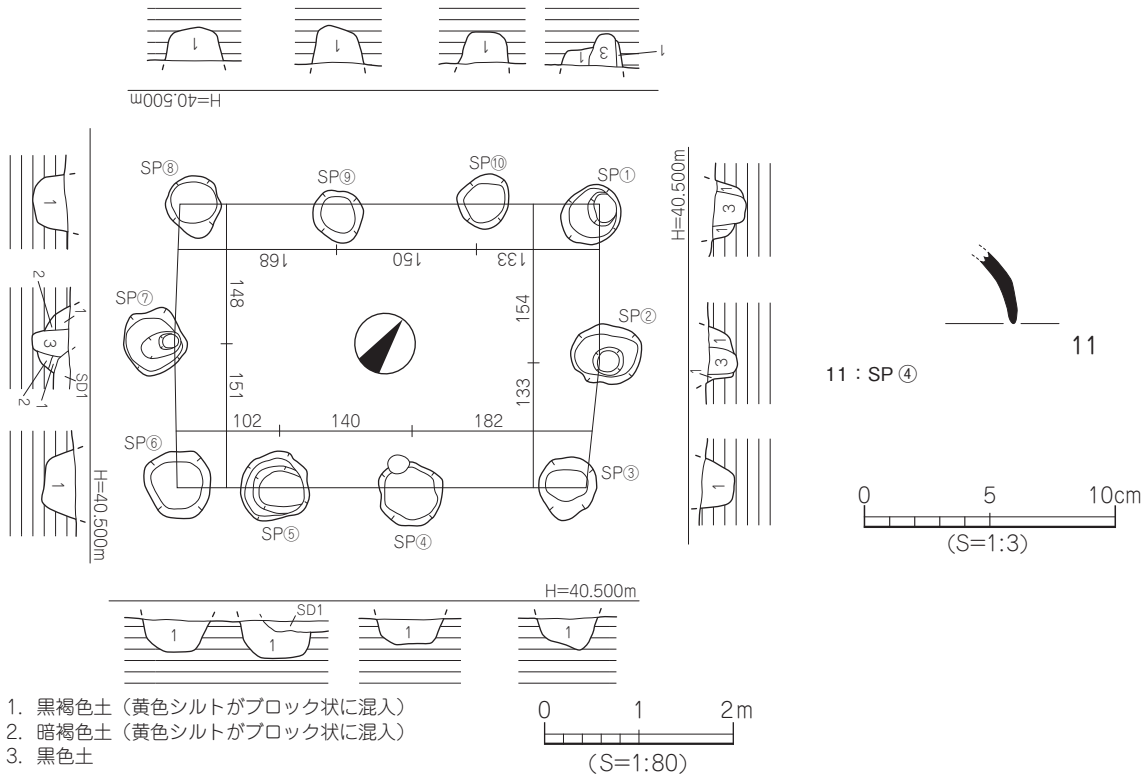
出土遺物（11）

11 は SP ④出土の須恵器坏蓋片で、口縁端部は尖り気味に仕上げる。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、柱穴埋土が掘立 1 と酷似することから、掘立 2 は概ね古墳時代後期、6 世紀後半以降の建物と考える。



第 9 図　　掘立 1 測量図・出土遺物実測図



第 10 図　　掘立２測量図・出土遺物実測図

３）溝（ＳＤ）

ＳＤ 12（第６図）

調査区南東部、C11 区で検出した東西方向の短い溝で、溝西端は SB1 に切られている。幅 0.49 m、検出長 0.88 m、深さ 15cmを測り、埋土は SB1 と同様の黒褐色土単層である。断面形態は皿状を呈する。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、SB1 に先行することから、古墳時代後期、6 世紀後半以前の遺構とする。

４）土坑（ＳＫ）

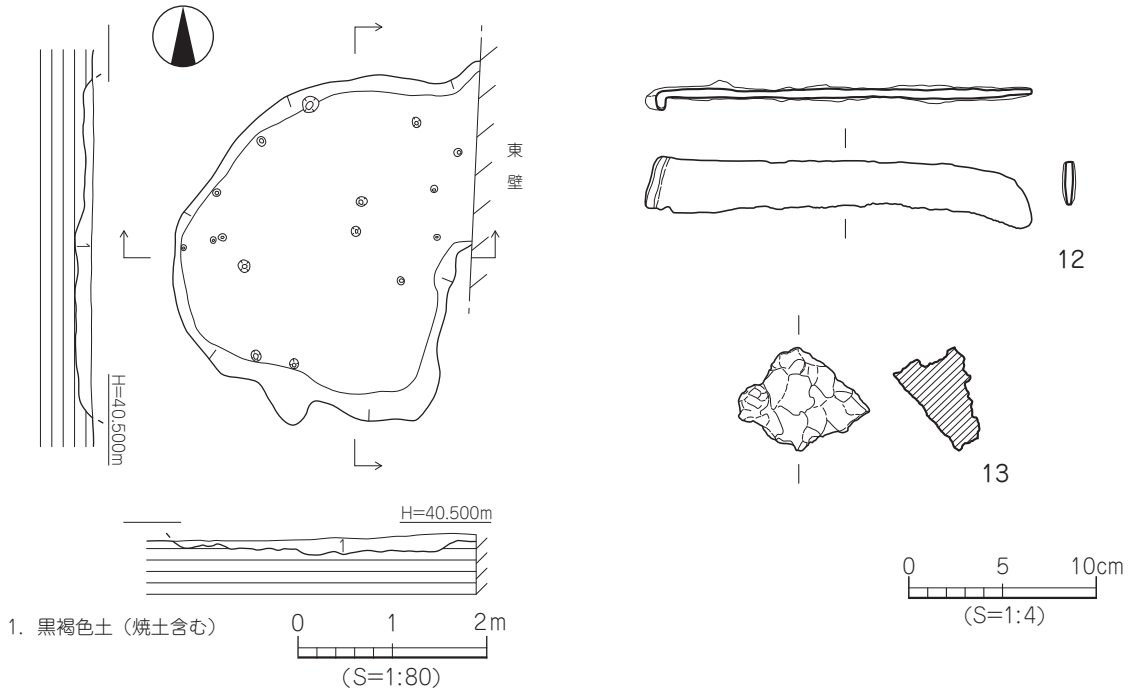
ＳＫ１（第 11 図、図版 6）

調査区南東部、B10･11 区に位置する土坑で、土坑東側は調査区外に続き、土坑上面は第Ⅴ層が覆う。平面形態は不整円形を呈するものと思われ、規模は南北検出長3.56 m、東西長3.14 m、深さ 18cmを測る。断面形態は緩やかな逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。土坑基底面はわずかに北側から南側に向けて緩傾斜をなし、基底面からは径３～ 5cm、深さ２～ 6cmを測る小ピットを 10 数基検出した。遺物は埋土中より、土師器片や須恵器片が数点出土したほか、鉄器が出土した。

出土遺物（12・13）

12 は鉄製の鎌で、長さ 20.5cm、幅 2.9cm、厚さ 0.7cmを測る。全面は、錆ぶくれにより覆われている。重量 85.49g。13 は鉄滓で、重量 123.25g を測る。表面には、無数の気泡が看取される。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、土坑上面を第Ⅴ層が覆うことや埋土が SB1 や掘立１・２柱穴と類似することから、SK1 は概ね古墳時代後期、6 世紀後半の遺構とする。



第 11 図　　ＳＫ１測量図・出土遺物実測図

（2）古代の遺構と遺物

古代の遺構は掘立柱建物 5 棟、溝 7 条、自然流路 1 条及び足跡である。

1）掘立柱建物（掘立）

掘立 4（第 12 図）

調査区中央部北西寄り、D5 ～ E6 区で検出した建物で、建物中央部は溝 SD3 に削平され、建物西側は調査区外に続く。建物上面は第Ⅳ層、及び足跡を形成する水田層が覆う。東西 2 間以上、南北 2 間の東西棟で、桁行検出長 3.00 m、梁行長 3.68 m を測る。各柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径 0.65 ～ 0.98 m、深さ 25 ～ 55cmを測る。柱穴掘り方埋土は黒褐色土（黄色シルトがブロック状に混入）を基調とするが、一部の柱穴下部には暗褐色土（黄色シルトがブロック状に混入）が見られる。柱痕は 5 基の柱穴で検出され、径 18 ～ 23cmを測る。柱痕埋土は、黒色土である。遺物は柱穴掘り方埋土中より、土師器片や須恵器片が少量出土した。

出土遺物（14・15）

14 は SP ⑦出土の須恵器坏身。たちあがりは内傾し、端部は尖り気味に仕上げる。15 は SP ①出土の須恵器壺の肩部片で、外面に平行叩き、内面には円弧叩きを施す。

時期：出土遺物の特徴より、掘立 4 は 7 世紀前半の建物とする。

掘立５（第 13 図）

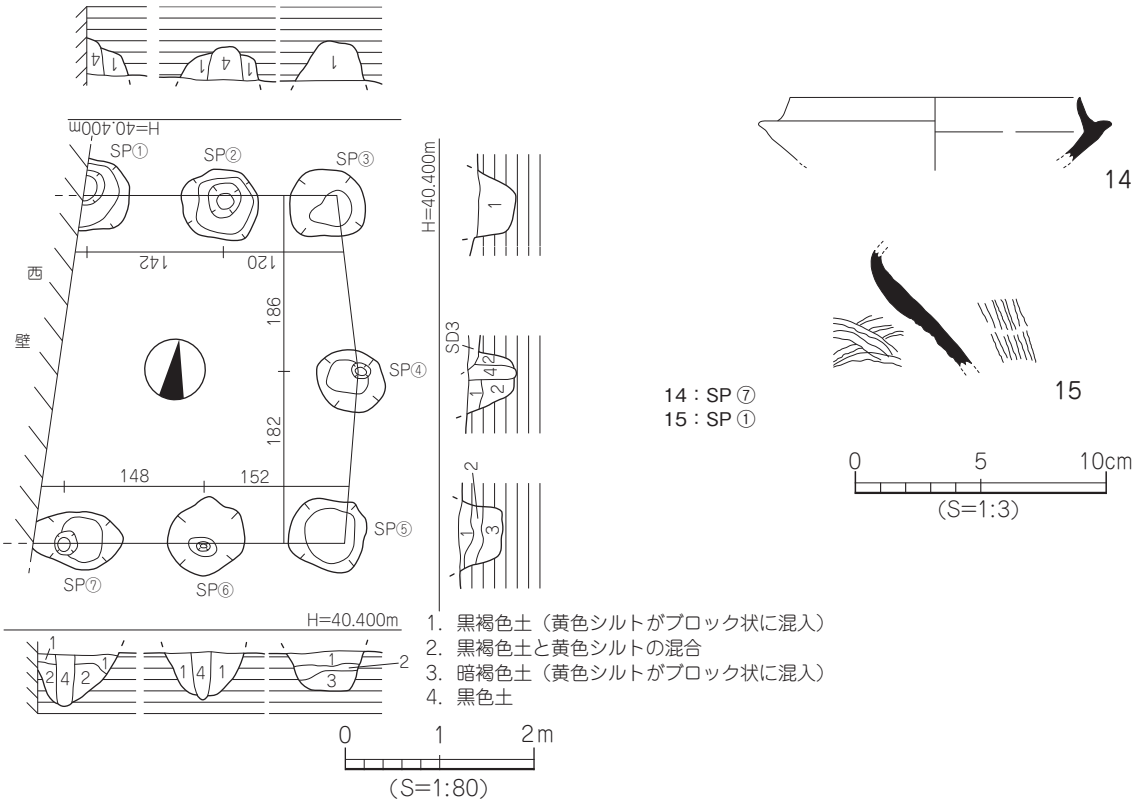
調査区南端、C11 ～ E12 区で検出した建物で SB1 より後出し、建物中央部には南北方向の撹乱が存在する。東西３間、南北１間の東西棟で、桁行長 6.42 m、梁行長 4.60 mを測る。各柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、径 0.40 ～ 0.96 m、深さ 10 ～ 44cmを測る。柱穴掘り方埋土は、黒褐色土（黄色シルトがブロック状に混入）である。柱痕は６基の柱穴で検出され、径 14 ～ 24cmを測り、柱痕埋土は黒色土である。遺物は柱穴掘り方埋土中より土師器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、柱穴埋土が掘立４に酷似することから、掘立５は概ね７世紀前半頃の建物とする。

掘立６（第 14 図）

調査区南西部、D9 ～ E9 区で検出した建物で、建物東側は溝 SD11 に削平され、建物西側は調査区外に続く。東西１間以上、南北３間の南北棟で、桁行検出長 2.89 m、梁行長 5.36 mを測る。各柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径 0.40 ～ 0.50 m、深さ 15 ～ 30cmを測る。柱穴掘り方埋土は、黒褐色土（黄色シルトがブロック状に混入）である。柱痕は２基の柱穴で検出され、径 12cmを測り、柱痕埋土は黒色土である。遺物は、柱穴掘り方埋土中より土師器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、柱穴埋土が掘立４と酷似することから、掘立６は概ね７世紀前半頃の建物とする。



第 12 図　　掘立４測量図・出土遺物実測図

掘立８（第 14 図）

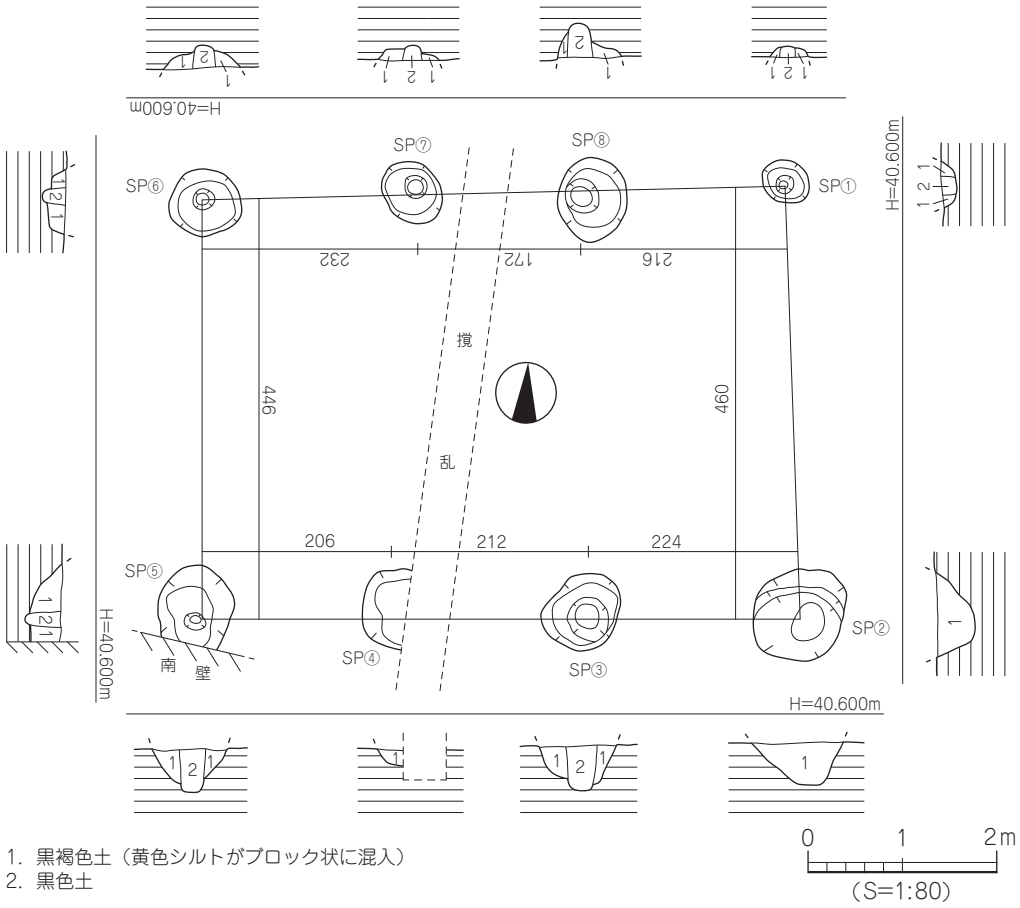
調査区中央部東寄り、B7・8 区で検出した建物で、建物東側は調査区外に続く。東西 1 間以上、南北 2 間の東西棟で、桁行検出長 1.68 m、梁行長 3.44 mを測る。各柱穴の平面形態は円形を呈し、径 0.70 ～ 0.96 m、深さ 26 ～ 32㎝を測る。柱穴掘り方埋土は、黒褐色土（黄色シルトがブロック状に混入）である。柱痕は 3 基の柱穴で検出され、径 26 ～ 28㎝を測り、柱痕埋土は黒色土である。遺物は柱穴掘り方埋土中より土師器片が数点出土したが、図化しうる遺物はない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、柱穴埋土が掘立 4 と酷似することから、掘立 8 は概ね 7 世紀前半頃の建物とする。

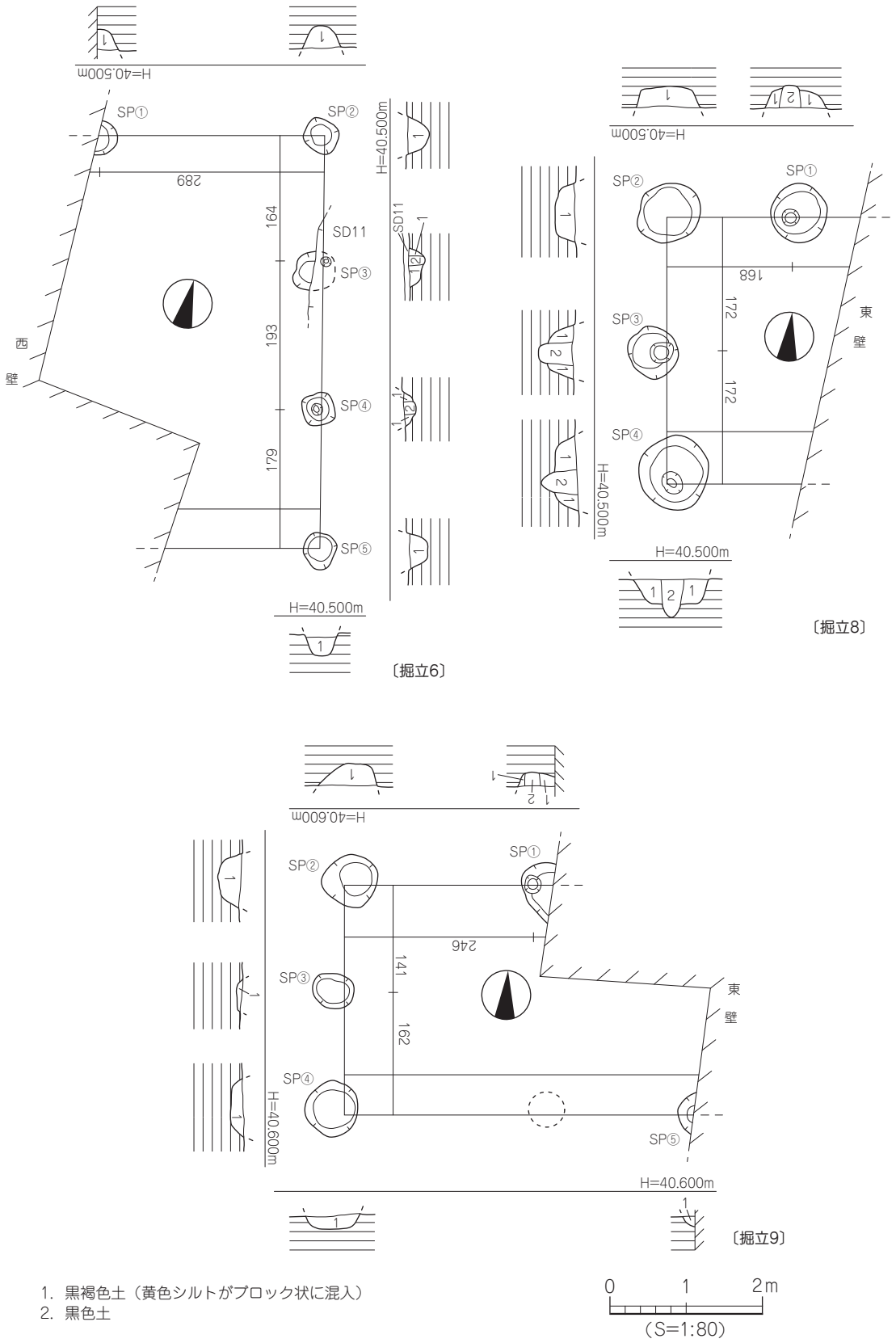
掘立９（第 14 図）

調査区南東部、B9 ～ C10 区で検出した建物で土坑 SK1 より後出し、建物東側は調査区外に続く。東西 2 間以上、南北 2 間の東西棟で、桁行検出長 4.61 m、梁行長 3.03 mを測る。各柱穴の平面形態は円形を呈し、径 0.42 ～ 0.72 m、深さ 8 ～ 28㎝を測る。柱穴掘り方埋土は、黒褐色土（黄色シルトがブロック状に混入）である。柱痕は SP ①で検出され、径 18㎝を測り、柱痕埋土は黒色土である。遺物は柱穴掘り方埋土中より土師器片や須恵器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、柱穴埋土が掘立 4 と酷似することから、掘立 9 は概ね 7 世紀前半頃の建物とする。



第 13 図　　掘立５測量図



1. 黒褐色土（黄色シルトがブロック状に混入）
2. 黒色土

第14図　掘立６・８・９測量図

2）溝（ＳＤ）

ＳＤ１（第6・15図）

調査区北部、A4～D4区で検出した東西方向の溝で、溝中央部は掘立2柱穴を削平し、溝東側は調査区外に続く。検出長12.70 m、幅0.56～0.62 m、深さ17～21cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。溝基底面はほぼ平坦で、凹凸は見られない。遺物は埋土中より、土師器片や須恵器片が少量出土した。

出土遺物（16～18）

16は須恵器坏蓋で、天井部と口縁部との境界には凹線状の凹みが巡る。17は須恵器坏身片で、たちあがりは短く内傾し、端部は丸く仕上げる。18は移動式カマドの口縁部片で、外面にはハケメ調整を施す。

時期：出土遺物の特徴より、SD1は7世紀中葉の溝とする。

ＳＤ２（第6図）

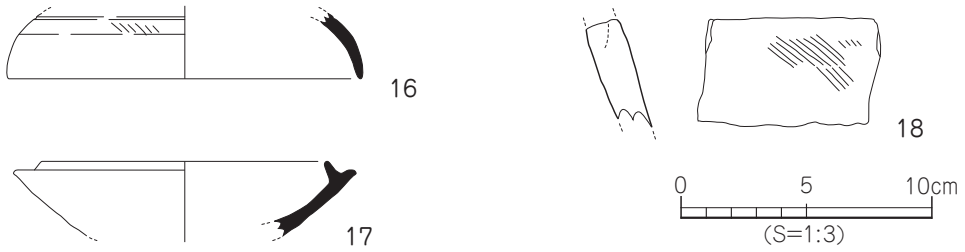
調査区中央部北寄り、C5～D5区で検出した東西方向の溝で、溝両端は消滅している。検出長4.20 m、幅46～50cm、深さ18～21cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。溝基底面はほぼ平坦で、凹凸は見られない。遺物は埋土中より土師器や須恵器の小片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、溝埋土がSD1と酷似することから、SD2は概ね7世紀中葉頃の溝とする。

ＳＤ３（第6図）

調査区中央部やや北寄り、A5～E5区で検出した東西方向の溝で、溝西側は掘立4柱穴を削平し、溝両端は調査区外に続く。第Ⅵ層上面での検出であるが、調査壁の土層観察より本来は第Ⅳ層上面より掘削された遺構であることが判明している。検出長17.90 m、幅56～73cm、深さ17～20cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。溝基底面はほぼ平坦であるが、径5～10cm、深さ5cm程度の小ピットが数多く点在する。遺物は埋土中より土師器や須恵器の小破片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、掘立4より後出することや柱穴埋土がSD1などと酷似することから、SD3は概ね7世紀中葉頃の溝とする。



第15図　ＳＤ１出土遺物実測図

ＳＤ６（第６図）

調査区中央部、B6 ～ D6 区で検出した東西方向の溝で、溝両端は消失している。検出長 11.00 m、幅 30 ～ 38㎝、深さ 10 ～ 14㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。溝基底面はほぼ平坦であるが、溝東半部には径５～ 10㎝、深さ 5㎝程度の小ピットが点在する。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土が SD1 と酷似することから、SD6 は概ね７世紀中葉頃の溝とする。

ＳＤ７（第６図）

調査区中央部、B6 区で検出した東西方向の短い溝で、溝両端は消失している。検出長 4.19 m、幅 40 ～ 54㎝、深さ６～ 8㎝を測る。溝基底面には径 10 ～ 15㎝、深さ 6㎝程度の小ピットが列をなしており、断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。溝内からは土師器の小破片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、埋土が SD1 と酷似することから、SD7 は概ね７世紀中葉頃の溝とする。

ＳＤ 10（第６図）

調査区中央部、B7 ～ E7 区で検出した東西方向の溝で、溝西側は SD11 と重複し、溝東側は消失している。検出長 10.10 m、幅 40 ～ 49㎝、深さ 10 ～ 15㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。溝基底面はほぼ平坦であるが、径５～ 15㎝、深さ 10㎝程度の小ピットが数多く点在する。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土が SD1 や SD2 と酷似することから、SD10 は概ね７世紀中葉頃の溝とする。

ＳＤ 11（第６図）

調査区西側、D・E6 ～ D10 区で検出した南北方向の溝で、溝南側は掘立６柱穴を削平し、溝中央部は SD10 と重複し、溝両端は消失している。検出長 16.00 m、幅 60 ～ 72㎝、深さ 20 ～ 25㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。溝基底面はほぼ平坦であるが、凹凸は見られない。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土が SD1 などと酷似することから、SD11 は概ね７世紀中葉頃の溝とする。

３）自然流路（ＳＲ）

ＳＲ１（第 16 ～ 22 図、図版４～６）

調査区北部、A2 ～ E4 区で検出した北東－南西方向の流路で、流路壁体下面には足跡①を伴った水田層が存在する。第Ⅵ層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により本来は第Ⅴ層上面から掘削された遺構であることが判明している。検出長 20.80 m、幅 2.40 ～ 2.90 m、深さは最深部で 90㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈するが、部分的ではあるが幅 50㎝程度のテラス状施設が溝両側に

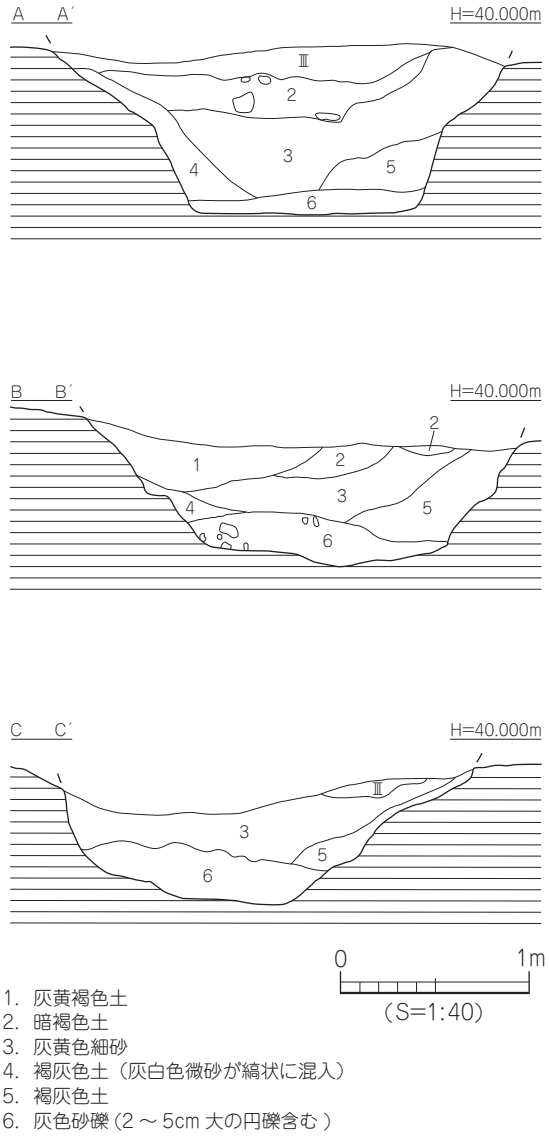
見られる。埋土は六種類に分層され、流路上位から１層：灰黄褐色土、２層：暗褐色土、３層：灰黄色細砂、４層：褐灰色土（灰白色微砂が縞状に混入）、５層：褐灰色土となり、溝基底面付近には灰色砂礫（６層）が堆積する。堆積状況から、４層や５層が堆積後に流路は再掘削されたと推測される。流路基底面に凸凹はみられないが、北東から南西に向けて傾斜をなす（比高差 13cm）。

発掘調査時は、流路の掘り下げや遺物の取り上げを、下層（４～６層）と上層（１～３層）に分けて行った。ここでは、各層から出土した遺物を「下層出土遺物」、「上層出土遺物」として掲載したが、それ以外に調査に先行して設定したトレンチからの出土品や出土地点が不明な遺物があるため、それらは「地点不明遺物」として掲載している。

ＳＲ１下層出土遺物（第 17 ～ 19 図、図版 5）

須恵器（19 ～ 40）

19 ～ 22 は坏蓋。19 は口径 13.5cm、器高 4.3cm を測る復元完形品で、口縁端部は尖り気味に仕上げる。天井部外面には回転ヘラ切り痕を残す。22 は断面三角形状の鋭い稜を持ち、口縁端部は内傾する凹面をなす。23 ～ 29 は坏身。23 ～ 27 のたちあがりは短く内傾し、端部は尖り気味に仕上げる。26･27 は、たちあがり径 11.9 ～ 12.0cm、受部径 14.1cm、器高 3.6 ～ 3.8cmを測る復元完形品で、底部外面には回転ヘラ切り痕を残す。28 のたちあがりは内傾し、端部は丸く仕上げる。色調は灰黄色を呈し、底部外面にはヘラ状工具による線刻（ヘラ記号？）を施す。29 のたちあがり端部は内傾し、端面に沈線状の凹みが巡る。30 は無蓋高坏の坏部で、下位に凸線２条を施す。31 ～ 33 は高坏の脚部。31 は長方形状の透かしを３方向に看取する。33 は長方形状の透かしを３方向に穿ち、柱部には回転カキメ調整を施す。34 ～ 36 は壺。34･35 は短頸壺で、34 の肩部には沈線２条を施す。35 は頸部に沈線１条、肩部にはヘラ状工具による線刻、胴部には平行叩き後、回転カキメ調整を施す。36 は赤焼け土器で、肩部に凹線２条、底部下位には回転ヘラケズリ調整を施す。37 は提瓶の胴部片で、ボタン状の把手をもつ。38 ～ 40 は甕。38･39 の口縁端部は珠玉状に仕上げ、39 の外面は平行叩き、内面には円弧叩きを施す。40 の口縁端部は下方に肥厚し、頸部には回転カキメ調整、胴部外面には平行叩きを施す。



第 16 図　　ＳＲ１断面図

土師器（41 ～ 53）

41 ～ 45 は甕。41 の口縁部下位には稜をもち、口縁端部は内傾する。42 の口縁端部は「コ」字状を呈し、口縁部内面には稜をもつ。43 ～ 45 は外反口縁で、口縁端部は丸く仕上げる。46･47 は椀。46 は体部が内湾し、口縁端部は丸く仕上げる。47 は口径 11.0cm、器高 5.2cmを測り、口縁端部は尖る。48 は高坏の脚部片で、柱裾部内面には明瞭な稜をもつ。49･50 は甑。50 の口縁部はやや外反し、口縁端部は内方に肥厚する。51 は移動式カマドの庇部である。52･53 は土製の紡錘車で、52 は断面形態が台形状を呈し、中央部に径 1.6cm大の孔を穿つ。53 は直径 6.7cm、厚さ 2.1cmを測る円盤状の紡錘車で、中央部に径 0.7cm大の孔を穿ち、周囲には径 0.6 ～ 0.7cm大の竹管文 15 ケを施す。

ＳＲ１上層出土遺物（第 20・21 図、図版 6）

須恵器（54 ～ 65）

54･55 は坏蓋。天井部は丸みをもち、口縁端部は尖り気味に仕上げる。55 は口径 10.4cm、器高 3.7cmを測る復元完形品で、天井部 1/3 の範囲に回転ヘラケズリ調整を施す。56 は復元完形品の坏身で、たちあがり径 11.8cm、受部径 13.7cm、器高 3.5cmを測る。内面は灰色を呈するが、外面は赤褐色を呈する。57 ～ 59 は坏。57 は完形品で、口径 9.1cm、器高 4.1cmを測る。57･58 は体部が直線的に立ち上がり、底部外面には回転ヘラ切り痕を残す。59 は口縁部がやや外反し、口縁端部内面には沈線状の凹みが巡り、体部下半部には凹線状の凹みが巡る。60 は椀。口縁部は短く外反し, 底部は平底をなす。61 は高坏の脚部で、脚端部は下方に肥厚する。62 は壺の口頸部片で、口縁端部は上内方に肥厚する。63 は脚付壺の脚部で、中位に凸線 1 条、上位には長方形状の透かしを穿つ。64･65 は甕。64 の口縁部は長方形状に肥厚し、口縁端部は上方につまみ上げられている。65 は長く外反する口頸部をもち、口縁端部は下方に垂下する。

土師器（66 ～ 73）

66 ～ 68 は甕。66･67 の口縁部内面は上方に肥厚し、口縁端部は「コ」字状を呈する。68 の口縁部は外反し、口縁端部は丸く仕上げる。69･70 は椀。体部は内湾し、口縁端部は丸く仕上げる。71･72 は高坏の脚部で、72 の坏脚部接合は指し込み技法による。73 は甑の把手部で、舌状を呈する。

金属製品（74）

74 は鉄滓で、重量 25.12g を測る。表面には、わずかに気泡が残る。

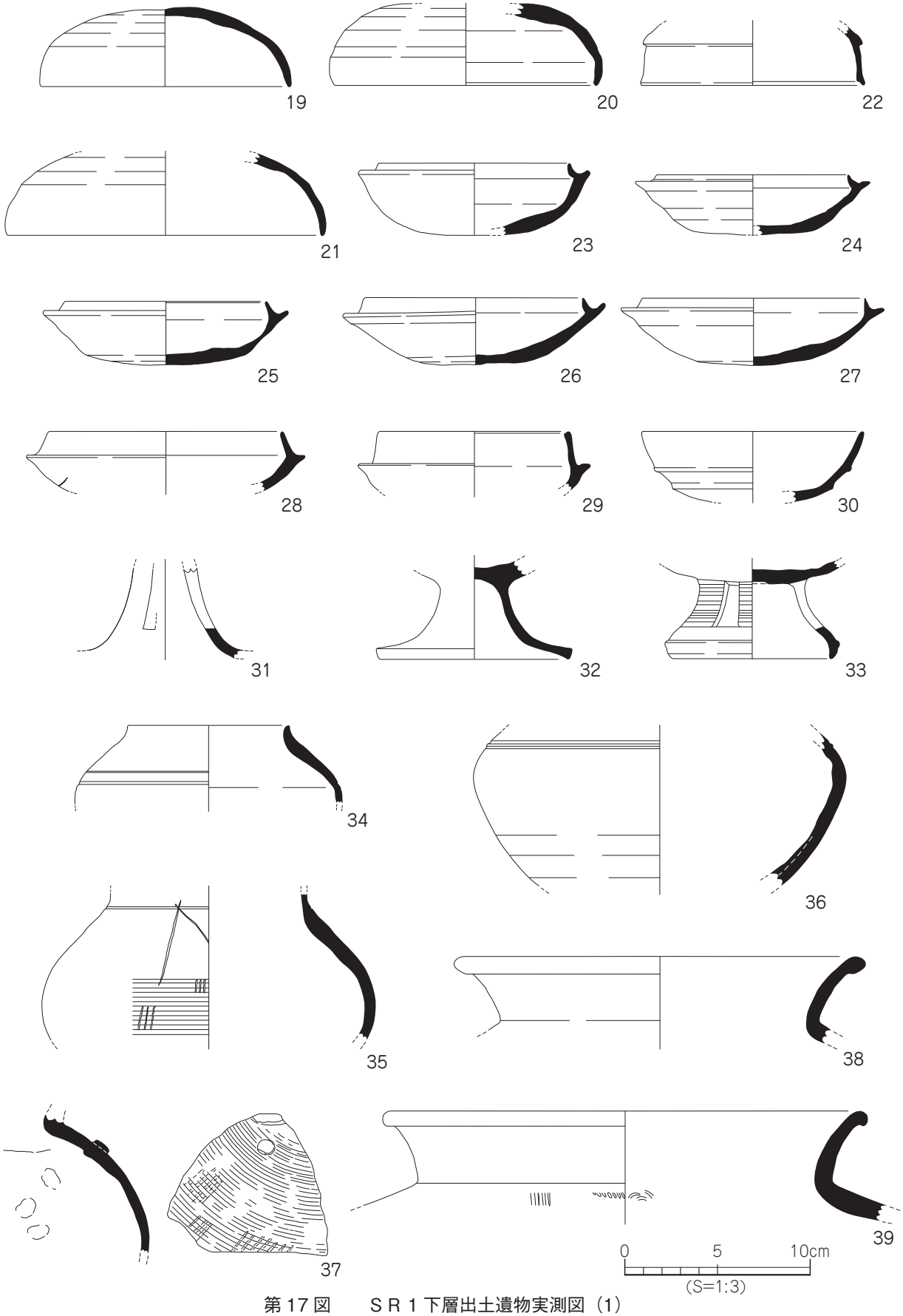
ＳＲ１地点不明出土遺物（第 22 図、図版 6）

須恵器（75 ～ 78）

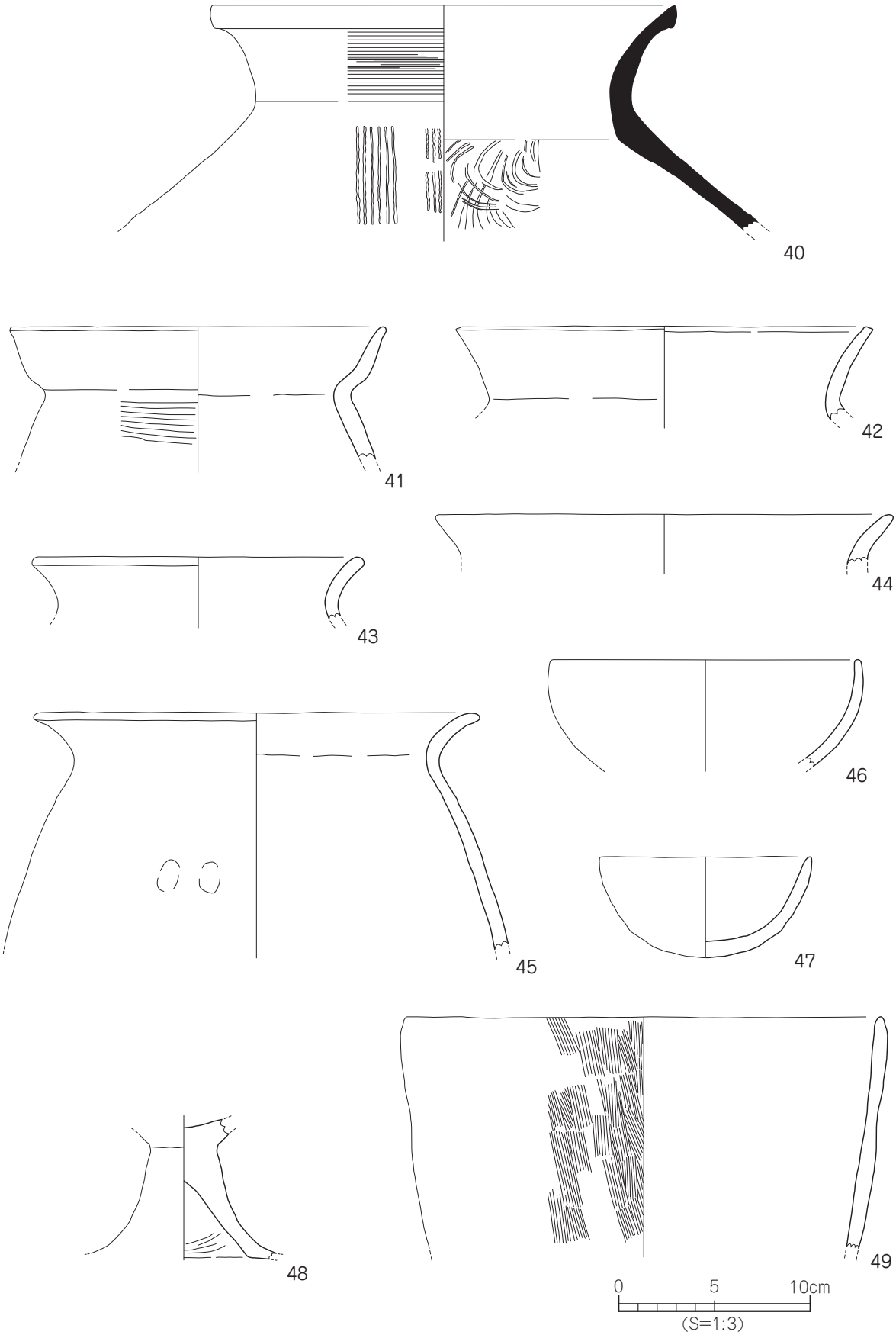
75 はたちあがり径 13.0cm、受部径 15.3cm、器高 3.7cmを測る完形の坏身。たちあがり端部は丸く、底部外面には 1/2 の範囲に回転ヘラケズリ調整を施す。76 は瓶の口縁部で、凸線の上下に波状文を施す。77 は高坏の脚部片で、脚端部は上下方に拡張する。78 は甑で口縁端部は内傾する面をもち、体部には 3 条の沈線を施す。

土師器（79 ～ 86）

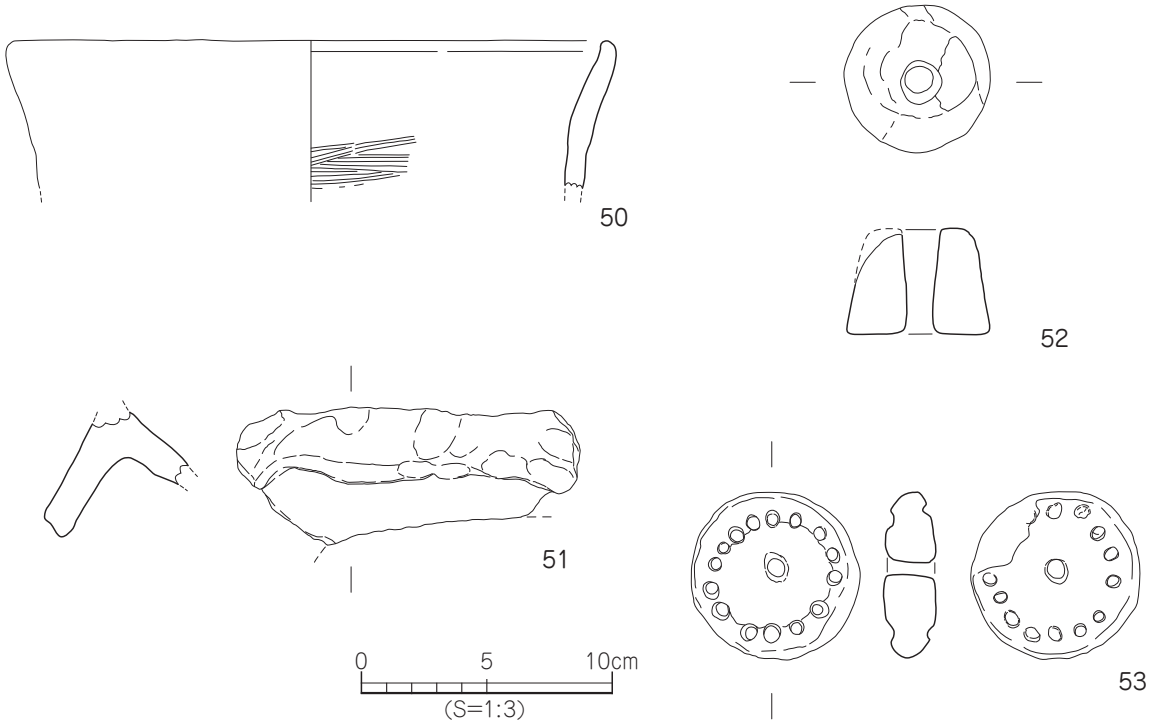
79 は甕で、口縁部はわずかに内湾し、頸部内面には明瞭な稜をもつ。80 は椀で、体部内面に細かなハケメ調整を施す。81･82 は坏。色調は 81 が褐色、82 は赤褐色を呈し、体部内面に格子目状の暗文を施す。83･84 は高坏の脚部片、85 は甑の把手部である。86 は土製の紡錘車で、断面形態は台形状を呈し、中央部に径 0.8cm大の孔を穿つ。



第 17 図　　ＳＲ１下層出土遺物実測図（1）



第18図　　ＳＲ１下層出土遺物実測図（2）



第 19 図　　ＳＲ１下層出土遺物実測図（3）

金属製品（87）

87 は鉄滓で、重量 37.14g を測る。表面には、気泡と錆が付着している。

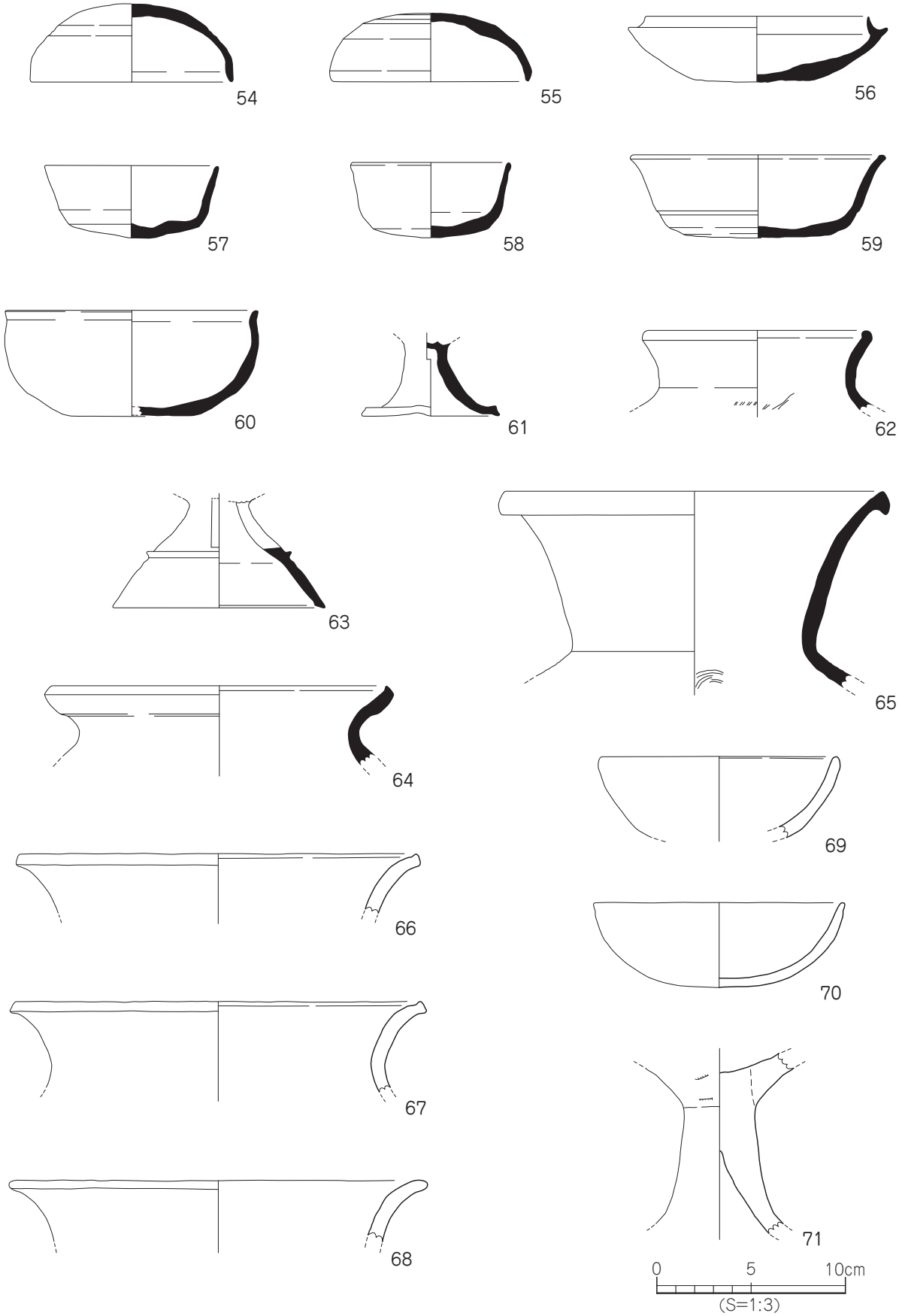
時期：出土遺物をみると、下層出土品は古墳時代後期、6 世紀後半に時期比定されるものが主体をなし、上層出土品は 7 世紀代の遺物が主体をなす。よって、SR1 の掘削時期は 6 世紀後半頃であり、埋没時期を 7 世紀後半とする。

4）足跡

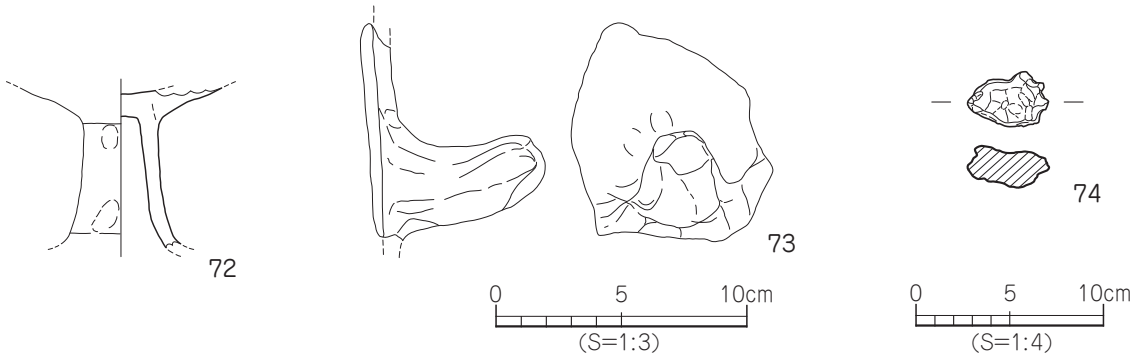
足跡①（第 6 図、図版 4）

調査区北部で検出した無数の足跡で、水田耕作に伴う遺構と考えられる。SR1 両側で検出され、足跡上面は第Ⅳ層が覆う。なお、足跡埋土は第Ⅳ層と同様の黒褐色土である。足跡の規模は、径 10 ～ 20cm、深さ 3 ～ 8cmを測る。足跡内からは、遺物の出土はない。

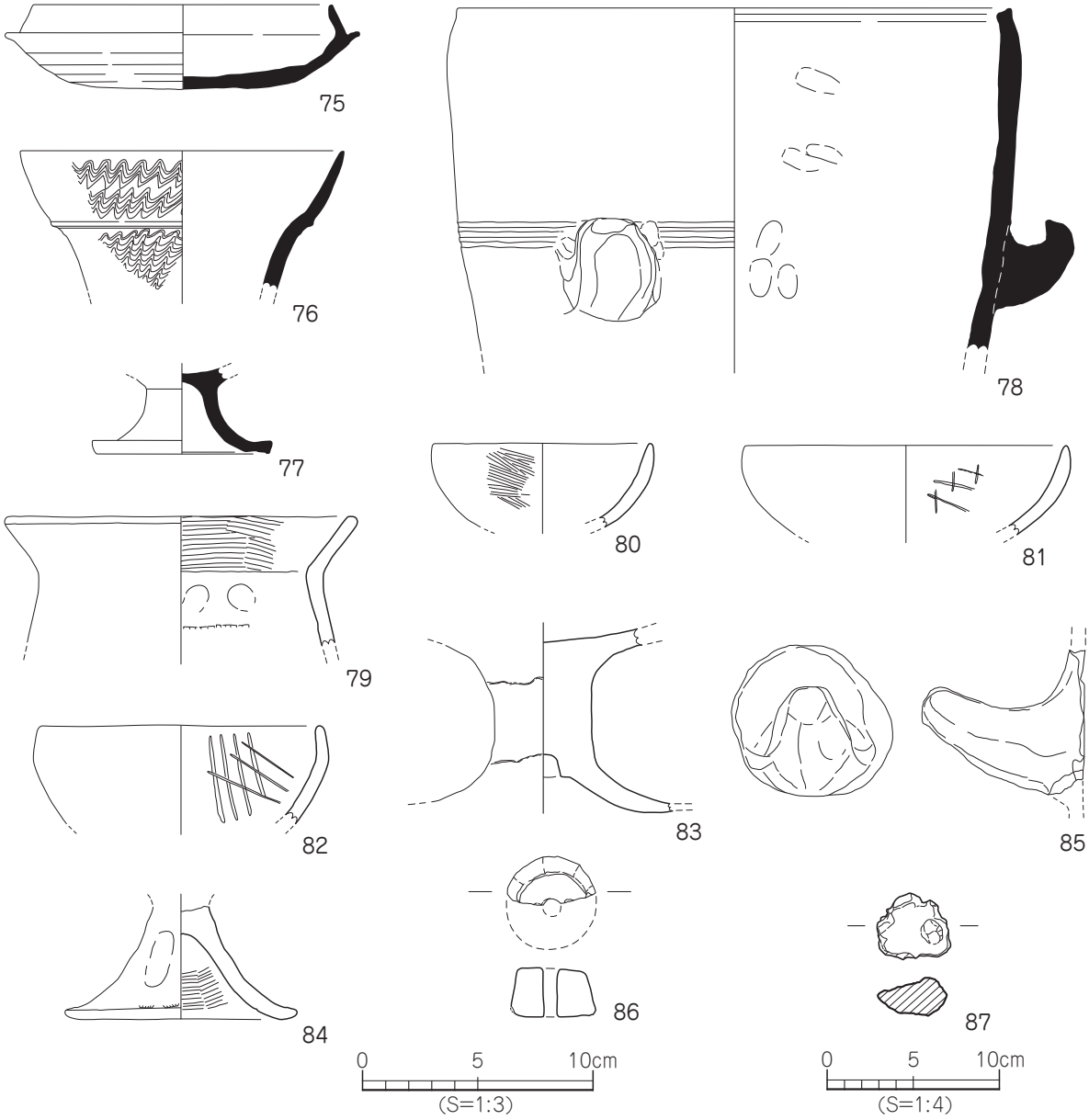
時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、第Ⅳ層が覆うことや埋土等から、足跡①は溝 SD1 や SD2 と同様、7 世紀中葉頃の遺構と考えられる。



第 20 図　　ＳＲ１上層出土遺物実測図（1）



第 21 図　　ＳＲ１上層出土遺物実測図（2）



第 22 図　　ＳＲ１地点不明出土遺物実測図

（３）中世の遺構と遺物

中世の遺構は、掘立柱建物２棟、溝２条及び足跡である。

１）掘立柱建物（掘立）

掘立３（第 23 図）

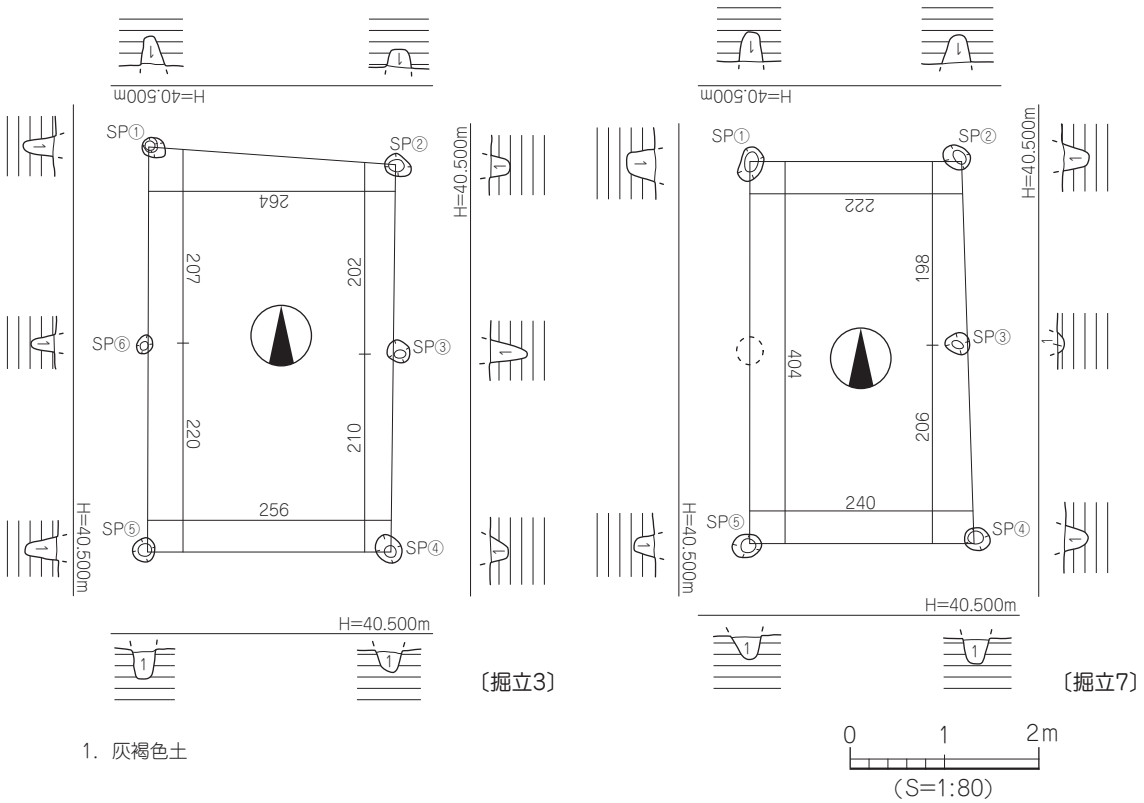
調査区中央部南寄り、B8 ～ C9 区で検出した建物で、東西１間、南北２間の南北棟である。桁行長 4.27 m、梁行長 2.64 m を測り、建物方位をほぼ真北にとる。各柱穴は円形を呈し、径 0.15 ～ 0.30m、深さ 18 ～ 35㎝を測る。柱穴掘り方埋土は、灰褐色土単層である。遺物は土師器小片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、埋土が中世の溝 SD4 や SD8 と酷似することから、掘立３は概ね中世段階の建物とする。

掘立７（第 23 図）

調査区中央部南寄り、C8 ～ D9 区で検出した建物で、東西１間、南北２間の南北棟である。桁行長 4.04 m、梁行長 2.40m を測り、建物方位をほぼ真北方向にとる。各柱穴は円形または楕円形を呈し、径 0.20 ～ 0.24m、深さ８～ 30㎝を測る。柱穴掘り方埋土は、灰褐色土単層である。遺物は土師器小片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、埋土が掘立３や溝 SD4 などと酷似することから、掘立７は概ね中世段階の建物とする。

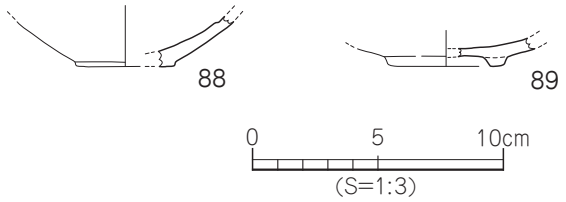


第 23 図　　掘立３・７測量図

2）溝（ＳＤ）

ＳＤ４（第６・24図）

調査区中央部北寄り、B5 ～ D6 区で検出した東西方向の溝で、溝 SD3 より後出し、溝両端は消失している。検出長 10.00 m、幅 30 ～ 36㎝、深さ 22 ～ 29㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰褐色土単層である。溝基底面は平坦であるが、凹凸は見られない。溝からは土師器坏の底部片のほか、瓦器椀の底部片などが出土している。



第 24 図　　ＳＤ４出土遺物実測図

出土遺物（88・89）

88 は土師器坏の底部で、円盤高台状を呈する。89 は瓦器椀で、断面方形状の高台が付く。

時期：出土遺物の特徴より、SD4 は中世、13 世紀代の遺構とする。

ＳＤ８（第６図）

調査区中央部東端、A6 区で検出した南北方向の短い溝で、検出長 1.60 m、検出幅 37㎝、深さ 8㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰褐色土単層である。溝内からは土師器や須恵器の小破片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、埋土が SD4 と酷似することから、SD8 は概ね中世段階の溝とする。

3）足跡

足跡②（第６図）

調査区中央部、B6 ～ C7 区で検出した足跡で、2 × 3.5 mの範囲に 50 個以上の足跡を発見した。足跡の規模は径 10 ～ 15㎝、深さ 3 ～ 6㎝を測り、埋土は灰褐色土である。足跡からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、埋土が SD4 や掘立 3 などと酷似することから、足跡②は概ね中世段階の遺構とする。

（４）その他の遺構と遺物

調査では、122 基の柱穴と倒木址を検出した。

1）柱穴

柱穴は、122 基を検出した。このうち、57 基は掘立柱建物柱穴である。掘立柱穴を除く柱穴 65 基は、埋土で分類すると三種類に分かれる。柱穴内からは、弥生土器や土師器、須恵器の破片が出土した。

埋土①：黒色土 ･････13 基

埋土②：黒褐色土 ･････44 基

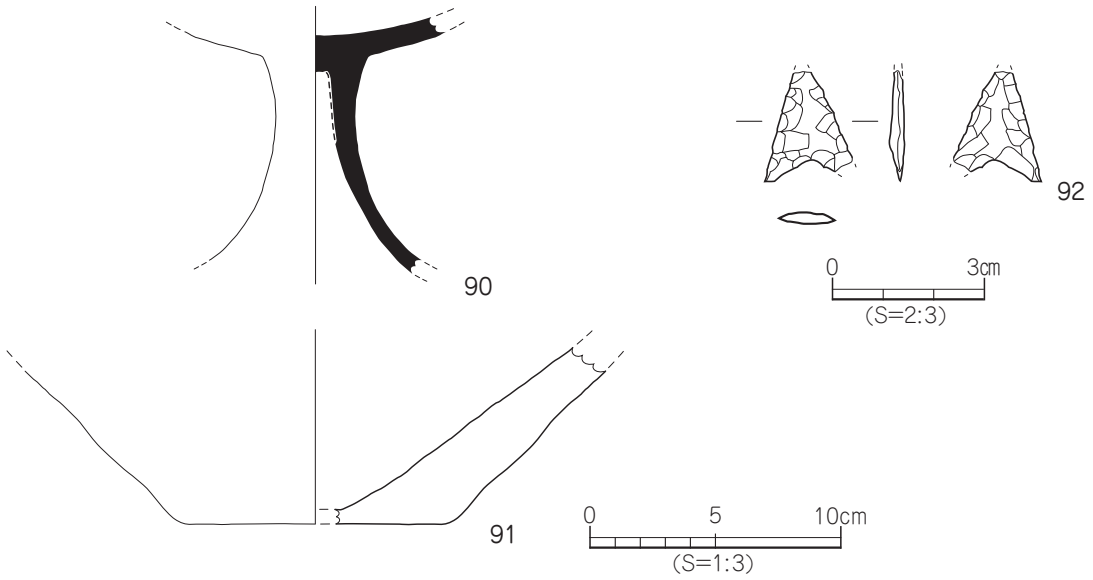
埋土③：黒色土（黄色土がブロック状に混入）･････ ８基

２）倒木址（第６図）

調査では､2 基の倒木址（倒木 1･2）を検出した。埋土は､褐色（10YR4/4）を呈する粘性土である。

３）包含層出土遺物（第 25 図、図版 6）（90 ～ 92）

90 は須恵器高坏、91 は弥生時代後期の壺形土器の底部である。92 は凹基無茎式の打製石鏃で、石材はサヌカイトを使用している。



第 25 図　　包含層出土遺物実測図

第４節　小　結

今回の調査では、弥生時代から中世までの遺構や遺物を検出した。弥生時代の遺構は未検出であるが、古墳時代後期から中世までの集落遺構や生産遺構を検出した。ここでは、遺跡の変遷についてまとめを行う。

古墳時代

古墳時代後期後半、6 世紀後半に調査区北側には自然流路 SR1 が存在し、その両側には 2 棟の掘立柱建物（掘立 1･2）が構築される。一方､調査区南側では竪穴住居（SB1）と土坑（SK1）が造られる。掘立 1・2 は 2 × 2 間、2 × 3 間規模の比較的小規模な側柱構造の建物で、建物方位を北東－南西方向にとる。また、SB1 は一辺 6 m前後の方形住居で、住居北側壁体にはカマドが付設されている。このほか、SK1 は径 3 m程度の土坑で、土坑内からは焼土のほか基底面付近より鉄器や鉄片が出土しており、工房的な性格をもつ遺構の可能性がある。

小　　結

古　代

飛鳥時代前半、7世紀前半には調査区中央部から南側に5棟の掘立柱建物（掘立4・5・6・8・9）が構築される。2×2間、2×3間規模の建物で、古墳時代の建物2棟にくらべ、建物方位はやや真北方向に近づく。なお、切り合いより、これらの建物が構築された段階にはSB1やSK1は廃絶されている。なお、この間に調査区北側に流路SR1は引き続き存在している。

飛鳥時代中葉、7世紀中頃になると、前述した7棟の掘立柱建物は廃絶され、代わって調査区中央部から南側には東西方向や南北方向の溝7条（SD1・2・3・6・7・10・11）が掘削される。これらの溝は、検出状況から水田または畠耕作に伴う鋤溝や水路と考えられる。なお、調査区北側ではSR1の両側にて水田（足跡①）が営まれることになる。おそらく、その際にSR1は掘り直しが施されたものと推測される。その後、概ね7世紀後半まで水田と流路SR1は存続する。

中　世

確実な時期は不明であるが、中世段階になり調査区中央部付近に2棟の掘立柱建物（掘立3・7）が構築され、調査区北側には溝（SD4・8）や水田（足跡②）が営まれることになる。2棟の建物は1×2間の小規模な建物であり、建物方位をほぼ真北方向にとる。

今回の調査では、古墳時代後期から終末期において調査地一帯は竪穴住居や掘立柱建物が存在する居住域として土地利用されていたことが分かる。その後、飛鳥時代、7世紀中葉以降は水田や畠を営む生産域として利用されるが、数百年の断絶期の後、中世段階になり再び生産域として土地利用されることになる。

今回の調査では来住台地南方域における集落様相や変遷を、一部ではあるが解明することができた。今後、調査地周辺域における調査成果を整理し、各時代における詳細な集落解明が必要となろう。

遺構一覧・遺物観察表　　－ 凡例 －

（１）　以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

（２）　遺物観察表の各掲載について。

法量欄　（　）：推定復元値

調整欄　土製品の各部位名称を略記した。

例）口→口縁部、天→天井部、た→たちあがり、肩→肩部、坏→坏部、胴→胴部、胴上→胴部上位、胴下→胴部下位、脚→脚部、底→底部。

胎土欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）石→石英、長→長石、密→精製土。

（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（1 ～ 3）→「1 ～ 3mm 大の石英・長石を含む」である。

焼成欄　焼成欄の略記について。◎→良好、○→良。

表３　竪穴住居一覧

竪穴（ＳＢ）	時　期	平面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	床面積（㎡）	主柱穴（本）	内部施設				周壁溝	備　考
						高床	土坑	炉	カマド		
1	古墳後期後半	方形	6.15 × 5.90 × 0.08	36.28	4			○	○	○	掘立５に切られる。

表４　掘立柱建物一覧

掘立	規模（間）	方　向	桁　行		梁　行		方　位	床面積（㎡）	時　期	備　考
			実長（m）	柱間寸法(m)	実長（m）	柱間寸法(m)				
1	2 × 2	南北	3.56	1.66･1.90	3.02	1.46･1.56	N-40° -W	10.75	6 世紀後半以降	
2	3 × 2	東西	4.24	1.02･1.40･1.82	2.99	1.48･1.51	N-54° -E	12.67	6 世紀後半以降	SD1 に切られる。
3	1 × 2	南北	4.27	2.07･2.20	2.64	2.64	真北	11.27	中世	
4	2+ α × 2	東西	(3.00)	1.48･1.52	3.68	1.82･1.86	N-2° -E	(10.41)	7 世紀前半	SD3 に切られる。
5	3 × 1	東西	6.42	2.06･2.12･2.24	4.60	4.60	N-4° -W	29.53	7 世紀前半	SB1 を切る。
6	1+ α × 3	南北	(2.89)	2.89	5.36	1.64･1.79･1.93	N-15° -W	(15.49)	7 世紀前半	SD11 に切られる。
7	1 × 2	南北	4.04	1.98･2.06	2.40	2.40	N-2° -W	9.74	中世	
8	1+ α × 2	東西	(1.68)	(1.68)	3.44	1.72･1.72	N-8° -W	(5.79)	7 世紀前半	
9	2+ α × 2	東西	(4.61)	2.64･1.97	3.03	1.41･1.62	N-2° -W	(13.96)	7 世紀前半	SK1 を切る。

表５　溝一覧　（１）

溝（ＳＤ）	地　区	方　向	断面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	A4 ～ D4	東西	皿状	12.70 × 0.62 × 0.21	黒褐色土	土師・須恵	7 世紀中葉	掘立２を切る。
2	C5 ～ D5	東西	皿状	4.20 × 0.50 × 0.21	黒褐色土	土師・須恵	7 世紀中葉	
3	A5 ～ E5	東西	皿状	17.90 × 0.73 × 0.20	黒褐色土	土師・須恵	7 世紀中葉	掘立４を切る。
4	B5 ～ D6	東西	皿状	(10.00) × 0.36 × 0.29	灰褐色土	土師・瓦器	13 世紀	SD3 を切る。
6	B6 ～ D6	東西	皿状	11.00 × 0.38 × 0.14	黒褐色土	―	7 世紀中葉	

溝一覧 （2）

溝（ＳＤ）	地　区	方　向	断面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
7	B6	東西	皿状	4.19 × 0.54 × 0.08	黒褐色土	土師	7 世紀中葉	
8	A6	南北	皿状	1.60 × 0.37 × 0.08	灰褐色土	土師・須恵	中世	
10	B7 ～ E7	東西	皿状	10.10 × 0.49 × 0.15	黒褐色土	―	7 世紀中葉	SD11 と重複。
11	D・E6 ～ D10	南北	皿状	16.00 × 0.72 × 0.25	黒褐色土	―	7 世紀中葉	SD10 と重複。掘立 6 を切る。
12	C11	東西	皿状	0.88 × 0.49 × 0.15	黒褐色土	―	6 世紀後半以前	SB1 に切られる。

表６　自然流路一覧

流路（ＳＲ）	地　区	断面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	方　向	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	A2 ～ E4	逆台形状	20.80 × 2.90 × 0.90	北東－南西	灰黄褐色土他	土師・須恵・紡錘車	7 世紀後半	

表７　土坑一覧

土坑（ＳＫ）	地　区	平面形	断面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	B10・11	不整円形	逆台形状	(3.56) × 3.14 × 0.18	黒褐色土	土師・須恵・鉄	6 世紀後半	掘立 9 に切られる。

表８　柱穴一覧 （1）

柱穴（ＳＰ）	地　区	平面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	備　考
1	D2	楕円形	0.22 × 0.13 × 0.08	黒褐色土		
2	C・D2	楕円形	0.32 × 0.25 × 0.12	黒色土		
3	C2	楕円形	0.35 × 0.23 × 0.20	黒褐色土		
4	B4	円形	0.65 × 0.60 × 0.40	黒褐色土	弥生・土師	
5	B4	円形	0.17 × 0.17 × 0.12	黒褐色土		
6	B4	楕円形	(0.32) × 0.30 × 0.14	黒褐色土		
7	D6	円形	0.34 × (0.25) × 0.14	黒色土＋黄色土		
8	D6	楕円形	0.30 × 0.18 × 0.12	黒色土＋黄色土		
9	E12	円形	0.53 × 0.54 × 0.35	黒色土	弥生・土師	
10	D12	楕円形	0.62 × 0.53 × 0.34	黒色土	土師・須恵	
11	C12	楕円形	0.96 × 0.70 × 0.31	黒色土		
12	C11	円形	0.55 × 0.55 × 0.23	黒色土		
13	C10	円形	0.27 × 0.27 × 0.23	黒色土		
14	C10	円形	0.70 × 0.70 × 0.20	黒色土		
15	C11	円形	0.98 × 0.98 × 0.45	黒色土＋黄色土	土師・須恵	
16	C11	楕円形	0.83 × 0.54 × 0.38	黒色土＋黄色土		
17	C11	円形	0.67 × 0.67 × 0.17	黒色土		
18	B・C11	円形	0.79 × (0.40) × 0.42	黒色土	土師・須恵	
19	C10	円形	0.50 × 0.50 × 0.41	黒色土		
20	C10	楕円形	0.68 × 0.45 × 0.18	黒色土		
21	C・D10	円形	0.53 × 0.53 × 0.28	黒色土	須恵	
22	C10	円形	0.26 × 0.24 × 0.19	黒褐色土		
23	C・D10	円形	0.44 × 0.41 × 0.22	黒褐色土		
24	C10	楕円形	0.44 × 0.34 × 0.06	黒褐色土		
25	C11	円形	0.60 × (0.50) × 0.03	黒褐色土		
26	E9	円形	0.68 × (0.40) × 0.10	黒褐色土		

柱穴一覧　（2）

柱穴（ＳＰ）	地　区	平面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	備　考
27	C11	楕円形	0.30 × 0.15 × 0.43	黒褐色土	弥生・土師・須恵	
28	B10	円形	(0.52) × (0.12) × 0.12	黒色土＋黄色土		
29	B10・11	楕円形	1.15 × (0.22) × 0.11	黒色土＋黄色土		
30	B9・10	楕円形	(0.80) × (0.50) × 0.34	黒褐色土	石	
31	D11・12	楕円形	(0.40) × 0.32 × 0.11	黒褐色土		
32	B11	楕円形	(0.18) × (0.12) × 0.13	黒褐色土		
33	B11	楕円形	(0.50) × 0.34 × 0.11	黒褐色土		
34	B10	円形	0.47 × (0.40) × 0.17	黒褐色土	弥生	
35	B10	楕円形	0.46 × 0.34 × 0.14	黒褐色土		
36	C9・10	円形	0.70 × 0.66 × 0.29	黒色土＋黄色土		
37	B9	楕円形	0.30 × 0.23 × 0.35	黒褐色土	土師	
38	D10	楕円形	0.65 × 0.25 × 0.08	黒褐色土		
39	D10	楕円形	0.30 × 0.20 × 0.20	黒褐色土		
40	C9	楕円形	0.47 × 0.39 × 0.08	黒褐色土		
41	C9	楕円形	0.26 × 0.10 × 0.10	黒褐色土		
42	C9	円形	0.10 × 0.10 × 0.16	黒褐色土	土師	
43	D9	楕円形	0.30 × 0.24 × 0.30	黒褐色土	土師	
44	C9	楕円形	0.13 × 0.10 × 0.08	黒褐色土		
45	B9	円形	0.18 × 0.18 × 0.07	黒褐色土		
46	B・C9	楕円形	0.23 × 0.20 × 0.15	黒褐色土		
47	B・C7	円形	0.68 × 0.66 × 0.50	黒色土＋黄色土	弥生・土師・須恵	
48	E8	楕円形	0.60 × 0.58 × 0.09	黒褐色土		
49	E8	楕円形	0.53 × 0.40 × 0.11	黒褐色土		
50	D・E8	楕円形	0.29 × 0.20 × 0.20	黒褐色土		
51	B10	円形	(0.35) × (0.20) × 0.05	黒褐色土		
52	E7	円形	0.33 × 0.30 × 0.08	黒褐色土		
53	B8	円形	0.25 × 0.24 × 0.05	黒褐色土		
54	C8	楕円形	0.28 × 0.10 × 0.09	黒褐色土		
55	D7	楕円形	0.15 × 0.10 × 0.08	黒褐色土		
56	D7	楕円形	0.30 × .022 × 0.13	黒褐色土		
57	C7	円形	0.25 × 0.24 × 0.08	黒褐色土		
58	C7	楕円形	0.40 × 0.30 × 0.12	黒褐色土		
59	C12	円形	0.30 × (0.13) × 0.54	黒色土	土師・須恵	
60	C10	楕円形	0.55 × 0.44 × 0.08	黒褐色土		
61	D11	円形	0.50 × (0.30) × 0.22	黒褐色土	須恵	
62	B9	円形	0.18 × 0.18 × 0.05	黒褐色土		
63	D10	円形	0.25 × 0.25 × 0.18	黒褐色土		
64	E9	楕円形	0.60 × 0.47 × 0.13	黒褐色土		
65	C8	円形	0.25 × 0.25 × 0.07	黒褐色土		

表９　ＳＢ１出土遺物観察表　土製品　（1）

番号	器種	法量（㎝）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
1	坏蓋	口径 (13.5) 器高 4.4	扁平な天井部。口縁端部は尖り気味。1/4 の残存。	㊤ 回転ヘラケズリ (1/3) ㊦ 回転ナデ	㊤ ナデ (タタキ) ㊦ 回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
2	坏蓋	口径 (13.8) 残高 3.7	口縁端部は尖り気味。1/6 の残存。	㊤ 回転ヘラケズリ (1/3) ㊦ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		

ＳＢ１出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
3	坏身	たちあがり径 (11.9) 受部径 14.7 残高 3.2	たちあがりは低く内傾し、端部は尖り気味。	(た) 回転ナデ (底) 回転ヘラケズリ(1/2)	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
4	坏身	たちあがり径 (11.1) 受部径 (12.9) 残高 3.8	たちあがり端部は尖り気味に丸い。受部端に沈線状の凹みあり。	(た) 回転ナデ (底) 回転ヘラケズリ(1/2)	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
5	高坏	底径 (10.8) 残高 2.4	脚端部は上下方へわずかに肥厚し、脚端面はナデ凹む。	回転ナデ	回転ナデ	灰黄色 灰黄褐色	密 (長 2) ◎		
6	甕	口径 (14.1) 残高 3.6	口縁端部は内傾し、口縁部外面に斜線文を施す。小片。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ◎		
7	壺	残高 4.9	沈線２条＋列点文２段。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
8	提瓶	口径 (8.2) 残高 5.0	口縁端部は尖り気味。小片。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰黄色	密 (長 1) ◎		
9	甑	残高 4.0	把手部。舌状。	ナデ	ナデ	褐色 褐色	密 ◎		

表 10　掘立１・２出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
10	坏蓋	口径 (13.0) 器高 3.7	扁平な天井部。口縁端部は尖り気味に丸い。1/2 の残存。	(天) 回転ヘラケズリ(1/3) (口) 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長 (1 ～ 3) ◎	掘立 1 SP ⑤	
11	坏蓋	残高 2.9	口縁端部は尖り気味。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	掘立 2 SP ④	

表 11　ＳＫ１出土遺物観察表　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ (cm)	法量 幅 (cm)	法量 厚さ (cm)	法量 重さ (g)	備考	図版
12	鉄鎌	ほぼ完形	鉄	20.50	2.90	0.70	85.49	全面に錆ぶくれあり	6
13	鉄滓	―	鉄	6.95	5.50	4.55	123.25		6

表 12　掘立４出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
14	坏身	たちあがり径 (11.5) 受部径 (14.0) 残高 2.6	たちあがりは内傾し、端部は尖り気味。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	SP ⑦	
15	壺	残高 4.6	肩部小片。	平行叩き	円弧叩き	灰黄色 灰黄色	密 ○	SP ①	

表 13　ＳＤ１出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
16	坏蓋	口径 (14.0) 残高 2.6	天井部と口縁部の境界には、凹線状の凹みあり。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
17	坏身	たちあがり径 (11.5) 受部径 (13.7) 残高 2.6	たちあがりは短く内傾し、端部は丸い。小片。	(た) 回転ナデ (底) 回転ヘラケズリ(1/3)	回転ナデ	灰黄色 灰褐色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
18	カマド	残高 4.3	移動式カマドの口縁部片。	ナデ→ハケ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1 ～ 3) ◎		

表 14　ＳＲ１下層出土遺物観察表　土製品　（1）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
19	坏蓋	口径 13.5 器高 4.3	丸味のある天井部。口縁端部は尖り気味。復元完形品。	(天) 回転ヘラケズリ(1/2) (口) 回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長 (1) ◎		5
20	坏蓋	口径 (14.1) 残高 4.4	口縁部は内湾し、口縁端部は尖り気味に丸い。1/4 の残存。	(天) 回転ヘラケズリ(1/2) (口) 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
21	坏蓋	口径 (16.9) 残高 3.4	口縁端部は尖り気味に丸い。1/6 の残存。	(天) 回転ヘラケズリ(1/2) (口) 回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	密 ◎		
22	坏蓋	口径 (11.9) 残高 3.2	断面三角形状の鋭い稜をもち、口縁端部は内傾する凹面をなす。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		

ＳＲ１下層出土遺物観察表　土製品　（２）

番号	器種	法量（㎝）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
23	坏身	たちあがり径 (10.2) 受部径 (12.2) 器高 3.9	たちあがりは短く内傾し、端部は尖り気味。底部は平底風。1/3 の残存。	㋐ 回転ナデ ㋕ 回転ヘラケズリ(1/2)	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
24	坏身	たちあがり径 (10.2) 受部径 (12.6) 器高 3.2	たちあがりは短く内傾し、端部は尖る。底部は平底風。1/4 の残存。	㋐ 回転ナデ ㋕ 回転ヘラケズリ(1/2)	回転ナデ	灰黄色 青灰色	密 ◎	自然釉	
25	坏身	たちあがり径 (10.9) 受部径 3.4 器高 2.5	たちあがりは短く内傾し、端部は尖る。底部は平底風。1/3 の残存。	㋐ 回転ナデ ㋕ 回転ヘラケズリ(1/3)	㋐ 回転ナデ ㋕ 同心円叩き	灰黄色 灰色	長(1 ～ 2) ◎		
26	坏身	たちあがり径 11.9 受部径 14.1 器高 3.8	たちあがりは短く内傾し、端部は尖る。底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。復元完形品。	㋐ 回転ナデ ㋕ 回転ヘラケズリ(1/3)	回転ナデ	灰黄色 灰黄色	密 ◎		5
27	坏身	たちあがり径 12.0 受部径 14.1 器高 3.6	たちあがりは短く内傾し、端部は尖る。底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。完形品。	㋐ 回転ナデ ㋕ 回転ヘラケズリ(1/3)	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		5
28	坏身	たちあがり径 (12.5) 受部径 (15.0) 残高 3.2	たちあがりは内傾し、端部は丸い。底部外面にヘラ記号あり。1/4 の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰黄色 灰黄色	長(1 ～ 4) ◎		
29	坏身	たちあがり径 (10.3) 受部径 (12.5) 残高 3.2	たちあがり端部は内傾し、端面に沈線状の凹みが巡る。1/4 の残存。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1 ～ 2) ◎		
30	高坏	口径 (11.7) 残高 3.9	無蓋高坏の坏部。坏下位に２条の凸線が巡る。1/4 の残存。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
31	高坏	残高 4.8	長方形状の透かし３ヶ所あり。小片。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	密 ◎		
32	高坏	底径 (10.0) 残高 5.3	脚端部は下方に肥厚。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
33	高坏	底径 (8.5) 残高 5.2	有蓋高坏の脚部。長方形状の透かし３ヶ所あり。1/2 の残存。	㋕ 回転ヘラケズリ ㋚ 回転カキメ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石(1 ～ 3) ◎		
34	壺	口径 (8.8) 残高 4.2	短頸壺。肩部に沈線２条あり。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰黄色 灰色	密 ◎		
35	壺	残高 7.9	頸部に沈線１条、肩部にヘラ状工具による線刻あり。1/4 の残存。	㋣上 回転ナデ ㋣下 平行叩き	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		5
36	壺	残高 8.3	肩部に凹線２条あり。1/4 の残存。赤焼け土器。	㋣上 回転ナデ ㋣下 回転ヘラケズリ	回転ナデ	赤褐色 赤褐色	密 ◎		
37	提瓶	残高 7.6	体部片。ボタン状の把手あり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎		
38	甕	口径 (21.0) 残高 4.7	口縁部は外反し、口縁端部は珠玉状に仕上げる。1/4 の残存。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
39	甕	口径 (25.0) 残高 5.9	口縁部は外反し、口縁端部は珠玉状に仕上げる。1/8 の残存。	㋓ 回転ナデ ㋖ 平行叩き	㋓ 回転ナデ ㋖ 円弧叩き	暗灰色 青灰色	密 ◎		
40	甕	口径 (24.0) 残高 11.8	口縁部は外反し、口縁端部は下方に肥厚。頸部に回転カキメ調整を施す。1/4 の残存。	㋓ 回転ナデ回転カキメ ㋖ 平行叩き	㋓ 回転ナデ ㋖ 円弧叩き	青灰色 青灰色	長(1 ～ 5) ◎		5
41	甕	口径 (19.6) 残高 6.9	口縁部下位に稜をもち、口縁端部はわずかに内傾する。1/3 の残存。	㋓ ナデ ㋝ ハケ→ナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長(1 ～ 4) ◎		
42	甕	口径 (21.8) 残高 4.8	口縁端部は「コ」字状を呈し、口縁部内面に稜をもつ。小片。	マメツ	マメツ	赤褐色 赤褐色	石・長(1 ～ 4) ◎		
43	甕	口径 (17.2) 残高 2.9	外反する口縁部。口縁端部は丸い。小片。	マメツ	マメツ	黒褐色 黒褐色	石・長(1 ～ 5) ○		
44	甕	口径 (23.8) 残高 2.6	外反する口縁部。口縁端部は丸い。小片。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長(1 ～ 2) ◎		
45	甕	口径 (23.0) 残高 12.7	大きく外反する口縁部。口縁端部は尖り気味に丸い。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長(1 ～ 3) ◎		
46	椀	口径 (16.0) 残高 5.6	体部は内湾し、口縁端部は丸い。小片。	ナデ	ナデ	褐色 褐色	密 ◎		
47	椀	口径 (11.0) 器高 5.2	口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は尖る。3/4 の残存。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長(1 ～ 4) ◎	黒斑	5
48	高坏	残高 7.3	脚裾部内面に明瞭な稜あり。3/4 の残存。	マメツ	ハケ	褐色 褐色	密 ◎		
49	甑	口径 (25.0) 残高 12.1	直立する口縁部。口縁端部は尖り気味に丸い。1/3 の残存。	㋓ ヨコナデ ㋝ ハケ(8～9本/㎝)	マメツ	褐色 褐色	石・長(1 ～ 5) ◎		
50	甑	口径 (23.5) 残高 5.9	外傾する口縁部。口縁部内面に稜あり。小片。	ヨコナデ	㋓ 板ナデ ㋝ ハケ→ナデ	赤褐色 赤褐色	密 ◎		

ＳＲ１下層出土遺物観察表　土製品　（3）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
51	カマド	残高 5.5	移動式カマドの庇部。	ナデ	ナデ	褐色	石・長(1～3) ◎		5
52	紡錘車	長さ 5.8 幅 5.7 厚さ 4.2	径 1.6cm大の孔あり。ほぼ完形品。	ナデ	ナデ	灰黄色	石・長(1～2) ◎		5
53	紡錘車	長さ 6.7 幅 6.7 厚さ 2.1	土製。中央部に径 0.7cm大の円孔を穿ち、表裏面には 15 ヶの竹管文を施す。ほぼ完形品。	ナデ	ナデ	暗灰色 灰黄色	石・長(1～3) ◎		5

表 15　ＳＲ１上層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
54	坏蓋	口径 10.7 器高 4.1	丸味のある天井部。口縁端部は尖り気味。2/3 の残存。	㊦ 回転ヘラケズリ(1/2) ㊐ 回転ナデ	回転ナデ	灰黄色 灰黄色	密 ◎		
55	坏蓋	口径 10.4 器高 3.7	丸味のある天井部。口縁端部は尖り気味。復元完形品。	㊦ 回転ヘラケズリ(1/3) ㊐ 回転ナデ	㊦ 回転ナデ→ナデ ㊐ 回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1～2) ◎		6
56	坏身	たちあがり径 (11.8) 受部径 13.7 器高 3.5	たちあがりは短く内傾し、端部は尖る。復元完形品。赤焼け土器。	㊤ 回転ナデ ㊥ 回転ヘラケズリ(1/3)	回転ナデ	赤褐色 灰色	密 ◎	自然釉	6
57	坏	口径 9.1 器高 4.1	直立する口縁部。口縁端部は丸い。底部外面に回転ヘラ切り痕あり。ほぼ完形品。	㊐ 回転ナデ ㊥ 回転ヘラケズリ	㊐ 回転ナデ ㊥ 回転ナデ→ナデ	青灰色 青灰色	長(1～2) ◎		6
58	坏	口径 (8.4) 器高 4.0	直立する口縁部。口縁端部は丸い。底部外面に回転ヘラ切り痕あり。1/2 の残存。	㊐ 回転ナデ ㊥ 回転ヘラケズリ→ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
59	坏	口径 (13.3) 底径 7.8 器高 4.4	口縁部は外反し、口縁部内面に稜あり。体部下位に凹線 1 条が巡る。1/4 の残存。	㊐ 回転ナデ ㊥ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	自然釉	
60	椀	口径 13.2 底径 7.1 器高 5.6	口縁部は短く外反し、端部は丸い。底部は平底。1/3 の残存。	マメツ	回転ナデ	灰黄色 灰黄色	密 ◎		
61	高坏	底径 7.2 残高 3.9	脚端部は下方に肥厚。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
62	壺	口径 (15.0) 残高 4.2	外反する口縁部。口縁端部は上内方へ肥厚。1/3 の残存。	㊐ 回転ナデ ㊒ 平行叩き	㊐ 回転ナデ ㊒ 円弧叩き	灰色 灰色	密 ◎		
63	壺	底径 (11.1) 残高 5.7	脚付壺。脚上位に長方形状の透かし、中位に凸線が巡る。脚端面は内傾する面をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
64	甕	口径 (17.6) 残高 4.2	短く外反する口縁部。口縁部は長方形状に肥厚し、口縁端部は上方につまみ上げる。	回転ナデ	回転ナデ	灰黄色 灰黄色	密 ◎		
65	甕	口径 (19.9) 残高 10.4	長く外反する口縁部。口縁端部は下方に垂下する。	回転ナデ	㊐ 回転ナデ ㊒ 円弧叩き	暗灰色 暗灰色	密 ◎	自然釉	
66	甕	口径 (21.0) 残高 3.1	外反口縁。口縁部内面は上方に肥厚。小片。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長(1～4) ◎		
67	甕	口径 (22.0) 残高 4.7	外反口縁。口縁部内面は上方に肥厚。小片。	マメツ	マメツ	灰黄色 灰黄色	石・長(1～3) ◎		
68	甕	口径 (22.0) 残高 3.2	外反口縁。口縁端部は丸い。小片。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長(1～3) ◎		
69	椀	口径 (12.6) 残高 4.3	体部は内湾し、口縁端部は丸い。小片。	マメツ	ナデ	褐色 褐色	密 ◎		
70	椀	口径 (13.2) 器高 4.5	体部は内湾し、口縁端部は丸い。3/4 の残存。	マメツ	マメツ	赤褐色 赤褐色	石・長(1～4) ◎		6
71	高坏	残高 9.5	脚柱部片。2/3 の残存。	マメツ	㊙ マメツ ㊙ ケズリ	褐色 褐色	石・長(1～3) ◎		
72	高坏	残高 6.3	脚部接合は指込技法による。1/2 の残存。	マメツ	マメツ	灰黄色 灰黄色	石・長(1～2) ○		
73	甑	残高 8.7	把手部。舌状。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1～3) ◎		

表 16　ＳＲ１上層出土遺物観察表　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
74	鉄滓	—	鉄	2.95	4.30	1.80	25.12		6

表 17　　ＳＲ１地点不明出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
75	坏身	たちあがり径 13.0 受部径 15.3 器高 3.7	たちあがりは内傾し、端部は丸い。受部端に沈線状の凹みが巡る。完形品。	㋐ 回転ナデ ㋕ 回転ヘラケズリ(1/2)	回転ナデ	灰色 灰色	長(1 ～ 5) ◎		6
76	甕	口径 (14.0) 残高 6.0	波状文５条(2 段)＋凸線１条＋波状文９条。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰褐色	密 ◎		
77	高坏	底径 7.6 残高 3.7	脚端部はわずかに上下方に肥厚。底部完形品。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎		
78	甑	口径 (24.0) 残高 14.9	口縁端部に沈線状の凹み、体部に沈線３条あり。1/3 の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長(1 ～ 2) ◎		6
79	甕	口径 (15.0) 残高 5.7	内湾口縁。口縁端部は丸い。頸部内面に明瞭な稜あり。小片。	マメツ	㋓ ハケ ㋔ マメツ	暗褐色 褐色	石・長(1 ～ 5) ◎		
80	椀	口径 (9.5) 残高 3.6	体部は内湾し、口縁端部は尖る。小片。	ナデ→ハケ	ハケ→ナデ	黒色 褐色	密 ◎		
81	坏	口径 (14.2) 残高 3.8	体部は内湾し、口縁端部は尖る。体部内面に暗文あり。小片。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長(1 ～ 3) ◎		
82	坏	口径 (11.8) 残高 4.4	体部は内湾し、口縁端部は丸い。体部内面に暗文あり。小片。	マメツ	マメツ	赤褐色 赤褐色	石・長(1 ～ 2) ◎	黒斑	
83	高坏	残高 7.9	脚柱部。中実。2/3 の残存。	ナデ	㋖ ナデ ㋗ ケズリ→ナデ	赤褐色 赤褐色	密 ◎		
84	高坏	底径 (10.0) 残高 4.7	脚部完形品。	マメツ	ヘラケズリ→ハケ	灰黄色 赤褐色	石・長(1 ～ 3) ◎		
85	甑	残高 0.5	把手部。舌状。	ナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長(1 ～ 3) ◎		
86	紡錘車	長さ (4.0) 幅 (4.0) 厚さ 1.9	径 0.8cm大の孔あり。台形状。1/2 の残存。	ナデ	ナデ	褐色	密 ◎		6

表 18　　ＳＲ１地点不明出土遺物観察表　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
87	鉄滓	―	鉄	3.80	4.25	2.20	37.14		6

表 19　　ＳＤ４出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
88	坏	底径 (3.8) 残高 2.0	円盤高台状の底部。平底。小片。	ナデ	ナデ	灰白色 灰褐色	密 ◎		
89	椀	底径 (4.5) 残高 1.1	瓦器椀。断面方形状の高台をもつ。1/4 の残存。	ナデ	ナデ	黒色 黒色	密 ◎		

表 20　　包含層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
90	高坏	残高 11.2	脚部片。中空。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
91	壺	底径 (10.5) 残高 7.0	弥生土器。平底。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長(1 ～ 5) ◎		

表 21　　包含層出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
92	石鏃	ほぼ完形	サヌカイト	2.20	1.70	0.30	0.81	凹基無茎式	6

第３章　来住町遺跡１２次調査

第１節　調査の経過（第26・27図）

（１）調査に至る経緯

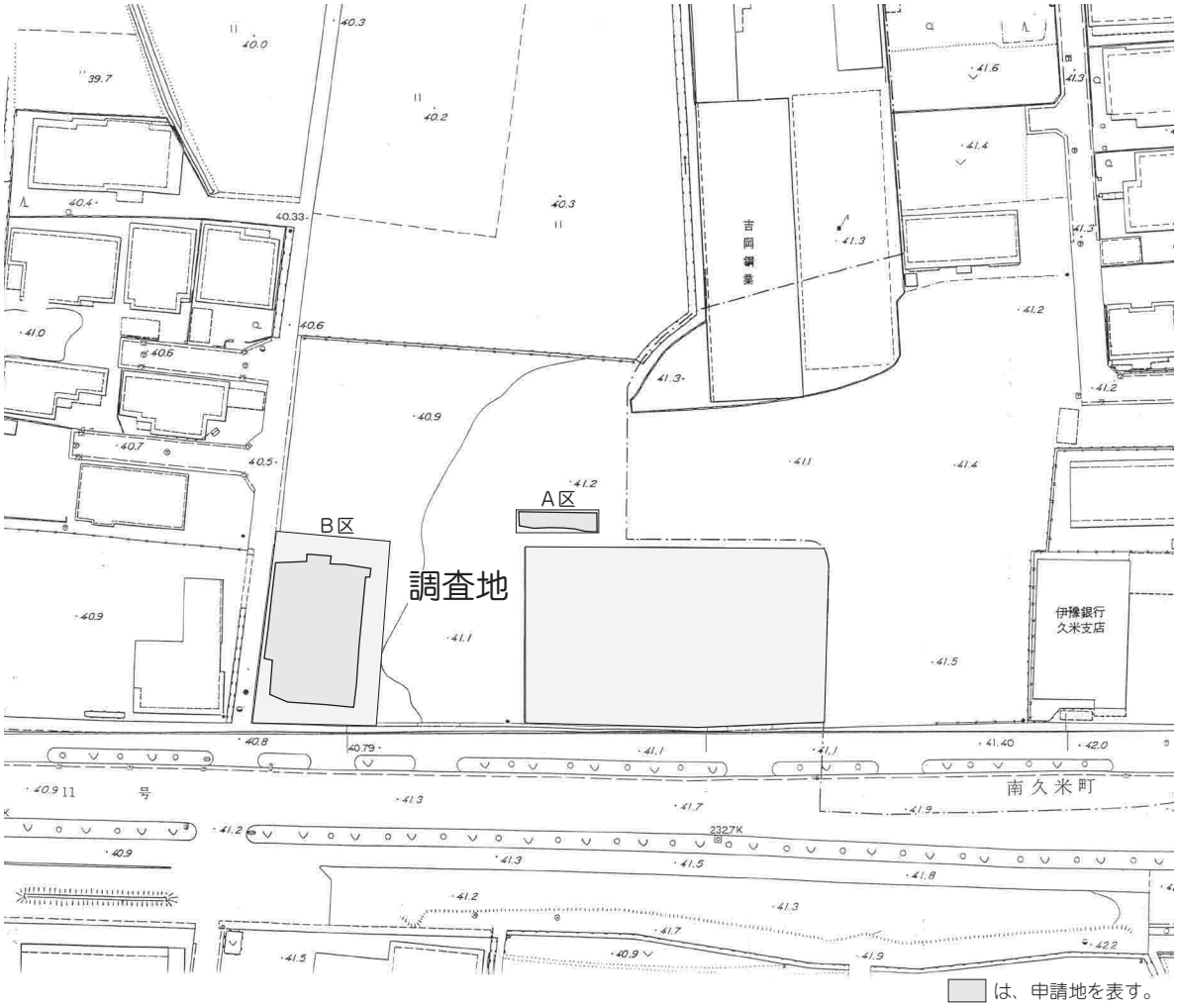
平成１３年１月２９日、松山ニューグランドホテルより立体駐車場建設と浄化槽設置に伴う埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。確認願いが提出された松山市来住町２３０番の一部、２３７番１、２４０番１は、松山市の指定する松山市文化財包蔵地『№. １２７　来住廃寺跡』内にあり、周知の包蔵地として知られている。申請地周辺にはこれまでに数多くの調査が行われ、弥生時代～古代の集落関連遺構が確認され松山平野の主要な遺跡地帯として知られている。

文化教育課では、確認願いが申請された地点についての遺跡の有無と、さらにはその範囲や性格を確認するために、平成１３年２月１６日に試掘調査を行うこととなった。試掘調査の結果、申請地には遺構、遺物が検出され、弥生時代～古代の集落関連の遺跡があることを確認した。この結果を受け申請者と文化教育課、財団法人生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）の三者は発掘調査について協議を行い、建設予定地について本格調査を実施することとなった。調査は埋文センターが主体となり、弥生時代～古代の集落構造の解明と範囲確認を主目的とし、平成１３年４月９日～平成１３年５月２５日の間に屋外調査を実施した。

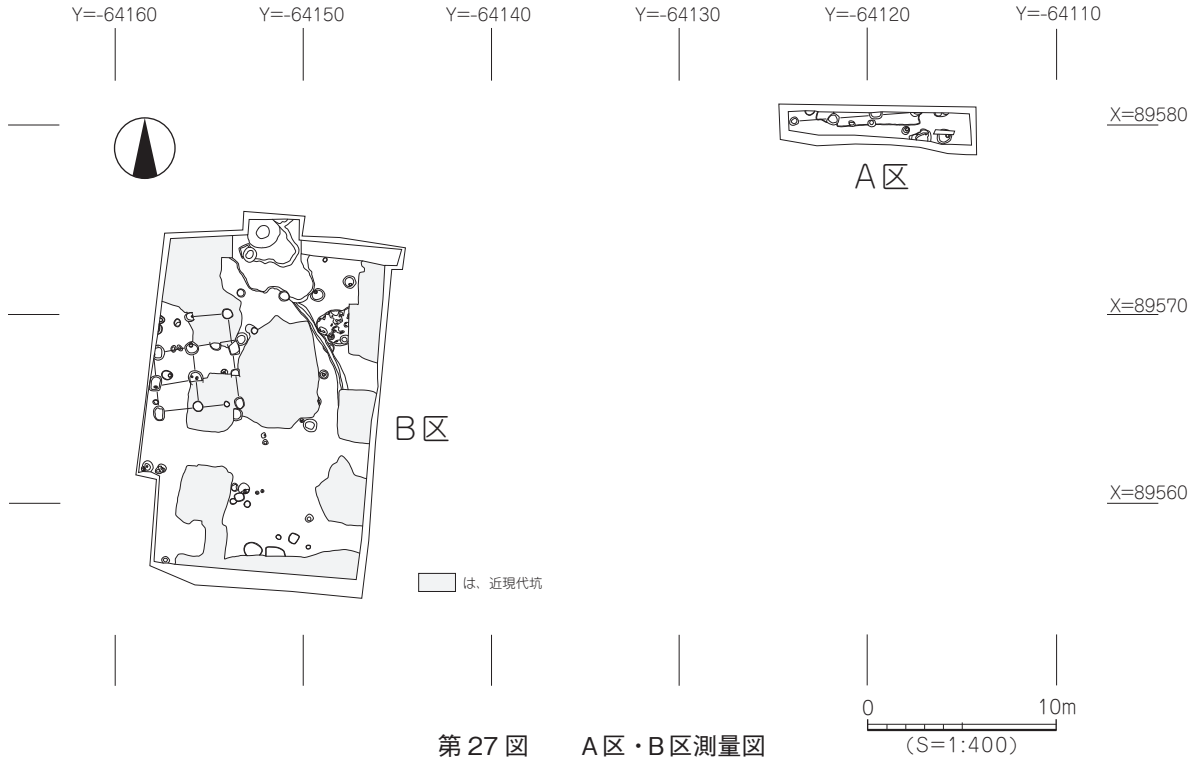
（２）調査の経過

平成１３年４月９日、調査区（Ａ区浄化槽、Ｂ区立体駐車場）に災害防止用のフェンスと赤色防犯灯を設置する。４月１０日、重機による表土剥ぎをＡ区から開始する。Ｂ区は掘削した排土を場外に搬出した。４月１１日にＡ区遺構検出状況の撮影を行い遺構の掘り下げを行う。４月１２日より遺構の測量を行う。４月１６日にはＡ区の遺構完掘と測量が終了する。４月１７日にＡ区の遺構完掘状況とＢ区の遺構検出状況の写真撮影を行いＡ区の埋戻しを行いＡ区の調査を終了する。４月１７日よりＢ区の遺構掘削を開始し調査壁の測量を行う。北側と西側は部分的に調査壁と遺構が重複したため調査区の拡張を行った。５月１８日に遺構の掘削を終了し高所作業車を使用して遺構完掘状況の写真撮影を行う。５月２１日から遺構測量と埋戻しを行い、５月２５日に調査区内の水抜き、災害防止フェンス、赤色防犯灯の撤去、発掘機材を搬出し、屋外調査を終了する。

なお、Ｂ区は国土座標に沿って４ｍ四方のグリッドを設定し西から東にＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ、北から南に１・２・３・４・５と番号を付した。Ａ区は仮ポイントを設定し、後から仮ポイントの座標測量を行った。



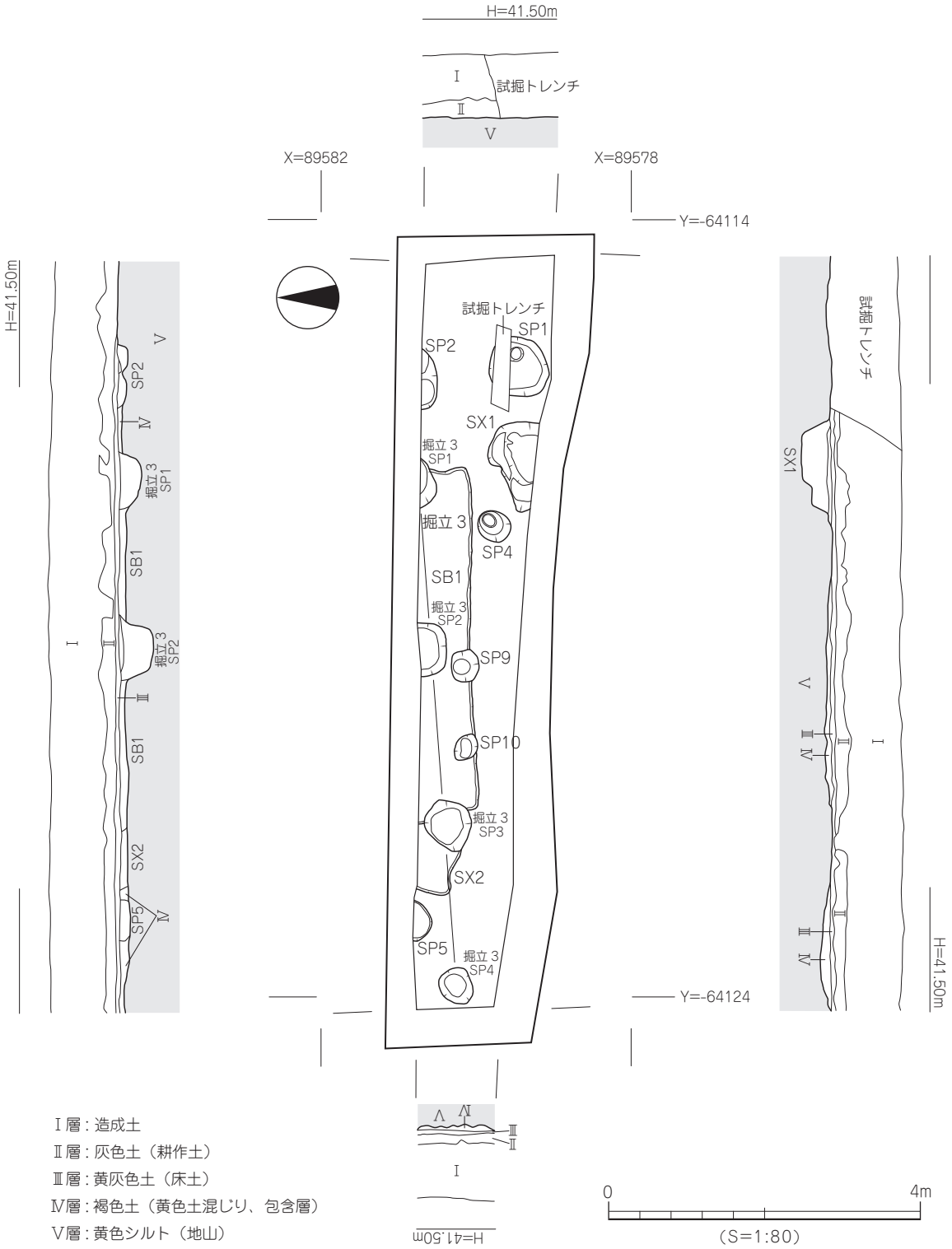
第 26 図　調査地位置図
(S=1:1,000)



第 27 図　A区・B区測量図
(S=1:400)

第２節　Ａ区の調査（第 28 図、図版７）

Ａ区は浄化槽の設置個所の調査である。現状は駐車場として使用されておりアスファルトの切断を４．２ｍ×１２．６ｍ範囲行った。調査区は幅２～２．５ｍ､長さ１０．４ｍを重機により掘削を行った。



第 28 図　　Ａ区遺構配置図・土層図

検出した遺構は竪穴建物１棟、掘立柱建物１棟、性格不明遺構２基、柱穴６基である。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、石器がある。

（１）層　位（第 28 図）

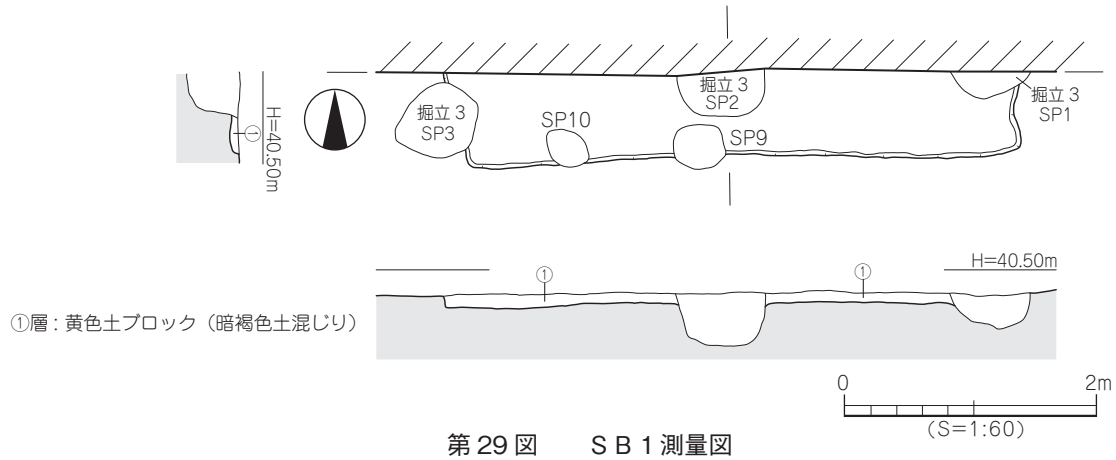
基本層位はⅠ層：造成土（厚さ 70cm）、Ⅱ層：耕作土（厚さ 12cm）、Ⅲ層：床土（厚さ 4cm）、Ⅳ層：褐色土に黄色土混じり（包含層厚さ 5cm）、Ⅴ層：黄色シルト（地山）である。Ⅴ層上面で遺構検出を行った。

（２）遺構と遺物

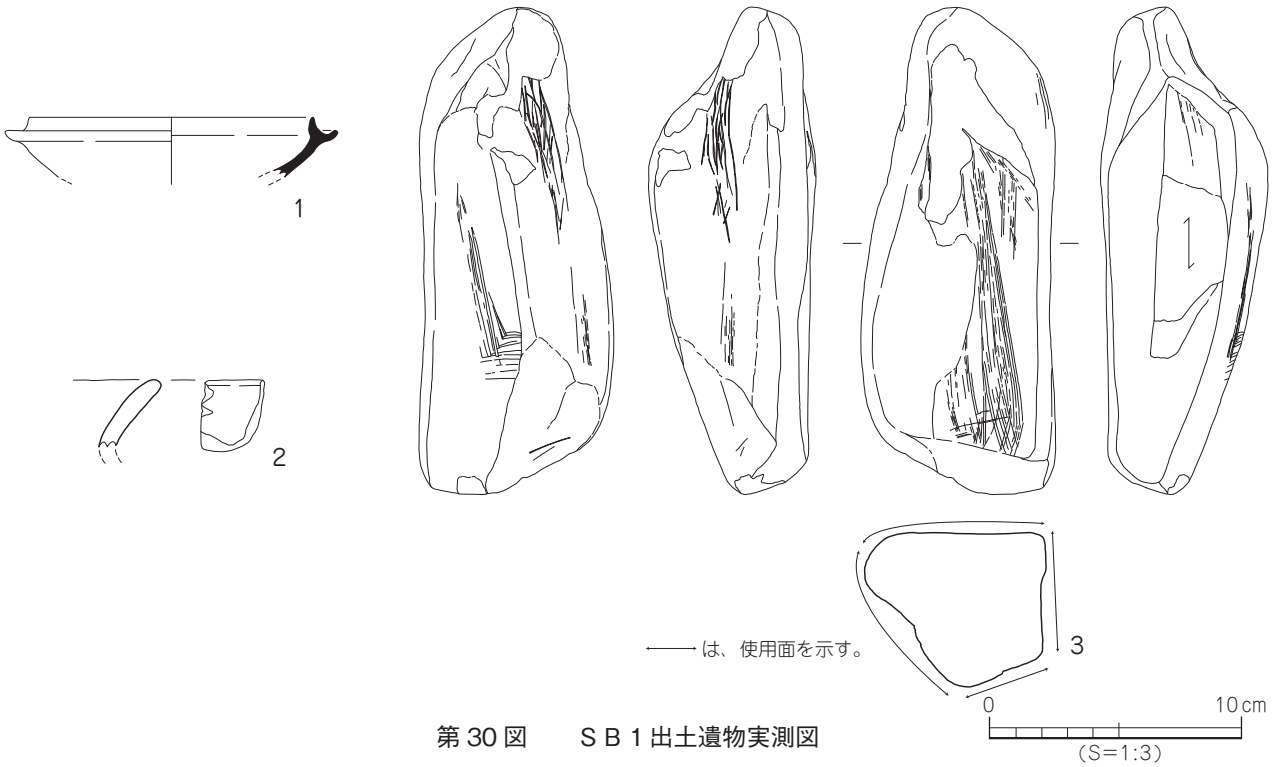
１）竪穴建物（ＳＢ）

ＳＢ１（第 29・30 図、図版 7）

ＳＢ１は調査区中央に位置し、ＳＸ２を切り掘立３の柱穴３基とＳＰ９・１０に切られ、北側は調査区外に続く。平面形態は２ヶ所のコーナー部を検出したため方形と考えられる。規模は東西４.



第 29 図　　ＳＢ１測量図



第 30 図　　ＳＢ１出土遺物実測図

５７ｍ、南北検出長０．７５ｍ、壁高１１cmを測る。内部施設は検出されていない。埋土は黄色土ブロックに暗褐色土混じりで住居の貼り床のように硬く締まっている。出土遺物は須恵器、土師器、石製品がある。

出土遺物（1～3）

1は須恵器の坏身。たちあがりは直立し端部は尖り気味に丸い、受け部は短く外上方に伸び端部は丸い。2は土師器の甕。外傾する短い口縁部の端部は丸い。3は砥石。金属を研いだ細い鋭角な溝がみられ、よく使いこまれている。

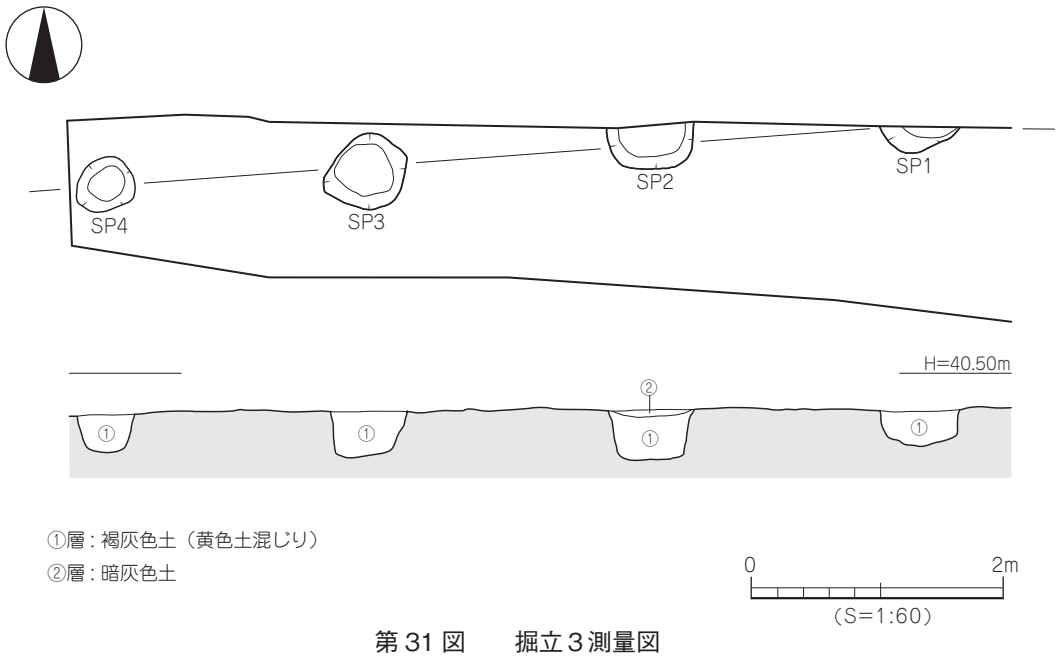
時期：出土遺物の須恵器からＳＢ１の廃棄埋没時期は古墳時代後期末とする。

２）掘立柱建物（掘立）

掘立３（第31図、図版７）

掘立３は調査区北部に位置しＳＢ１とＳＸ２を切り、柱穴２基の北側は調査区外に続く。規模は東西３間の柱穴４基を検出し検出長６．６０ｍを測る。ＳＰ１はＳＢ１と第Ⅳ層を切り、北側は調査区外に続く。平面形態は円形と思われる。規模は検出長６３cm、深さ２８cmを測る。断面形態は船底状で、埋土は褐灰色土に黄色土混じりである。ＳＰ２はＳＢ１を切り北側は調査区外に続く。平面形態は円形で、規模は検出長６８cm、深さ４０cmを測る。断面形態は逆台形状で、埋土は２層に分かれ褐灰色土に黄色土混じりと暗灰色土である。ＳＰ３はＳＢ１とＳＸ２を切る。平面形態は楕円形で、規模は長径７０cm、短径５５cm、深さ３６cmを測る。断面形態は逆台形状で、埋土は褐灰色土に黄色土混じりである。ＳＰ４は第Ⅳ層を切る。平面形態は円形で、規模は４５cm、深さ３０cmを測る。断面形態は「Ｕ」字状で、埋土は褐灰色土に黄色土混じりである。出土遺物は土師器、須恵器の小片がある。

時期：遺物が細片のため明確な時期は不明であるが、ＳＢ１を切ることから掘立３の廃棄埋没時期は古墳時代後期末以降とする。



第31図　掘立３測量図

3）性格不明遺構（ＳＸ）

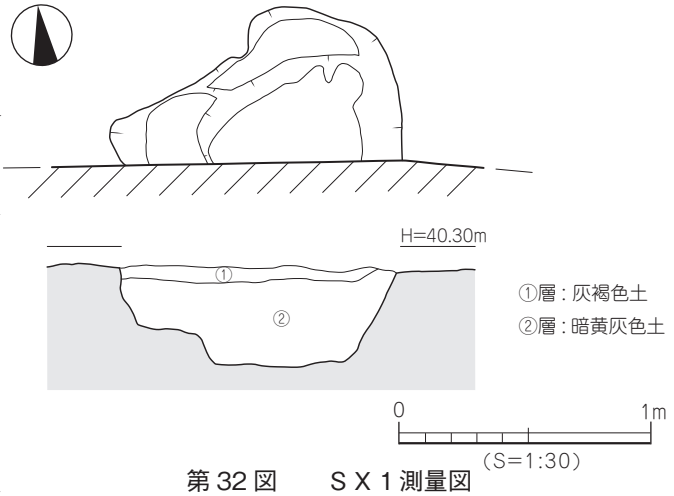
ＳＸ１（第 32・33 図、図版 7）

ＳＸ１は調査区東部に位置し南側は調査区外に続く。平面形態は不整形である。規模は東西１．１８ｍ、南北検出長０．６２ｍ、深さ３６㎝を測る。断面形態は２段掘りになり逆台形状である。埋土は①層灰褐色土、②層暗黄灰色土である。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器の小片がある。

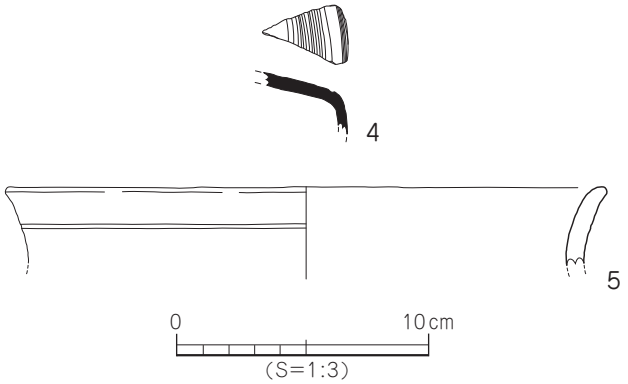
出土遺物（4・5）

4 は須恵器の壺。肩部にナデによる沈線が巡る。5 は土師器の甕。外傾する口縁部の口端部は丸い。

時期：出土遺物からＳＸ１の埋没時期は古墳時代後期末以降とする。



第 32 図　　ＳＸ１測量図

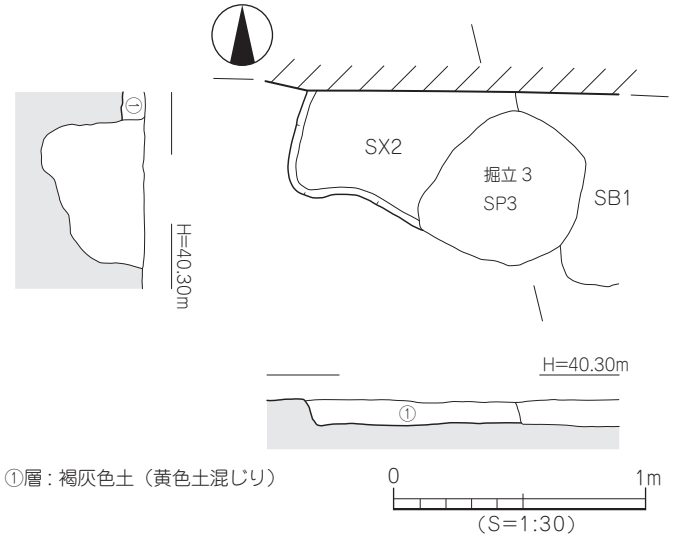


第 33 図　　ＳＸ１出土遺物実測図

ＳＸ２（第 34 図、図版 7）

ＳＸ２は調査区西部に位置し、ＳＢ１と掘立３のＳＰ３に切られ北側は調査区外に続く。平面形態は不整形である。規模は東西検出長０．９ｍ、南北検出長０．５４ｍ、深さ５．０㎝を測る。断面形態は皿状である。埋土は褐灰色土に黄色土が混じる。出土遺物はない。

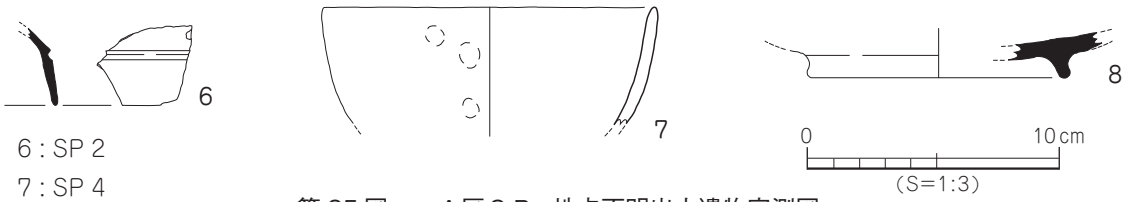
時期：出土遺物がないため時期決定は難しいがＳＢ１より先出することから古墳時代後期末以前とする。



第 34 図　　ＳＸ２測量図

4）ＳＰ出土遺物・地点不明遺物（第 35 図）

6 はＳＰ２出土の須恵器の坏蓋、口縁端部は尖り気味に丸い。7 はＳＰ４出土の土師器椀、直立気味の口縁部の端部は尖り気味である。8 は地点不明出土遺物。須恵器高台付坏。高台部は「ハ」の字状に開き端部は丸い。



6：SP 2
7：SP 4

第 35 図　　Ａ区ＳＰ・地点不明出土遺物実測図

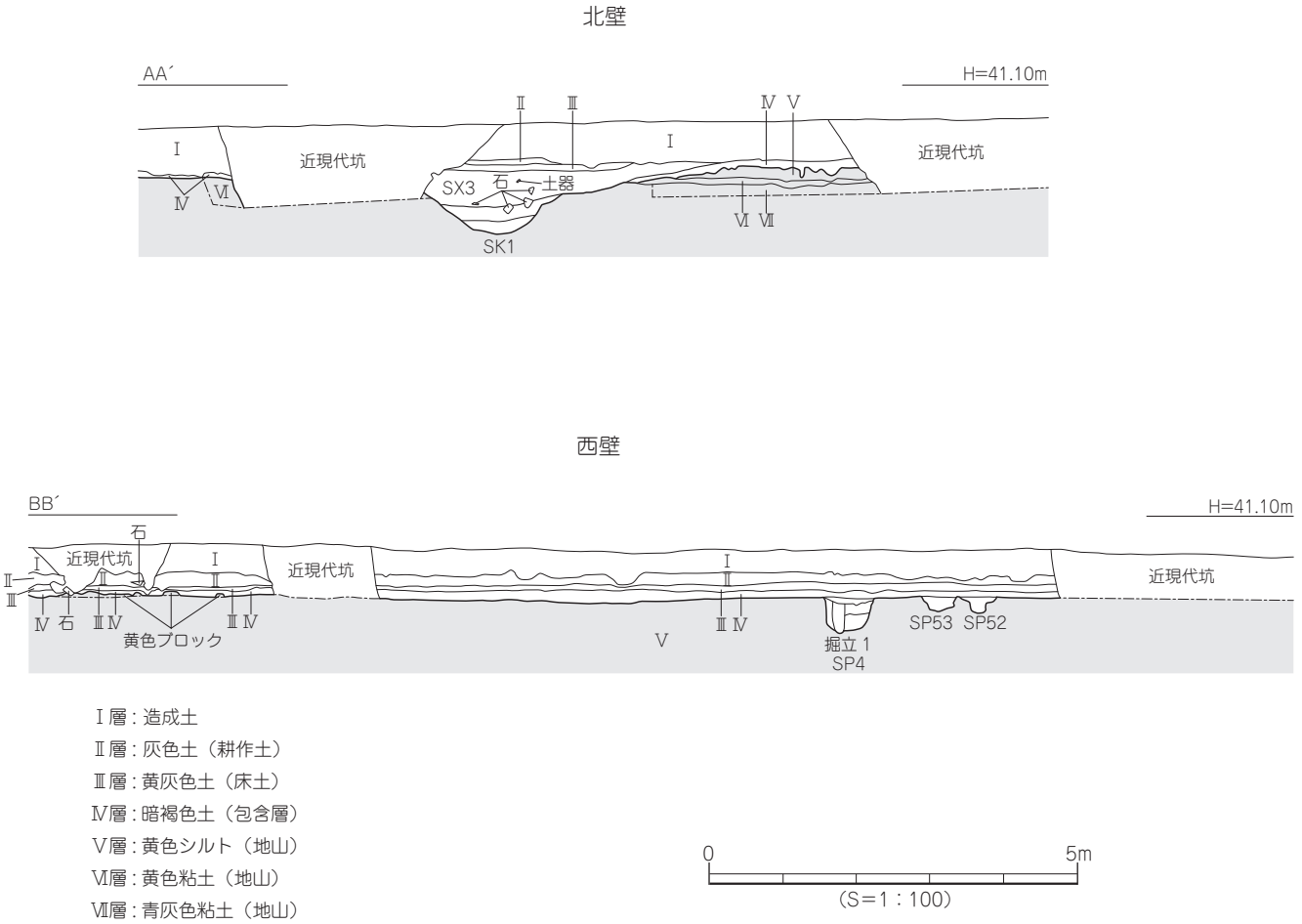
第３節　Ｂ区の調査（第 36・37 図）

検出した遺構は、掘立柱建物２棟、土坑１基、溝１条、性格不明遺構２基、柱穴４８基である。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、石器、鉄器がある。

第 36 図　　Ｂ区遺構配置図

（1）層　位（第 37 図）

基本層位は７層に分かれ、第Ⅰ層：造成土、調査区全域で厚さ 30 ～ 60cmを測る。第Ⅱ層：灰色土（耕作土）調査区の北壁と西壁で層厚８～ 20cmを測る。第Ⅲ層：黄灰色土（床土）調査区西壁で層厚６～ 12cmを測る。第Ⅳ層：暗褐色土（包含層）調査区北壁と西壁で層厚８～ 18cmを測る。第Ⅴ層：黄色シルト（地山）北壁トレンチで層厚 16cmを測る。第Ⅵ層：黄色粘土（地山）北壁トレンチで層厚１０cmを測る。第Ⅶ層：青灰色粘土 (地山) 北壁トレンチで検出した。Ｂ区は旧建物の建設、解体により大部分が近現代の掘削を受けており、堆積状況が確認できたのは西壁と北壁の一部だけである。遺構検出は第Ⅴ層上面にて行った。



第 37 図　　Ｂ区北壁・西壁土層図

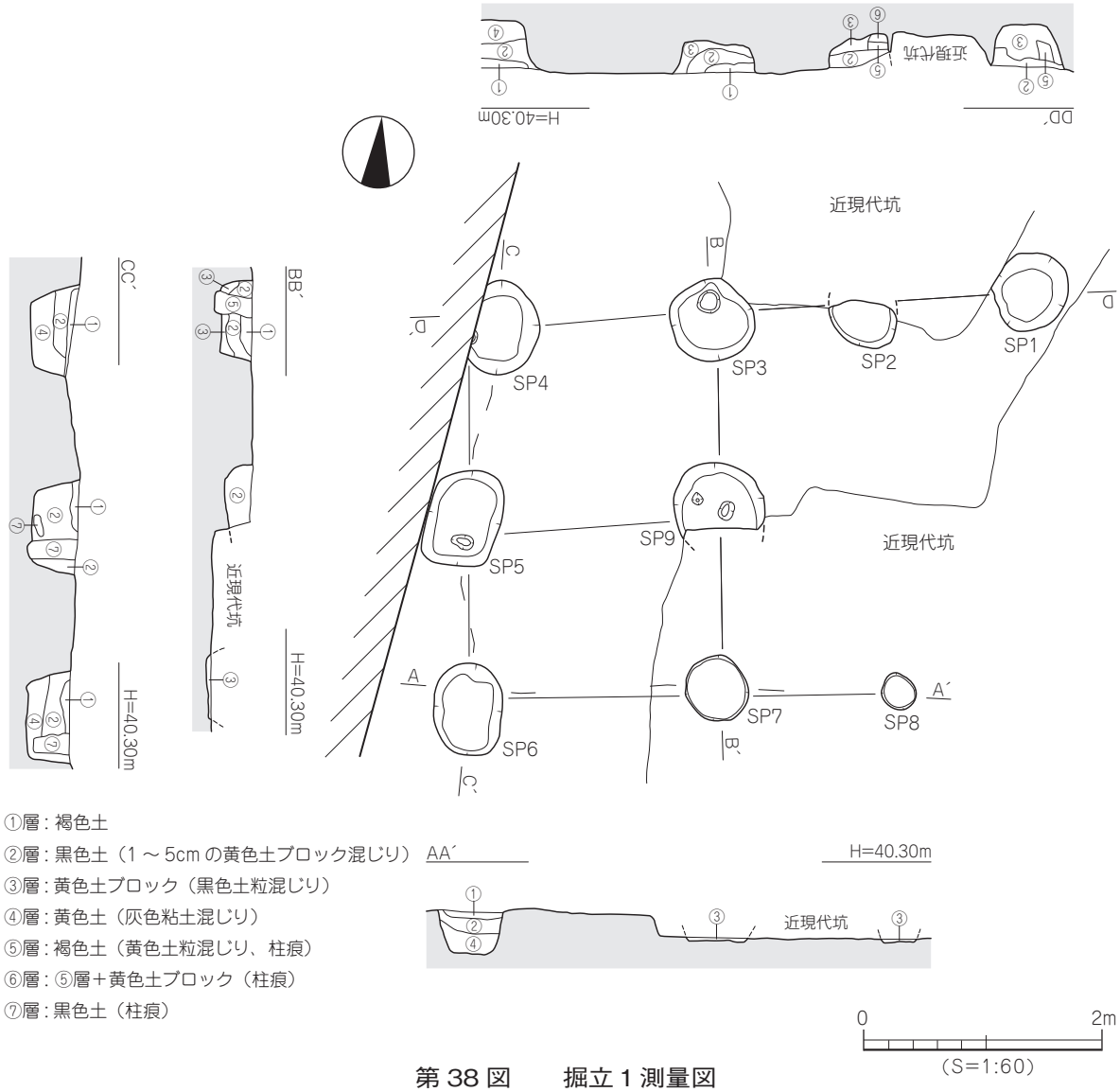
（２）遺構と遺物

１）掘立柱建物（掘立）

掘立１（第 38 図、図版８・９）

掘立１は調査区中央西のＡ３～Ｂ２区に位置し、掘立２を切り近現代坑に切られる。規模は南北２間、東西３間の柱穴９基を検出し、南北検出長３．００ｍ、東西検出長４．８０ｍを測る。柱穴の平面形態は円形と楕円形を呈する。規模は楕円形が短軸６０㎝、長軸８０㎝、深さ４５㎝、円形が径６０㎝～７５㎝、深さ２５㎝～３５㎝を測る。断面形態は「Ｕ」字状である。埋土は７層に分かれ①層：褐色土、②層：黒色土に黄色ブロック１～５㎝が混じる。③層：黄色土ブロックに黒色土粒混じり。④層：黄色土に灰色粘土混じり。⑤層：褐色土に黄色土粒混じり。⑥層：⑤層に黄色土ブロック混じり。⑦層:黒色土である。出土遺物は弥生土器の小片がＳＰ１に７点、ＳＰ２に８点、ＳＰ３に４点、ＳＰ４に１点、ＳＰ６に１点、ＳＰ７に１点、ＳＰ９に４点あるが実測可能な遺物はない。

時期：遺物が出土していないため明確な時期は不明であるが、埋土がＡ区掘立３と類似することから古墳時代後期末以降とする。



第 38 図　　掘立１測量図

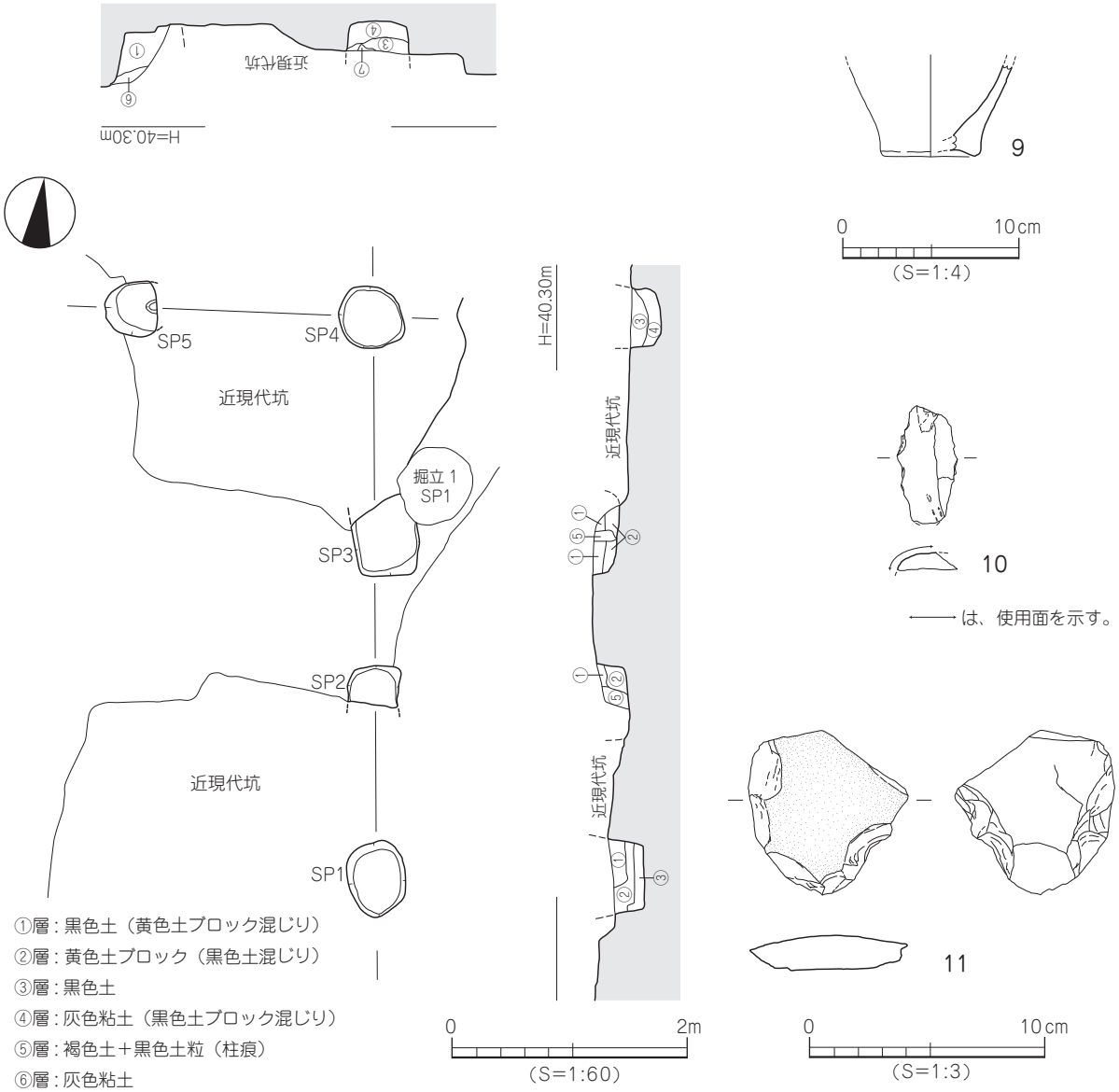
掘立２（第 39 図、図版８・9）

掘立２は調査区中央西のＡ２～Ｂ３区に位置し、掘立１と近現代坑に切られる。規模は東西１間、南北３間の柱穴５基を検出し、東西検出長１．８５ｍ、南北検出長４．８０ｍを測る。柱穴の平面形態は円形と隅丸方形を呈する。規模は径５０～６０㎝、深さ２５～４５㎝を測る。断面形態は「Ｕ」字状である。埋土は７層に分かれ①層：黒色土に黄色土ブロック混じり、②層：黄色土ブロックに黒色土混じり、③層：黒色土、④層：灰色粘土に黒色土ブロック混じり、⑤層：褐色土に黒色土粒混じり、⑥層：灰色粘土、⑦層：黄色土である。出土遺物は弥生土器の小片６点と石器がある。実測可能な遺物は弥生土器１点と石器２点である。9 の出土状況は近現代坑との境から出土しているため時期決定から除外する。

出土遺物（9 ～ 11）

9 は弥生土器の甕、上げ底の底部片。10、11 は石器。10 は滑らかな面を持ち砥石と思われる。11 はサヌカイトの刃器。

時期：遺物が細片のため明確な時期は不明であるが、埋土がＡ区掘立３と類似することから古墳時代後期末以降とする。



第 39 図　　掘立２測量図・出土遺物実測図

２）土坑（ＳＫ）

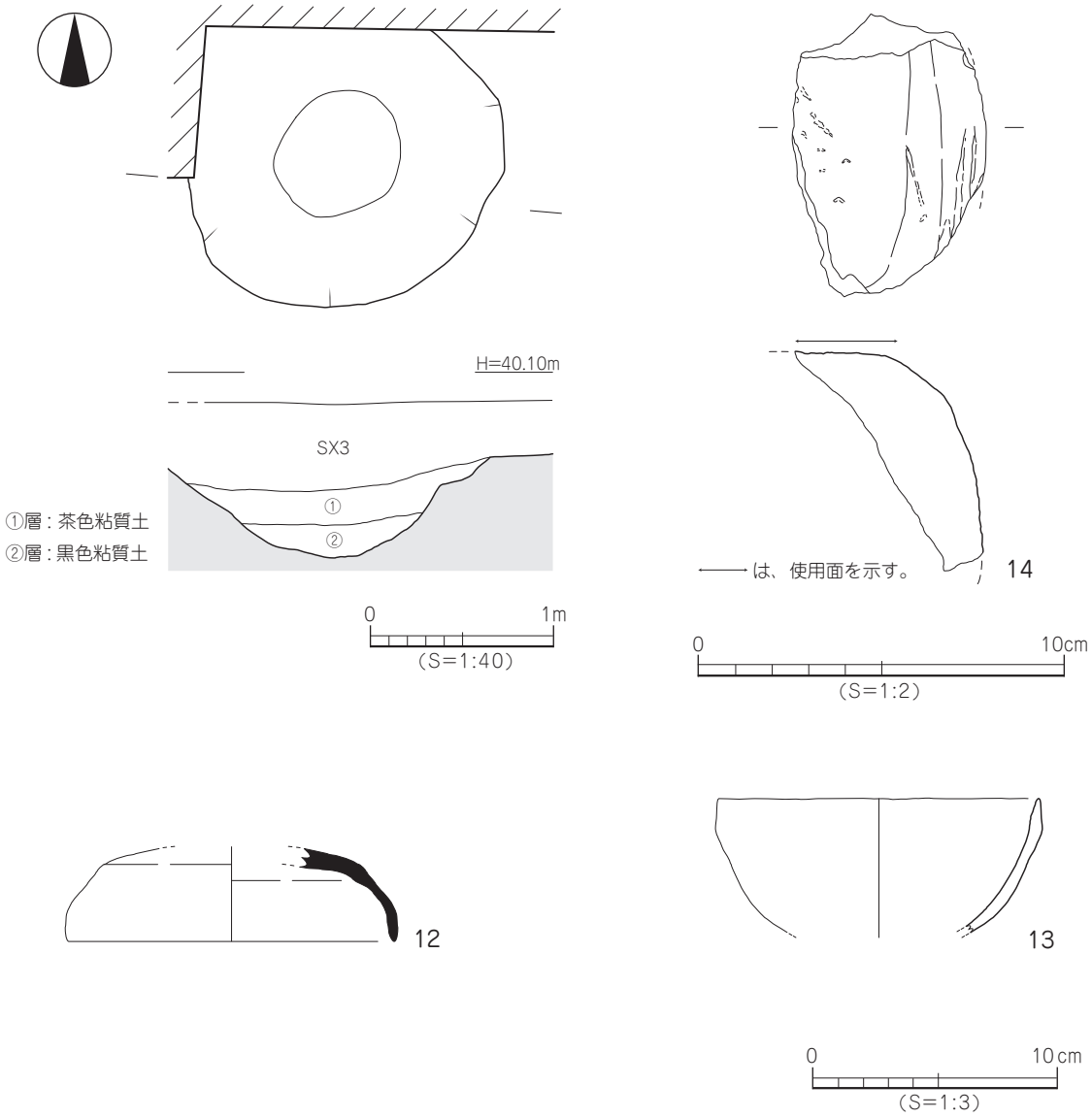
ＳＫ１（第 40 図、図版 10）

ＳＫ１は調査区北部のＢ１区に位置し、ＳＸ３が上面を覆い北側は調査区外に続く。平面形態は円形を呈し規模は径１．８ｍ、深さ０．５５ｍを測る。断面形態は擂鉢状である。埋土は２層に分かれ①層：茶色粘質土、②層：黒色粘質土である。東側第①層から２０～４０㎝の河原石が集中して出土した。出土遺物は須恵器、土師器、石器がある。

出土遺物（12 ～ 14）

12 は須恵器の坏蓋。直立気味に接地する口縁端部は尖り気味に丸い。13 は土師器の坏。口縁端部は尖り気味である。14 は砥石。１面の砥面があり使用痕が顕著である。

時期：出土遺物 12、13 の形態よりＳＫ１の埋没時期は古墳時代後期後半とする。



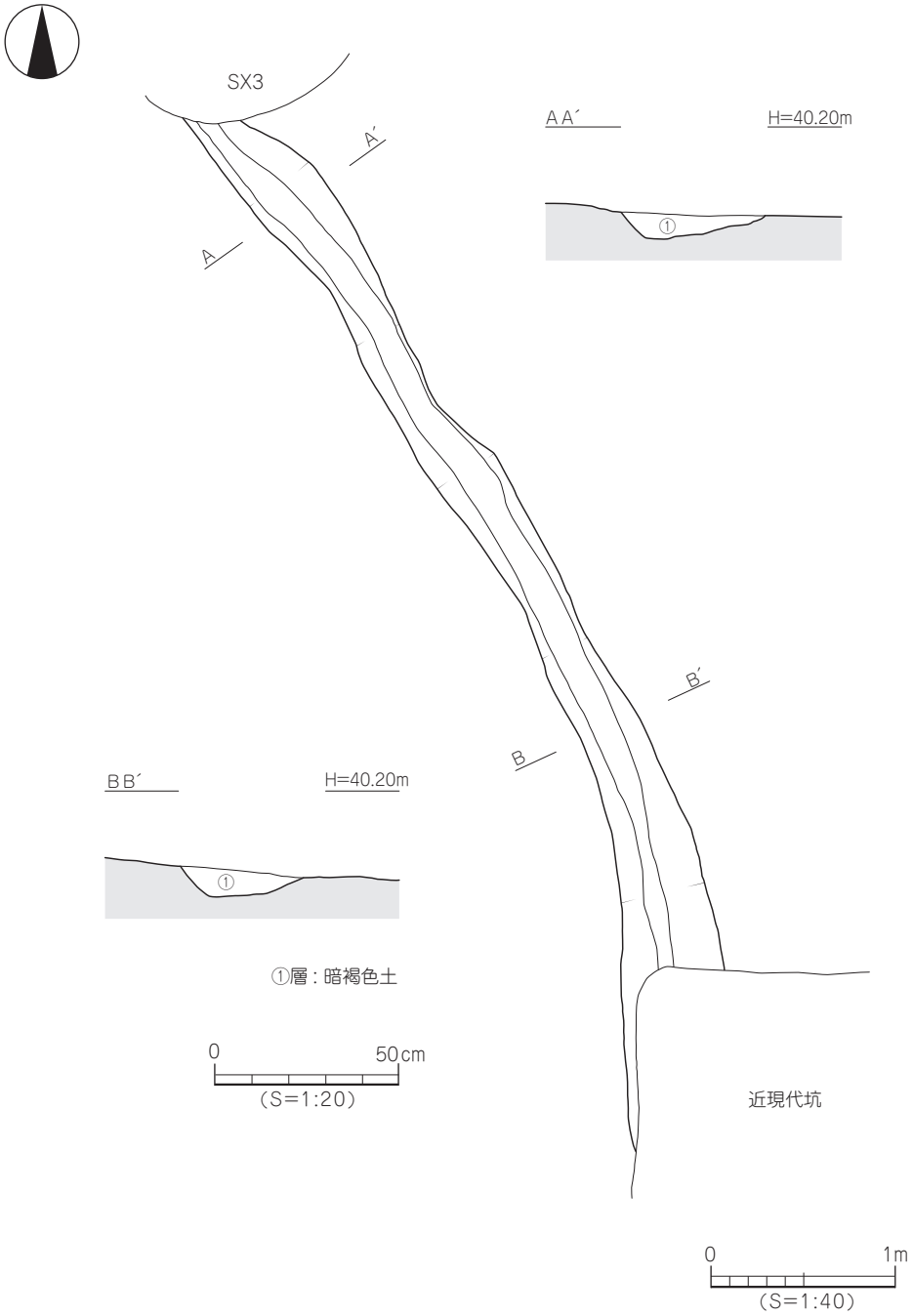
第 40 図　　ＳＫ１測量図・出土遺物実測図

3）溝（ＳＤ）

ＳＤ１（第 41 図、図版 8）

ＳＤ１は調査区北東部のＣ２・３区に位置し、ＳＰ４１を切りＳＸ３と近現代坑に切られる。規模は検出長６．３ｍ、幅２６～５５㎝、深さ１４㎝を測る。断面形態はレンズ状で、埋土は暗褐色土である。出土遺物は弥生土器の細片がある。

時期：弥生土器が出土しているが、遺物が細片のため明確な遺物から時期決定は困難であるが、ＳＸ３に切られるため古代以前とする。

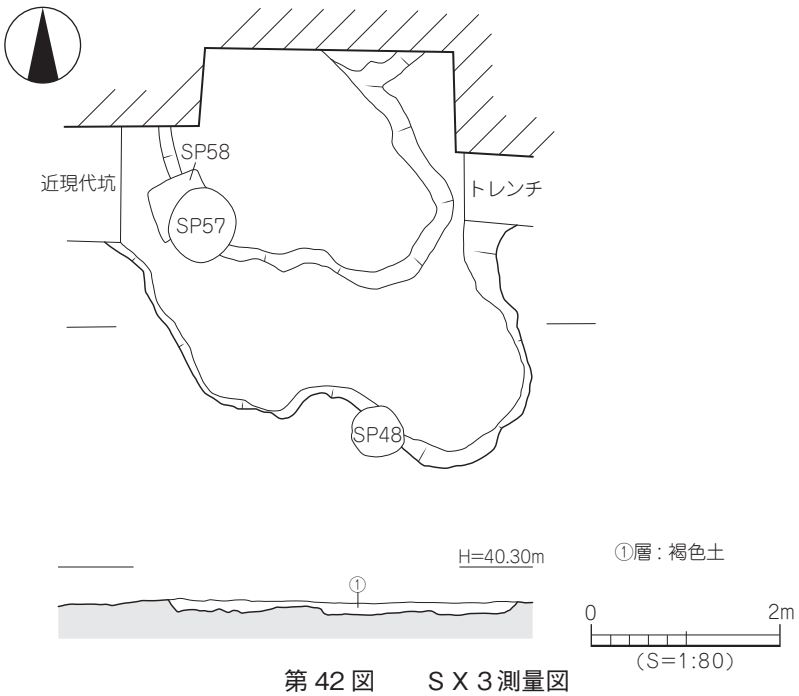


第 41 図　　ＳＤ１測量図

４）性格不明遺構（ＳＸ）

ＳＸ３（第 42 ～ 44 図、図版 11・12）

ＳＸ３は調査区北部のＢ１～Ｃ２区に位置し、ＳＤ１を切りＳＰ４８・５７・５８、近現代坑に切られる。北側は調査区外に続く。平面形態は不整形である。規模は東西３．８ｍ､南北検出長４．２ｍ、深さ５～１５㎝を測る。断面形態は皿状で底面は凹凸がある。埋土は褐色土の単層である。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、鉄器、石器がある。

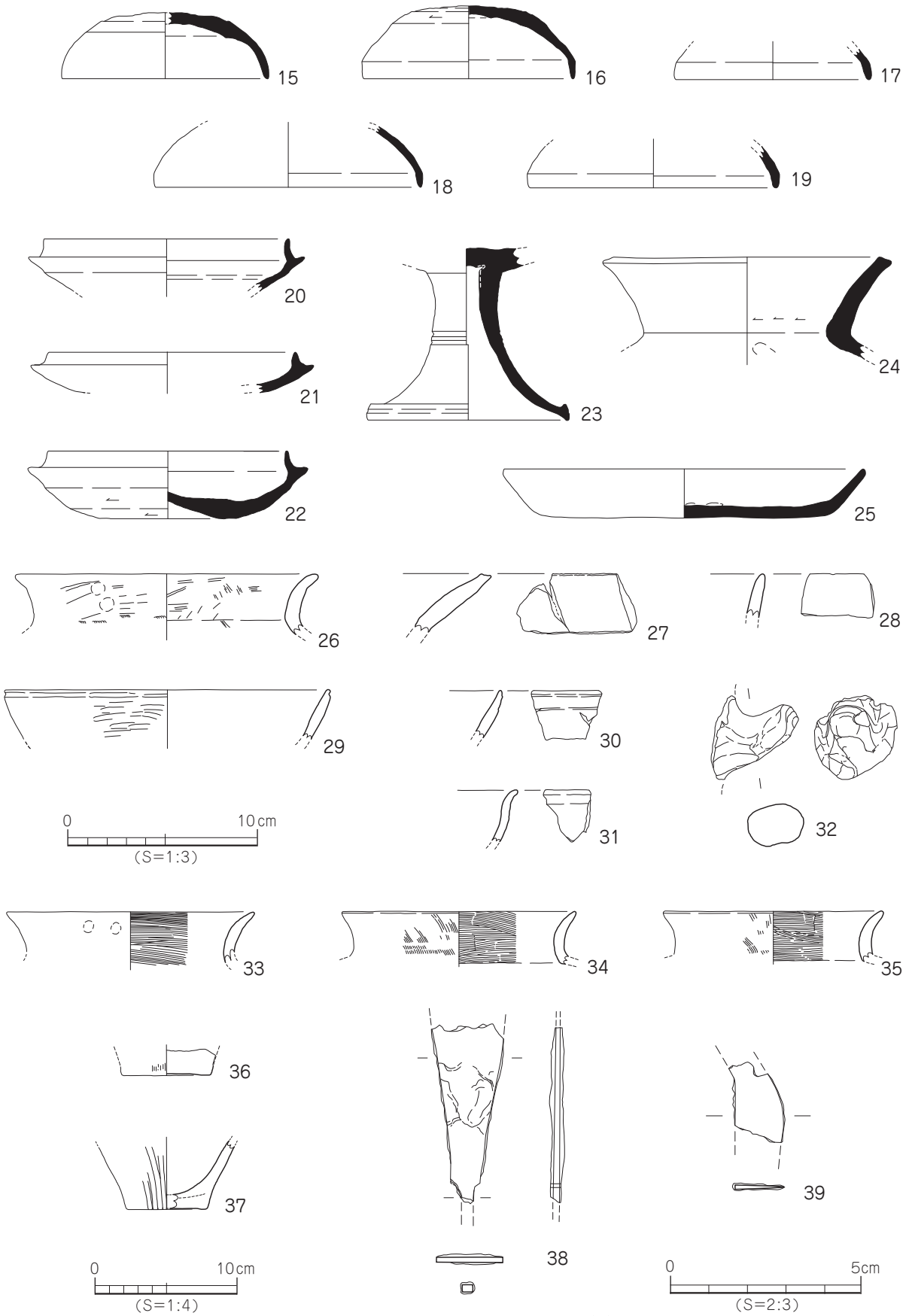


第 42 図　　ＳＸ３測量図

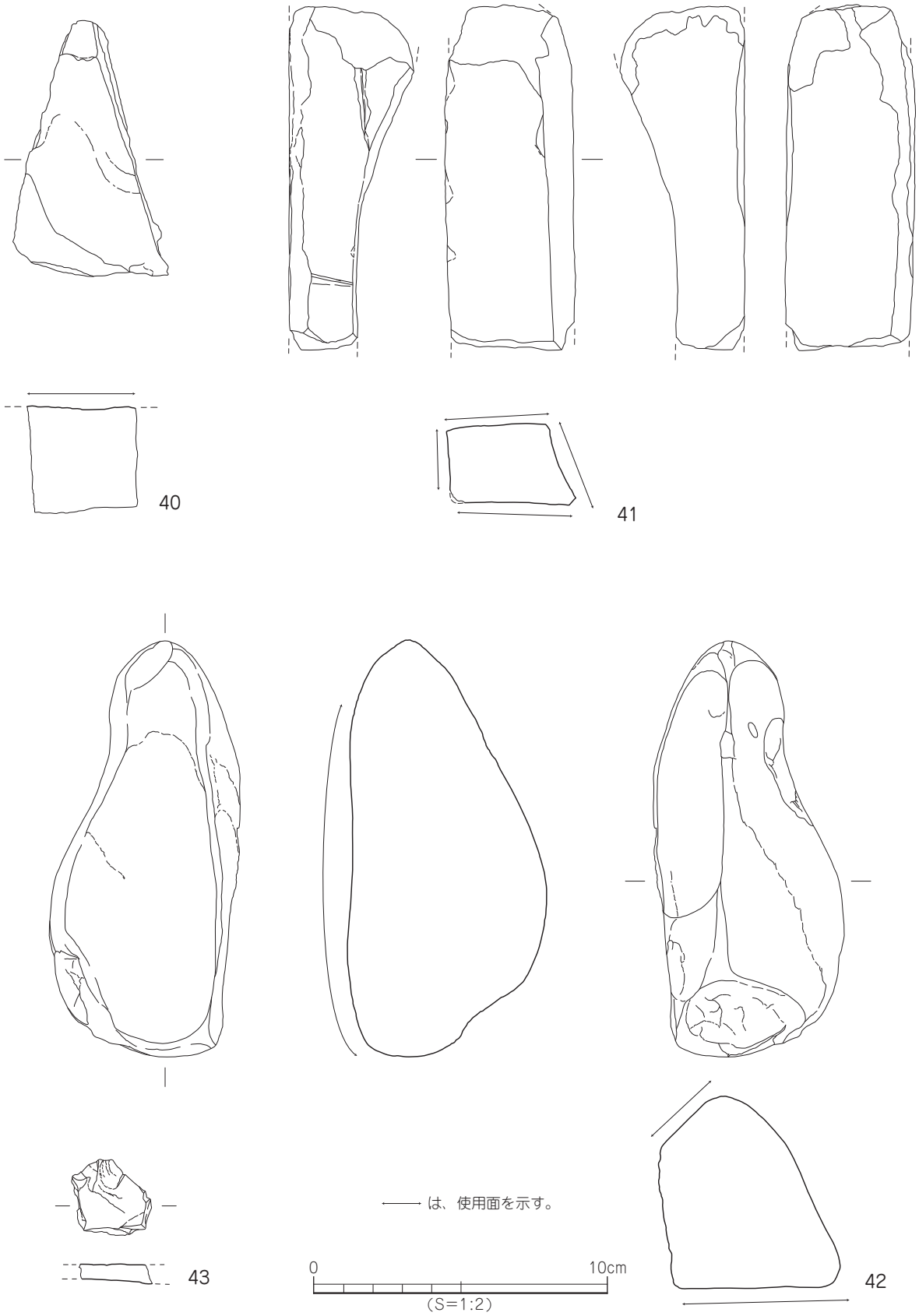
出土遺物（15 ～ 43）

15 ～ 24 は須恵器。15 ～ 19 は坏蓋、15 の口縁端部は丸みを持つ。16 は直立気味に接地する口縁部の端部は先細りで丸い。17 は口縁端部は丸い。18 の口縁端部は尖り気味に丸い。19 は口縁端部は丸みを持つ。20 ～ 22 は坏身。20 は水平に伸びる受部の端部は尖り気味で、立ち上がりの端部は丸い。21 は短く水平に伸びる受部に直立する短いたちあがりの端部は丸い。13 はたちあがりは直立気味で端部は先細りで丸い。23 は高坏形土器の脚部。「ハ」の字状に開く脚部の端部は上下に肥厚される。柱部中央に２条の沈線が巡る。24 は壺。外傾する口縁部の口端面はナデにより僅かに窪む。25 は瓦質土器の皿。短く外傾する口縁部。26 ～ 32 は土師器。26 は外反する口縁部片。27、28 は甕の口縁部片。27 は口縁部端面がナデにより窪む。29 は土師器の甕。口縁部外面にナデによる沈線がある。30、31 は坏口縁部。30 は外面に強いナデにより２本の沈線がある。31 は口端部手前で僅かに外反し端部は丸い。32 は甑の把手。断面は楕円形である。33 ～ 37 は弥生土器。33 ～ 35 は口縁部片。外反する口縁部の端部は尖り気味である。36、37 は甕底部。36 は底部中央が僅かに窪む。37 は平底の底部。38、39 は鉄製品。38 は平根鏃である。先端部と茎部を欠損している。関は短くななめ関である。関から先端部にかけて湾曲している。39 は器種不明の鉄片である。僅かに湾曲している。40 ～ 43 は石製品。40 は砥石。１面の砥面が残る。41 は砥石４面の砥面を持つ。よく使いこまれている。42 は砥石。43 はサヌカイト剥片。

時期：出土遺物の 24、25 の形態から８世紀の遺構とする。



第 43 図　　ＳＸ３出土遺物実測図（1）

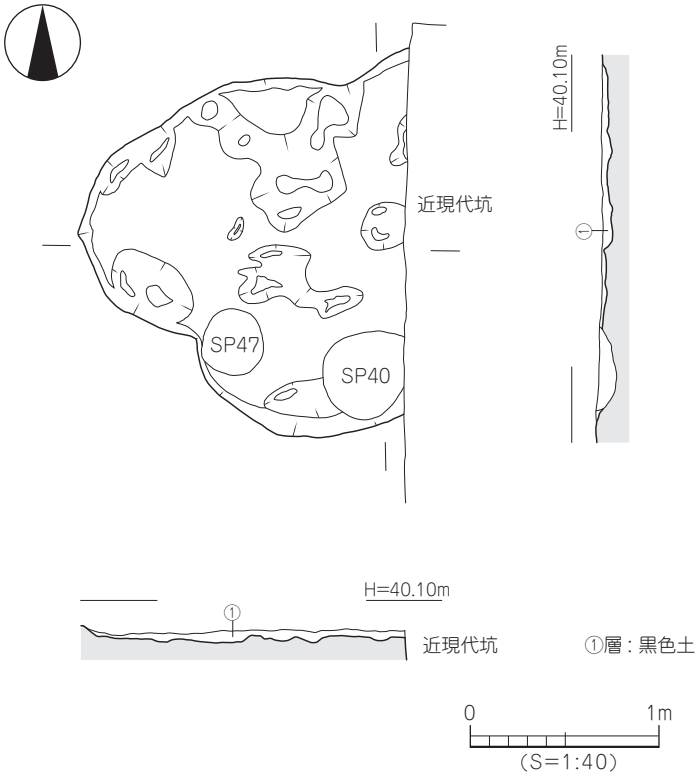


第 44 図　　ＳＸ３出土遺物実測図（2）

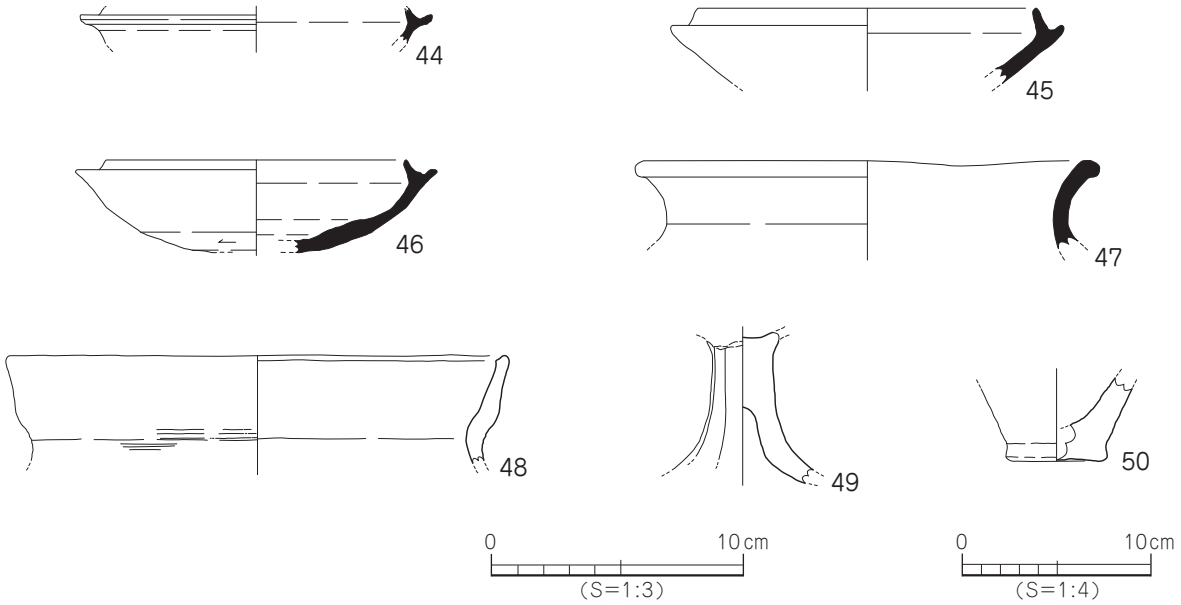
ＳＸ４（第 45 図）

ＳＸ４は調査区北東部のＣ２区に位置しＳＰ４０、ＳＰ４７と近現代坑に切られる。平面形態は不整形である。規模は東西検出長１．７ｍ、南北１．９ｍ、深さ５～１５㎝を測る。断面形態は皿状で底面には凹凸が顕著に見られる。埋土は黒色土の単層である。出土遺物は弥生土器の細片がある。

時期：出土遺物が細片であり時期決定は困難である。



第 45 図　　ＳＸ４測量図

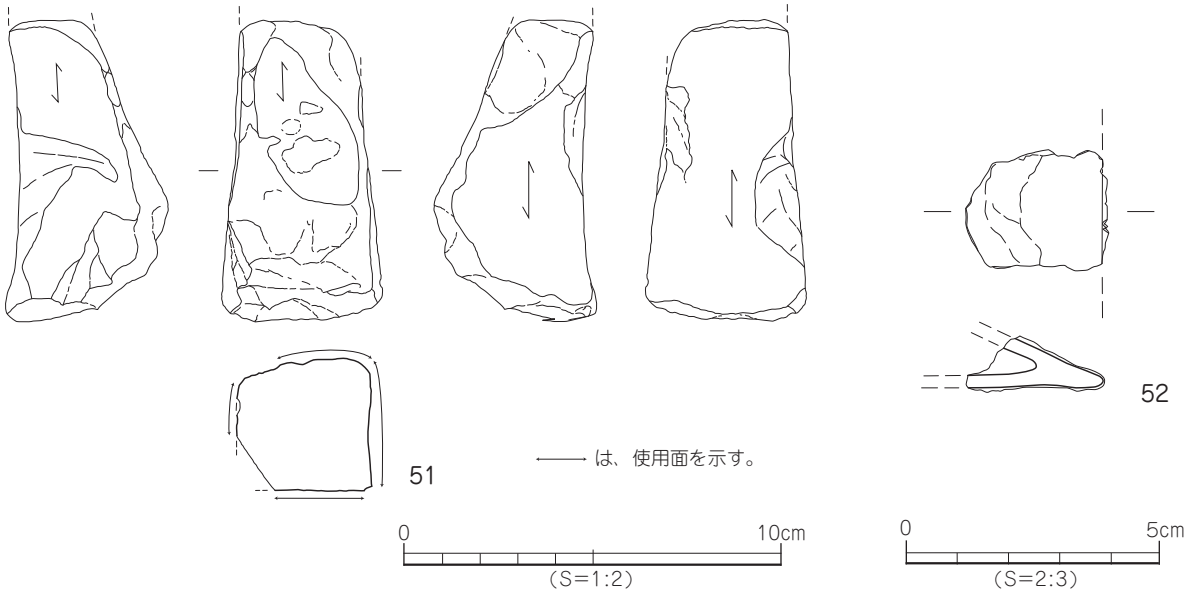


第 46 図　　Ｂ区地点不明出土遺物実測図（1）

5）地点不明出土遺物（第 46・47 図、図版 12）

44 ～ 52

44 ～ 46 は須恵器の坏身。44 のたちあがりは短く内傾し受部は短く外上方に伸びる。45 のたちあがりは内傾し端部は丸い、受部は短く外上方に伸び端部は丸い。46 のたちあがりは内傾し端部は尖り気味に丸い。受部は短く外上方に伸びる。47 は須恵器の壺口縁部。短く外反する口縁部の口端部は肥厚される。焼け歪あり。48 は土師器の甕口縁部。屈曲して外傾する口縁部、口縁部端部は内傾する面を持つ。49 は土師器の高坏の柱部。柱部外面は９面の面を持つ。50 は弥生土器の甕、僅かに上げ底の底部。51 は砥石４面の砥面を持つ。52 は鋳造品の鋤先。



第 47 図　　Ｂ区地点不明出土遺物実測図（2）

第４節　小　結

今回の調査では、古墳時代の竪穴建物１棟、掘立柱建物３棟、土坑１基、古代の性格不明遺構１基を検出した。

古墳時代

古墳時代後期後半～古墳時代後期末には、Ａ区に竪穴建物（ＳＢ）が存在し、Ｂ区北側に土坑（ＳＫ）、古墳時代後期末以降にＡ区、Ｂ区北側に掘立柱建物が存在し、２×３間、１×３間の小規模の建物である。竪穴建物、掘立柱建物、土坑を検出したことにより調査区北側は古墳時代後期末には居住区として土地利用されていたことが判明した。

古代

Ｂ区北側に位置する性格不明遺構ＳＸ３からは、弥生時代から古代の遺物が出土した。その出土遺物には、砥石３点、剥片１点と鉄製品２点が出土しており、周辺には工房的な遺構が存在する可能性が考えられる。

今回の調査からは、来住台地南東域の集落の様相がわずかに解明できた。今後は来住台地上の調査成果を整理し集落の変遷を解明する必要がある。

遺構・遺物一覧　　－ 凡例 －

（1）　以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

（2）　遺物観察表の各掲載について

法量欄　　（　）：推定復元値

調整欄　　土製品の各部名称を略記した。

例）口→口縁部、頸→頸部、胴→胴部、底→底部、天→天井部、坏→坏部、肩→肩部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、赤→赤色土粒、黒→黒色土粒、密→精製土。

（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（1 ～ 4）→「1 ～ 4mm 大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良。

表 22　竪穴建物一覧

竪穴（ＳＢ）	地　区	平面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	内部施設	出土遺物	時　期	備考
1	A区	方形	4.57m×（0.75m）× 0.11m	黄色土ブロック 暗褐色土混じり		土師器 石製品	古墳時代 後期末	掘立 3、SP9・10 に切られ SX2 を切る。

表 23　掘立柱建物一覧

掘 立	地区	方　位	規模（間）	桁行長（m）	梁行長（m）	床面積（㎡）	柱穴埋土	出土遺物	時　期	備考
1	B区 A2 ～ B3	東西	2 × 3	4.8	3.0	14.4	褐色土 黒色土に黄色土混 黄色土ブロックに黒色土粒混 黄色土に灰色粘土混	弥生土器	古墳時代 後期末以降	掘立 2 を切る。
2	B区 A2 ～ B3	南北	1 × 3	4.8	1.85	8.88	黒色土に黄色土ブロック混 黄色土ブロックに黒色土混 黒色土 灰色粘土に黒色土ブロック混 灰色粘土、黄色土	弥生土器 石器	古墳時代 後期末以降	掘立1に切られる。
3	A区	東西	3	6.6			褐灰色土に黄色土混じり、暗灰色土	土師器 須恵器	古墳時代 後期末以降	SB1、SX2 を切る。

表 24　土坑一覧

土坑（ＳＫ）	地　区	平面形	断面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備考
1	B区 B1	円形	擂鉢状	1.80 ×（1.50）× 0.55	茶色粘質土 黒色粘質土	土師器 須恵器 石器	古墳時代 後期後半	SX3 が上面を覆う。

表 25　溝一覧

溝（ＳＤ）	地　区	方　向	断面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備考
1	B区 C2 ～ 3	北西～南	皿状	6.30 × 0.24 ～ 0.55 × 0.14	暗褐色土	弥生土器	古代以前	SP41 を切り SX3に切られる。

表 26　性格不明遺構一覧

性格不明遺構（ＳＸ）	地　区	平面形	断面形	規　模 長さ（長径）×幅（短径）×深さ（m）	埋土	出土遺物	時期	備　考
1	A区	不整形	逆台形状	1.18 ×（0.62）× 0.36	灰褐色土 暗黄灰色土	弥生土器 土師器 須恵器	古墳時代 後期末	
2	A区	不整形	皿状	（0.9）×（0.54）× 0.05	褐灰色土に 黄色土混じり		古墳時代 後期末以前	SB1 と掘立 3 に切られる。
3	B区 B1 ～ C2	不整形	皿状 底面凸凹	（4.2）× 3.8 × 0.05 ～ 0.15	褐色土	弥生、土師須恵、瓦質鉄器、石器	古代	SK1・SD1 を切り、SP48・57・58 に切られる。
4	B区 C2	不整形	皿状 底面凸凹	1.9 ×（1.7）× 0.05 ～ 0.15	黒色土	弥生土器	不明	SP40・47 に切られる。

表 27　ＳＢ１出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面） （内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	坏身	口径（11.3） 残高 2.4	たちあがりは直立し端部は尖り気味に丸い。受部は短く外上方に伸び端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
2	甕	残高 2.7	外傾する短い口縁部の端部は丸い。	マメツ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1）金 ◎		

表 28　ＳＢ１出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
3	砥石	完形		19.4	7.5	6.4	110.18		12

表 29　ＳＸ１出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面） （内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
4	壺	残高 2.4	肩部にナデによる沈線が巡る。	回転ナデ カキメ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
5	甕	口径（23.6） 残高 3.0	外傾する口縁部、口縁端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳橙色 乳橙色	密 ◎		

表 30　ＳＰ 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面） （内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
6	坏蓋	残高 3.1	口縁端部は尖り気味に丸い。	回転ナデ	回転ナデ	乳灰色 乳灰色	密 ◎	SP2	
7	埦	口径（13.2） 残高 4.7	直立気味の口縁部の端部は尖り気味である。	マメツ	マメツ （指頭痕）	橙色 淡黄色	石・長（1） ○	SP4	

表 31　A区地点不明出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面） （内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
8	高台付坏	底径（10.2） 残高 1.8	高台は「ハ」の字状に開き端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	淡褐灰色 淡褐灰色	密 ○		

表 32　掘立２出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
9	甕	底径 (5.0) 残高 5.2	上げ底の底部。	マメツ	マメツ	明赤褐色 にぶい褐色	石・長（1～2） ◎		

表 33　掘立２出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
10	砥石			4.9	2.6	0.8	12.38	SP4	
11	刃器		サヌカイト	7.0	6.8	1.5	84.78	SP4	

表 34　ＳＫ１出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
12	坏蓋	口径 (13.4) 残高 3.8	直立気味に接地する口縁端部は尖り気味に丸い。	㊦ 回転ヘラケズリ ㊐ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 暗青灰色	長（1） ◎		
13	坏	口径 (13.3) 残高 5.5	口縁端部は尖り気味である。	㊐ ヨコナデ マメツ	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	密 ◎		

表 35　ＳＫ１出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
14	砥石			7.6	5.3	2.7	169.86		12

表 36　ＳＸ３出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
15	坏蓋	口径 (10.8) 残高 3.5	口縁端部は丸みを持つ。	㊦ 回転ヘラケズリ ㊐ 回転ナデ	回転ナデ ナデ	灰色 灰色	石（1）密 ◎		
16	坏蓋	口径 (11.2) 残高 3.9	口縁部は直立気味に接地し、口端部は先細りで丸い。	㊦ 回転ヘラケズリ ㊐ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長（1）密 ◎		
17	坏蓋	口径 (10.2) 残高 1.6	口縁部の小片。口端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長（1）密 ◎		
18	坏蓋	口径 (14.1) 残高 3.2	口縁部片。口縁端部は尖り気味に丸い。	㊐ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	石・長（1） ◎		
19	坏蓋	口径 (13.0) 残高 1.9	口縁部の小片。口縁端部は丸みを持つ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長（1～2） ◎		
20	坏身	口径 (12.8) 残高 2.7	水平に伸びる受部の端部は尖り気味で、たちあがりは直立し端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	紫灰色 青灰色	石・長（1）密 ◎　自然釉		12
21	坏身	口径 (13.1) 残高 2.2	短く水平に伸びる受部に直立する短いたちあがりの端部は丸い。	回転ナデ マメツ	回転ナデ	灰黄白色･灰黄橙色 灰黄橙色	石・長（1）赤 ◎		
22	坏身	口径 (12.6) 残高 3.6	たちあがりは直立気味で端部は先細りで丸い。受部は短く水平に伸び丸い。	㊐ 回転ナデ ㊧ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	乳灰色 灰色	密 ◎自然釉・焼け歪		
23	高坏	底径 (10.5) 残高 9.1	「ハ」の字状に開く脚部の端部は上下に肥厚され、柱部中央に２条の沈線が巡る。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長（1）密 ◎		

ＳＸ３出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
24	壺	口径 (14.0) 残高 5.4	外傾する口縁部の口端面はナデにより僅かに窪む。	回転ナデ	回転ナデ ナデ	灰色 灰黄色	密 ◎		
25	皿	口径 (19.0) 底径 (14.8) 残高 2.6	短く外傾する口縁部、口端部は丸い。	ヨコナデ マメツ	ヨコナデ ナデ 指頭痕	灰白色 灰白色	石・長（1～2） ◎		
26	甕	口径 (15.9) 残高 3.2	外反する口縁部端部は丸い。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～2）赤 ◎		12
27	甕	残高 3.1	口縁部片。口縁部端面はナデにより窪む。	マメツ	マメツ	淡黄色 橙色	長（1） ◎		
28	甕	残高 2.3	口縁部の小片。端部は丸い。	マメツ	ヨコナデ	明赤褐色 橙色	石・長（1） ◎　黒斑		
29	坏	口径 (17.1) 器高 2.6	口縁端部外面にナデによる沈線あり。	⑪ ヨコナデ ヘラミガキ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	密 ◎		
30	坏	残高 2.5	口縁部の小片。外面に強いナデによる２本の沈線あり。	ナデ→ミガキ	ヨコナデ	赤褐色 赤褐色	密 ◎		
31	坏	残高 2.7	口縁部の小片。口端部手前でわずかに外反し端部は丸い。	ヨコナデ マメツ	マメツ	赤褐色 赤褐色	密 ◎		
32	甑	残高 4.5	把手。断面楕円形。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長（1～3）金 ◎		
33	甕	口径 (17.4) 残高 3.7	外反する口縁部の端部は尖り気味である。	ナデ	ハケ(8～9本/cm)	褐灰色 褐灰色・灰褐色	石・長（1）金 ◎		
34	甕	口径 (16.2) 残高 3.7	外反する口縁部の端部は尖り気味に丸い。	ハケ(8～9本/cm) ヨコナデ	ハケ(8～9本/cm)	にぶい橙色 灰黄色・褐灰色	石・長（1～2）金 ◎		
35	甕	口径 (15.3) 残高 3.6	外反する口縁部の端部は丸い。	ハケ→ナデ	ハケ(8～9本/cm)	にぶい橙色 灰黄色・褐灰色	石・長（1～2）金 ◎		
36	甕	底径 (6.2) 残高 1.8	平底の底部中央部が僅かに窪む。	ハケ→ナデ	欠損	にぶい橙色 浅黄橙色	石・長（1～3） ◎		
37	甕	底径 (5.6) 残高 4.8	平底の底部。	マメツ 一部ミガキ	ナデ	茶褐色 灰黄褐色	石・長（1～3） ◎		

表 37　ＳＸ３出土遺物観察表　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
38	鉄鏃（平根鏃）	ほぼ完形（先端欠）	鉄	(4.7)	(1.9)	0.35	6.32		12
39	鉄片（不明）		鉄	(2.1)	(1.5)	0.2	1.50		

表 38　ＳＸ３出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
40	砥石			8.7	5.0	4.4	222.81		12
41	砥石	完形	石英粗面岩？	11.7	4.3	4.3	241.11		12
42	砥石	完形		14.2	6.15	6.7	664.81		
43	剥片		サヌカイト	2.6	2.5	0.75	6.56		

表 39　　B 区地点不明出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（㎝）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
44	坏身	残高　1.4	小片。たちあがりは短く内傾する。受部は短く外上方に伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎　自然釉		
45	坏身	口径　(13.4) 残高　3.0	たちあがりは内傾し端部は丸い。受部は短く外上方に伸び端部は丸い。	㊐ 回転ナデ	回転ナデ	淡灰黄色 淡灰黄色	石・長（1 ～ 2） ◎		
46	坏身	口径　(11.9) 残高　1.7	たちあがりは内傾し端部は尖り気味に丸い。受部は外上方に短く伸びる。	㊐ 回転ナデ ㊞ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	灰色 灰色	長（1）密 ◎		
47	壺	口径　(17.6) 残高　3.5	短く外反する口縁部、口縁端部は肥厚される。焼け歪あり。	回転ナデ	回転ナデ	暗青灰色 暗青灰色	密 ◎　焼け歪		
48	甕	口径　(19.7) 残高　4.3	屈曲し外傾する口縁部、口縁端面は内傾する面を持つ。	ハケ マメツ	㊐ ヨコナデ マメツ	橙褐色 明褐色	石・長（1 ～ 2）金 ◎		
49	高坏	残高　6.0	土師、基部径 2.7㎝。柱部外面は 9 面の面を持つ。	ケズリ→ナデ	ナデ	明赤褐色 にぶい橙色	石・長（1） ◎		12
50	甕	底径　(4.6) 残高　4.4	僅かに上げ底の底部。	マメツ ㊞ ナデ	マメツ	明赤褐色 褐色	石・長（1 ～ 3） ◎		

表 40　　地点不明出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(㎝)	法量 幅(㎝)	法量 厚さ(㎝)	法量 重さ(g)	備考	図版
51	砥石			8.0	4.0	3.9	151.00		

表 41　　地点不明出土遺物観察表　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(㎝)	法量 幅(㎝)	法量 厚さ(㎝)	法量 重さ(g)	備考	図版
52	鋤先		鉄	(2.4)	(2.8)	1.0	9.29	鋳造品	12

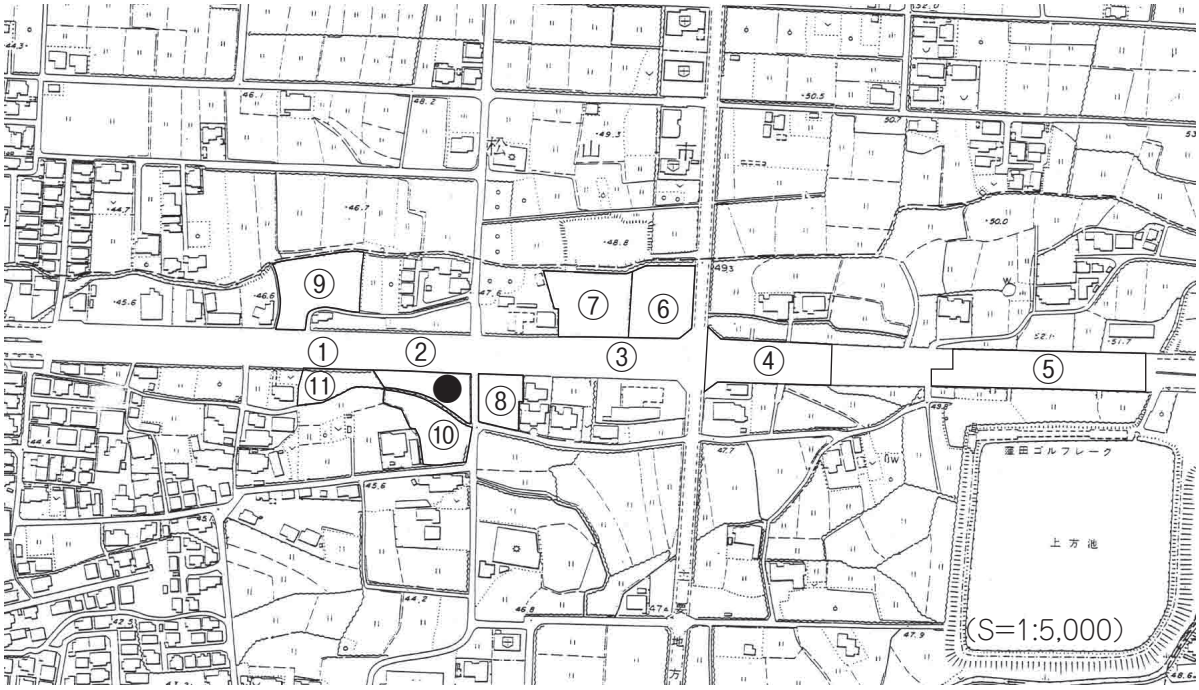
第４章　久米窪田森元遺跡４次調査

第１節　調査の経過

（１）調査に至る経緯（第 48 図）

平成元年９月、松山市久米窪田 859-1 外における店舗建設に先立って、当該地が松山市の周知の埋蔵文化財包蔵地「№129　鷹ノ子遺物包含地②」内に位置することから、埋蔵文化財確認願及び文化財保護法第 57 条の２第１項の届出書（以下、届出書）が松山市教育委員会（以下、市教委）に提出された。これを受け、市教委は資料と遺跡分布調査を実施し、結果、遺跡が展開することを推測するに至った。その後、この結果と届出書を受けた愛媛県教育委員会より発掘調査の指示が下りたため、申請者及び関係者と協議し、発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、市教委文化教育課及び松山市埋蔵文化財センターが主体となり、平成９年 12 月 15 日より着手した。

なお、申請地周辺では、久米窪田Ⅰ～Ⅴ遺跡、久米窪田森元遺跡、久米窪田森元遺跡２・３次調査、久米窪田古屋敷遺跡、久米窪田古屋敷Ｃ遺跡など縄文時代～中世までの集落関連遺構が確認されている。特に円面硯、墨書土器、瓦、人形代、木簡等の遺物は郡衙関連のものとして注目される重要な地域である。

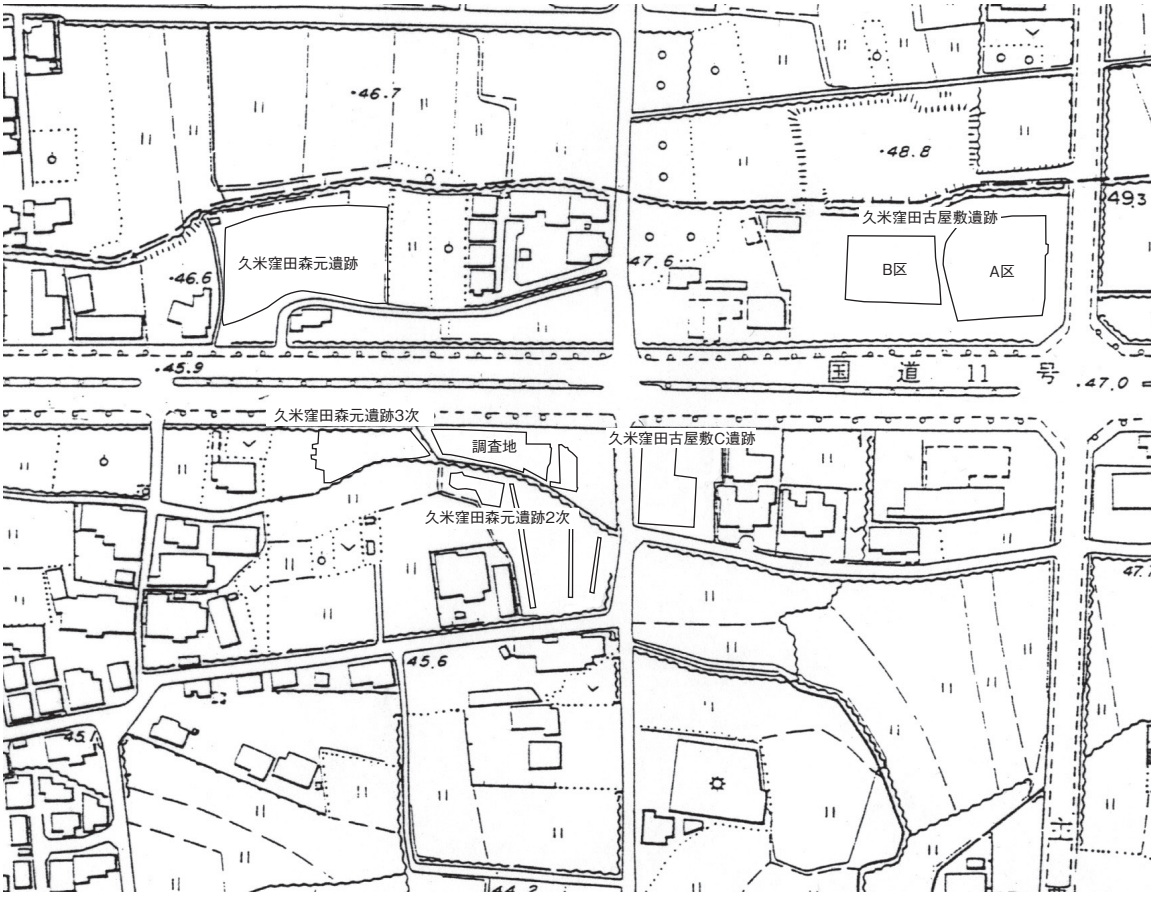


●久米窪田森元遺跡４次調査
①久米窪田Ⅰ遺跡
②久米窪田Ⅱ遺跡
③久米窪田Ⅲ遺跡
④久米窪田Ⅳ遺跡
⑤久米窪田Ⅴ遺跡
⑥久米窪田古屋敷遺跡Ａ区
⑦久米窪田古屋敷遺跡Ｂ区
⑧久米窪田古屋敷Ｃ遺跡
⑨久米窪田森元遺跡
⑩久米窪田森元遺跡２次調査
⑪久米窪田森元遺跡３次調査

第 48 図　　周辺調査地位置図

（２）調査の経緯（第 49 図）

調査地は約 70cm の造成土で覆土されていたため、排土置き場の確保等から、まず調査対象地の西半部より調査を開始した。重機により遺構検出面までを掘削、その後遺構検出作業を行い、掘立柱建物址、土坑、溝、柱穴を検出した。検出状況の写真撮影、順次遺構の掘り下げ、測量、完掘状況の写真撮影を行い、西半部の調査を終了する。平成 10 年３月３日より西半部を拡張する形で、既に調査が終了している西半部へ排土を移動し掘削を開始する。土器溜りと流路を検出し、順次掘り下げ、写真撮影、測量を行う。この拡張部分より西側を再度掘削し、柱穴 11 基を確認、掘り下げ、写真撮影、測量を行い、平成 10 年３月 31 日に屋外調査を終了する。



（S=1:2,500）

第 49 図　　調査地位置図

3区
SP117
SP110
土器溜り
2区
SR5
SR5
1区
SK6
SK11
SK8
SK7
SK9
SK4
倒木4
SK10
掘立1
掘立2
SD3
SD4
SR1
倒木2
SK1
SK5
倒木3
倒木1
SR4
SR3
SR2
SD1
SR3
SR3
A
A´
B
B´
Y=−63430
Y=−63440
Y=−63450
Y=−63460
Y=−63470
X=89510
X=89500
X=89490
0
5m
(S=1:200)

第50図　遺構配置図

第２節　層　位（第 51・52 図）

調査地は、耕作土上に造成土を被覆した造成地であった。地表面は標高 47 m前後を測る。基本層位は土色の違いにより５層に分層し、各層は土色・土質の違いにより細分した。

Ⅰ層：造成土である。調査区全域で層厚 60 ～ 80cm を測る。

Ⅱ層：灰色を基本とした農耕に伴う客土で、僅かな色の違いにより３層に分層した。

Ⅱ①層：灰色土（耕作土）。調査区全域で層厚 10 ～ 25cm を測る。

Ⅱ②層：灰白色土（耕作土）。ほぼ調査区全域で確認されるが調査地中央の一部では欠除する。層厚５～ 10cm を測る。

Ⅱ③層：灰橙色土（耕作土）。床土で調査区全域にて確認される。層厚５～ 10cm を測る。

Ⅲ層：明灰褐色土（やや細砂質）。調査地中央部より南西方向へ堆積し、層厚５～ 20cm を測る。本層中からは、須恵器片、土師器片の小片が少量出土している。

Ⅳ層：褐色土を基本とした包含層で僅かな土色の違いにより４層に分層した。

Ⅳ①層：明褐色土（やや粘性）。調査地１区北西隅及び１区中央北側の一部で欠除するが、ほぼ全域に堆積する。層厚６～ 40cm を測る。本層中からは、須恵器片、土師器片、陶磁器片等が少量出土した。また、本層中では２区に於いて土器溜りを検出した。

Ⅳ②層：茶褐色粘性土（やや灰色おびる）。１区中央部から２区南西部に堆積する。層厚６～ 20cm を測る。本層中からは、須恵器片、土師器片、布目瓦片等の破片が出土した。

Ⅳ③層：暗灰褐色土（やや粘性）。１区中央から３区に堆積する。層厚６～ 20cm を測る。２区ＳＲ５の部分の堆積が厚い。本層中からは、須恵器片、土師器片陶磁器片等が少量出土した。

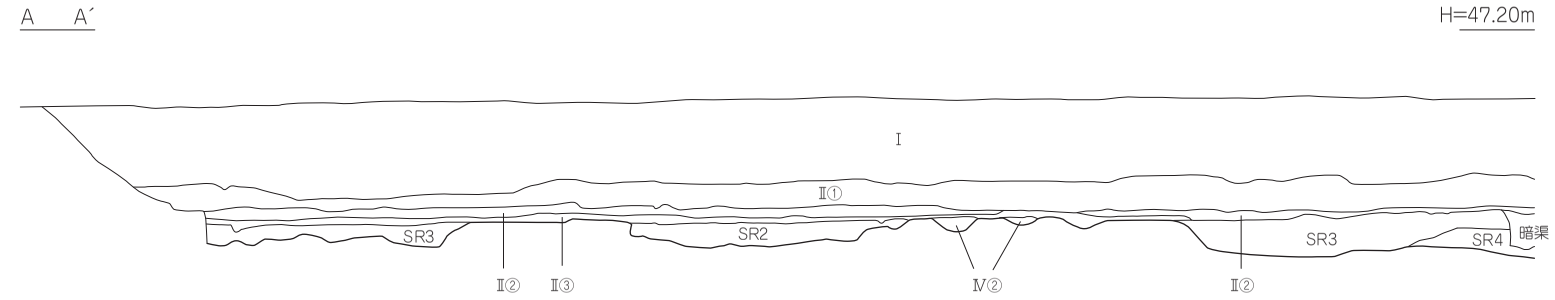
Ⅳ④層：Ⅳ③層＋白色シルト。１区と２区の境界Ｂ－Ｂ′の土層壁にてみられ、この部分のみ堆積する。遺物の出土はない。

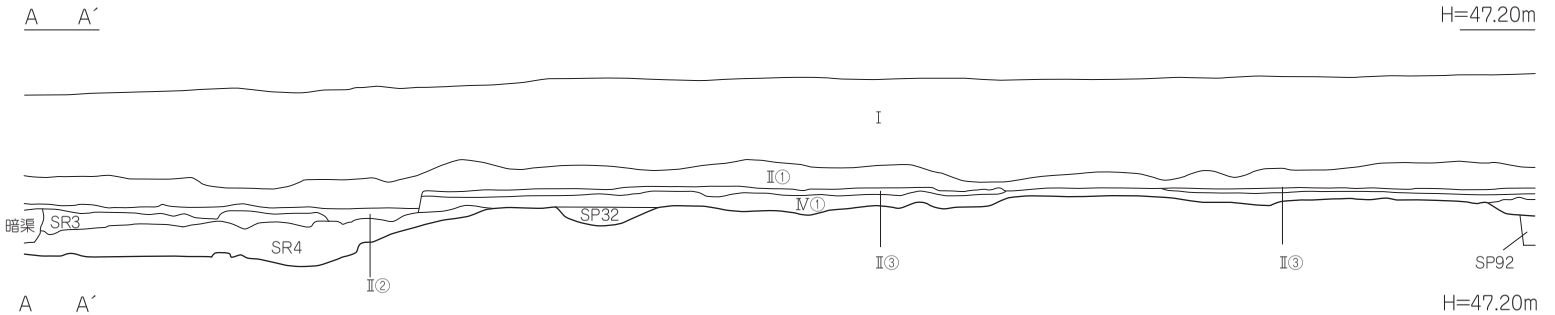
Ⅴ層：地山である。土色、土質の違いにより 11 層に分層した。なお、Ⅴ層上面が最終遺構検出面である。

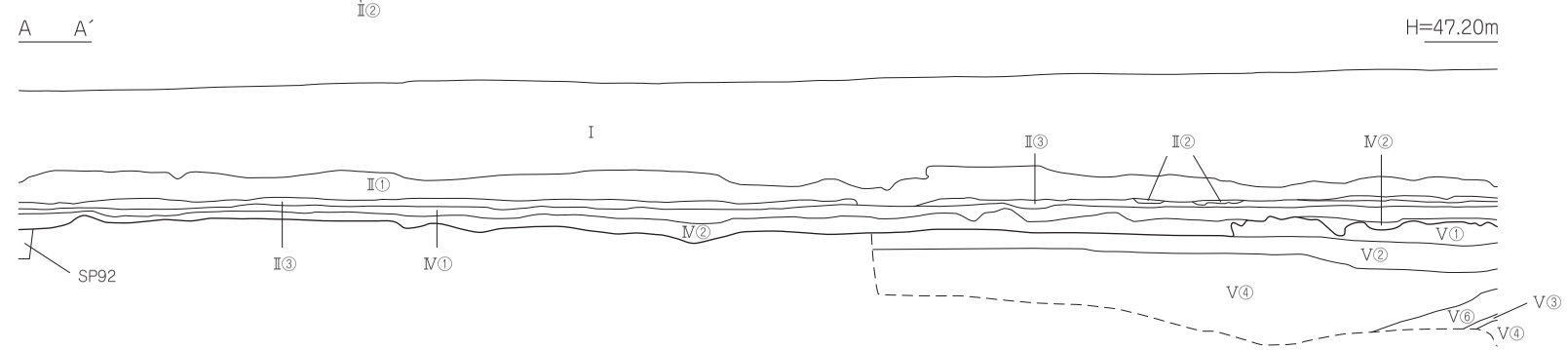
Ⅴ①層：明黄白色シルト
Ⅴ②層：白色シルト（やや粘性）
Ⅴ③層：乳白色シルト
Ⅴ④層：明灰色砂（細砂よりやや大きい）
Ⅴ⑤層：白色粘性土（オレンジかかる）
Ⅴ⑥層：明灰色シルト（やや粘性）
Ⅴ⑦層：白色砂礫（シルト質で小角礫）
Ⅴ⑧層：橙色砂礫（円礫で 10 ～ 20cm 大）
Ⅴ⑨層：灰白色シルト
Ⅴ⑩層：明青灰色砂礫（粗砂、小角礫）
Ⅴ⑪層：灰色砂礫（細砂、円礫で 10 ～ 20cm 大）

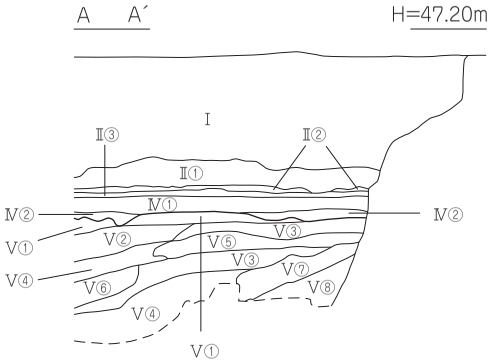
検出状況や出土遺物からⅣ層は中世、Ⅲ層は中世以降に堆積したものと考えられる。

遺構は掘立柱建物址２棟、土坑９基、溝３条、自然流路５条、柱穴 72 基、土器溜り１基を検出した。遺物は遺構や包含層掘削時に出土したもので、弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器、瓦、土製品、石製品、有機質遺物（木製品片、柱材、自然木、種子）などがある。





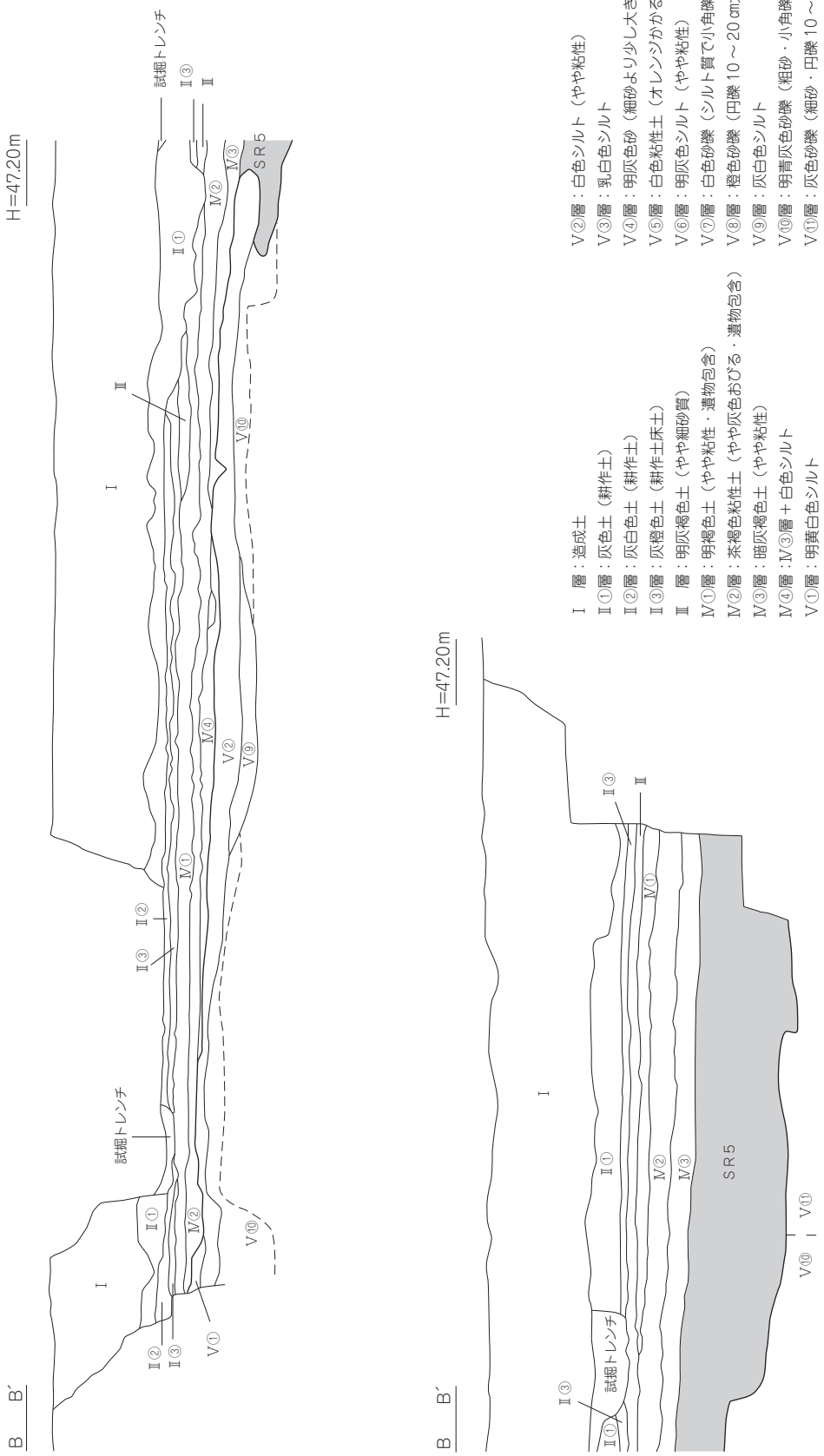




Ⅰ　層：造成土
Ⅱ①層：灰色土（耕作土）
Ⅱ②層：灰白色土（耕作土）
Ⅱ③層：灰橙色土（耕作土床土）
Ⅲ　層：明灰褐色土（やや細砂質）
Ⅳ①層：明褐色土（やや粘性・遺物包含）
Ⅳ②層：茶褐色粘性土（やや灰色おびる・遺物包含）
Ⅳ③層：暗灰褐色土（やや粘性）
Ⅳ④層：Ⅳ③層＋白色シルト
Ⅴ①層：明黄白色シルト
Ⅴ②層：白色シルト（やや粘性）
Ⅴ③層：乳白色シルト
Ⅴ④層：明灰色砂（細砂より少し大きい）
Ⅴ⑤層：白色粘性土（オレンジかかる）
Ⅴ⑥層：明灰色シルト（やや粘性）
Ⅴ⑦層：白色砂礫（シルト質で小角礫）
Ⅴ⑧層：橙色砂礫（円礫 10 ～ 20 ㎝大）
Ⅴ⑨層：灰白色シルト
Ⅴ⑩層：明青灰色砂礫（粗砂・小角礫）
Ⅴ⑪層：灰色砂礫（細砂・円礫 10 ～ 20 ㎝大）

0　1m
(S=1:50)

第 51 図　　1 区北壁土層図



第 52 図　１区東壁土層図

第３節　遺構と遺物

（１）弥生時代

検出した遺構は、自然流路１条である。

自然流路（ＳＲ）

ＳＲ５（第 53・54 図、図版 17・21）

ＳＲ５は調査地１区東端から２区、３区南端中央部に位置し、南側は調査区外に続く。西側河岸は確認できたが、東側河岸は未確認である。検出長南北 9.8 m、東西 19 m、最深部は 0.95 mを測る。埋土は 16 層に細分できる。埋土の堆積状況から、流路西側は澪筋、この部分より２区及び３区南端部分はトロ場であった流れと考えられる。出土遺物は弥生土器、木製遺物がある。弥生土器は⑬、⑮層から、木製遺物は⑦層からの出土が目立つ。

出土遺物（１～12）

１～８は弥生土器である。１～６は甕形土器で、１～３は口縁部片。ともに「く」の字状を呈するが１は逆「Ｌ」字状に近い。２は頸部に刻目突帯が巡る。口縁端部は面を持つ。３の口縁端部は下方へ拡張され２条の凹線文、頸部には刻目文が巡る。４～６は底部片。４・６はくびれを持つ上げ底で、４の外面はミガキ調整される。５はくびれを持たないやや上げ底である。７は壺形土器で胴部から肩部にかけて直線的に整形されている。ほぼ完形。８は高坏形土器の脚部片で柱部には５条の沈線が巡る。９～ 12 は木製遺物である。９は焼焦げてはいるがほぼ完形に近く楔形を呈し建築部材と考えられる。10 は破片ではあるが、１面は凹ませていて、もう片面は凹ませのラインと平行に削り出している。匙形製品の破片と考える。11・12 は芯持ち材で作られた杭で、11 の先端は削られ尖る。12 の先端は２方向から削り尖らせてはいるが扁平である。その他、薪が５点出土している。

時期：出土した弥生土器の形態より、ＳＲ５の埋没時期は弥生時代中期の後葉とする。

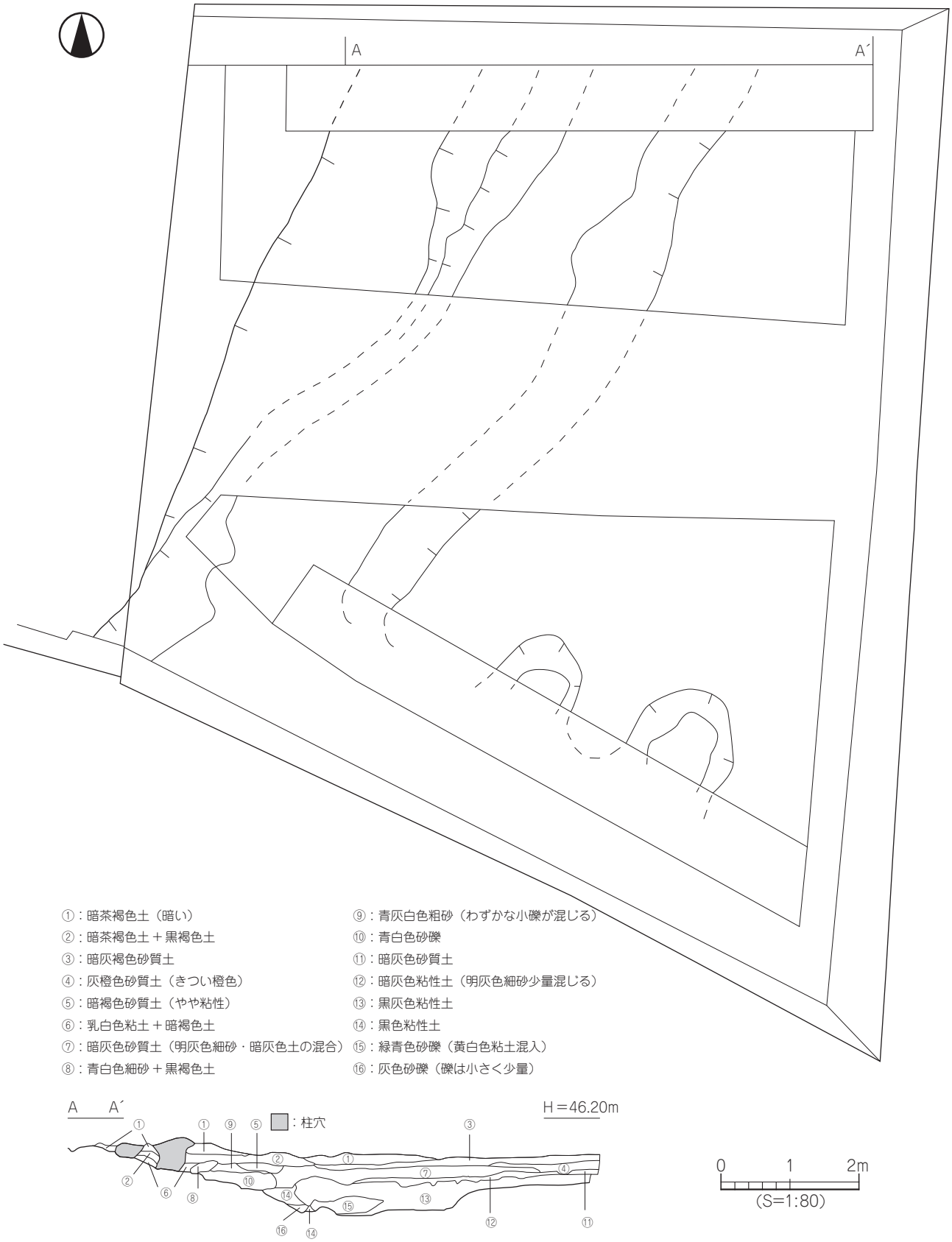
（２）古代

検出した遺構は掘立柱建物２棟、土坑９基、溝３条、自然流路４条である。時期は出土遺物や埋土から古代（10 世紀後半代）とする。

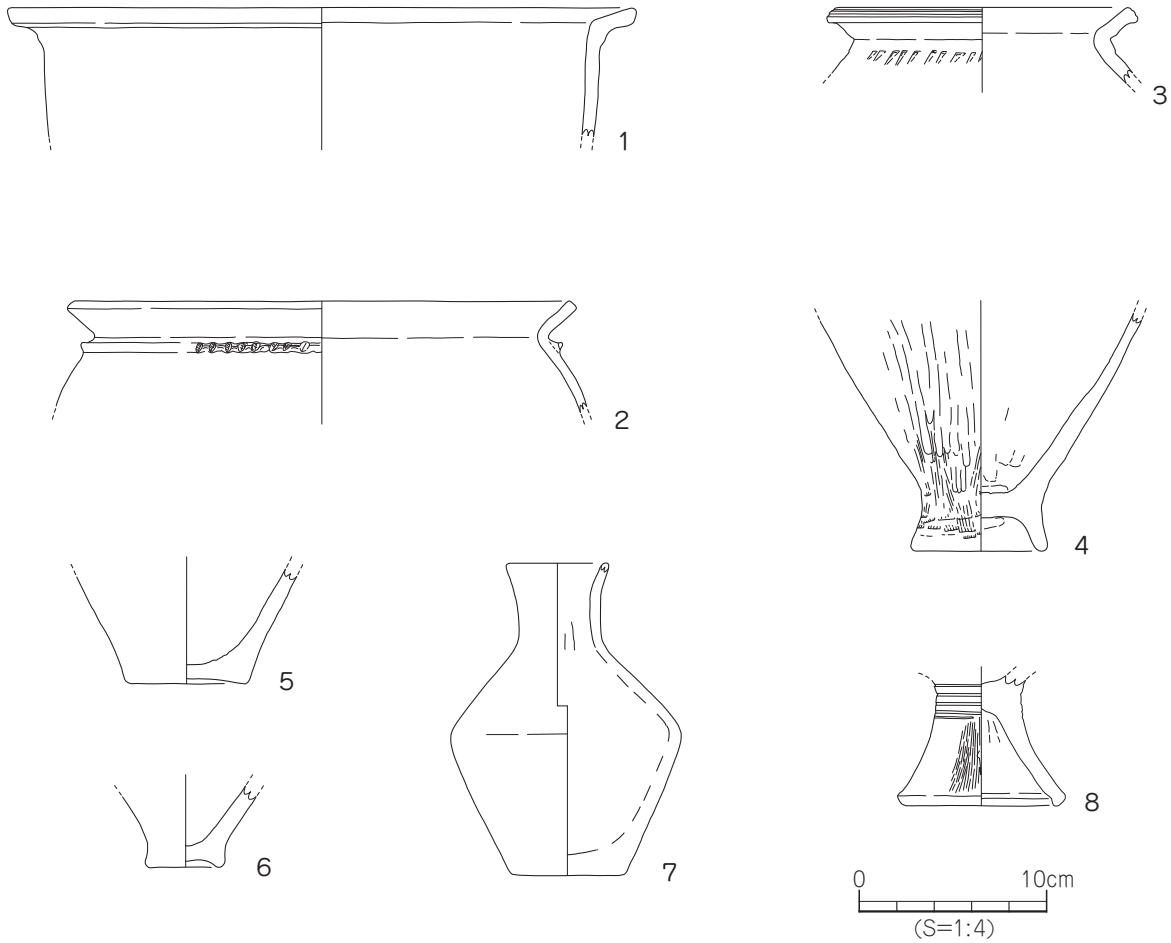
１）　掘立柱建物（掘立）

掘立１（第 55 図、図版 17）

掘立１は整理作業により復元できた建物址である。調査地１区中央に位置する。建物を構成する柱穴数基に切り合いがあり、建替え、改築があったと思われる。３間×２間の東西棟で、建物規模は軒先柱の柱穴も含めて、東西長 6.55 m、南北長４ｍを測る。建物を構成する柱穴の平面形態は円～楕円形で規模は径 30 ～ 64cm、深さ 25 ～ 50cm を測る。柱穴埋土は、茶褐色粘性土の単一層のもの、茶褐色粘性土と地山層である白色シルトの混合、黒色土と白色シルトの混合、この３種類の混合土のものがある。遺物は、須恵器片、土師器片の他、木製遺物の木の削り滓（チップ状）が８点、Ｐ 108 より残存径 20cm を測る柱根、種子の桃核がＰ 55 より 13 点、Ｐ 56 より 49 点、Ｐ 70 より４点出土した。


A
A´
①：暗茶褐色土（暗い）
②：暗茶褐色土＋黒褐色土
③：暗灰褐色砂質土
④：灰橙色砂質土（きつい橙色）
⑤：暗褐色砂質土（やや粘性）
⑥：乳白色粘土＋暗褐色土
⑦：暗灰色砂質土（明灰色細砂・暗灰色土の混合）
⑧：青白色細砂＋黒褐色土
⑨：青灰白色粗砂（わずかな小礫が混じる）
⑩：青白色砂礫
⑪：暗灰色砂質土
⑫：暗灰色粘性土（明灰色細砂少量混じる）
⑬：黒灰色粘性土
⑭：黒色粘性土
⑮：緑青色砂礫（黄白色粘土混入）
⑯：灰色砂礫（礫は小さく少量）
A　A´
H＝46.20m
：柱穴
0　1　2m
(S=1:80)

第 53 図　　ＳＲ５測量図



第 54 図　　ＳＲ５出土遺物実測図

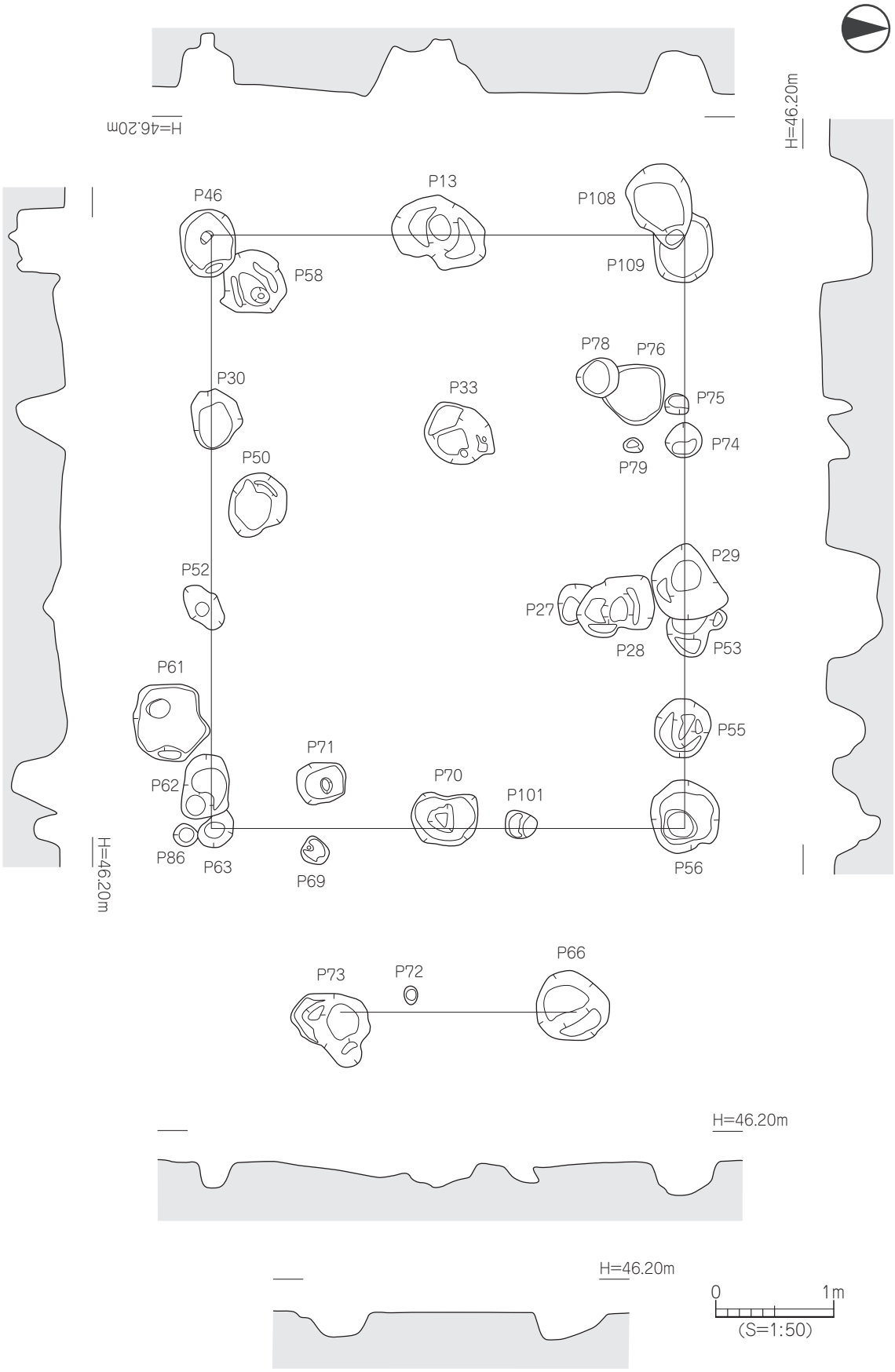
掘立２（第 56 図、図版 17）

掘立２も整理作業により復元できた建物址である。調査地１区中央の掘立１の南側に近接する。建物を構成する東側柱列中央の柱穴にのみ切り合いがある。Ｐ 18、Ｐ 43 は束柱と考えられるため、掘立１と同様３間×２間の東西棟で、建物規模は東西長 4.85 m、南北 3.75 mを測る。建物を構成する柱穴の平面形態は円～楕円形で規模は径 30 ～ 70cm、深さ 10 ～ 35cm を測る。柱穴埋土は、褐色土を主体として灰褐色土、暗灰褐色土、茶褐色土、茶褐色粘性土のものと、これらに地山層の白色シルトの混合土のものがある。遺物は須恵器片、土師器片が出土した。木製遺物、種子の出土はない。

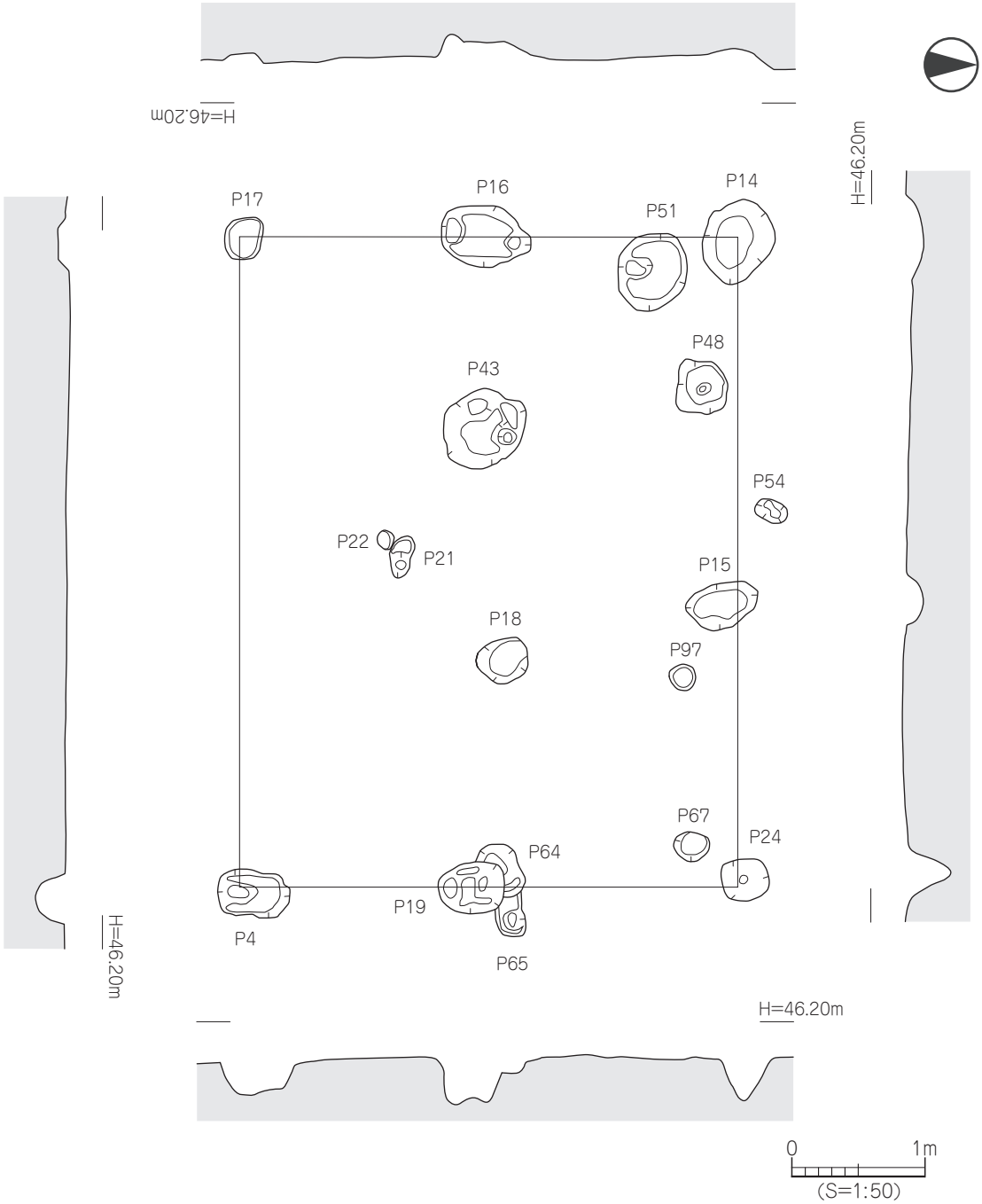
２）　土坑（ＳＫ）

ＳＫ１（第 50 図）

ＳＫ１は調査地１区中央やや西寄りに位置する。平面形態は楕円形で、規模は径 75 ～ 82cm、深さ 29cm を測る。断面形態は逆台形状である。埋土は６層に分層され、①層：明灰褐色細砂質土、②層：明灰褐色細砂質土（やや黒い）＋白色シルト、③層：①層＋白色シルト、④層：明灰褐色細砂質土（やや白い）＋白色シルト、⑤層：明灰褐色砂質土、⑥層：白色シルト＋明灰褐色土（少量）である。遺物は、須恵器、土師器の小片が少量出土した。


H=46.20m
H=46.20m
H=46.20m
H=46.20m
H=46.20m
P46
P13
P108
P58
P109
P78
P76
P30
P33
P75
P74
P50
P79
P29
P52
P27
P28
P53
P61
P55
P71
P62
P70
P101
P86
P63
P69
P56
P66
P73
P72
0
1m
(S=1:50)

第 55 図　　掘立１測量図


H=46.20m
P65
P4
P19
P64
P24
P67
P97
P18
P15
P21
P22
P54
P43
P48
P51
P16
P17
P14
H=46.20m
H=46.20m
H=46.20m
0
1m
(S=1:50)

第 56 図　　掘立２測量図

ＳＫ４（第 50 図）

ＳＫ４は調査地１区中央やや東寄りに位置する。平面形態は楕円形で、規模は径 65 ～ 71cm、深さ 40cm を測る。断面形態は「Ｕ」字状である。土坑其底面にて径 16cm、深さ８cm のピットを検出した。埋土は３層に分層され、①層：黒灰褐色土＋白色シルト、②層：黒色土（柔らかい）、③層：白色シルト＋黒色土（少量）＋小礫である。遺物は、須恵器の小片が少量出土した。

ＳＫ５（第 50 図）

ＳＫ５は調査地１区中央やや西寄りのＳＫ１の西隣に位置する。平面形は不整形で、規模は東西 75cm、南北 75cm、深さは北側中央部で 14cm を測る。断面形態は皿状である。埋土は茶褐色土の単一層である。遺物は、須恵器片、土師器片が少量出土した。

ＳＫ６（第 50 図）

ＳＫ６は調査地１区東端に位置し、ＳＫ 11 を切る。平面形態は楕円形で、規模は 56 ～ 95cm、深さ 25cm を測る。断面形態は逆台形状である。埋土は２層に分層され、①層：暗茶褐色土、②層：暗茶褐色土＋白色シルト＋明灰色細砂の混合土である。遺物は須恵器、土師器の小片の他、小木片、桃核が少量出土した。

ＳＫ７（第 50 図）

ＳＫ７は調査地１区東端に位置し、ＳＫ８を切る。平面形態は隅丸方形状で、規模は長さ 82cm、幅 75cm、深さ 23cm を測る。断面形態は逆台形状である。埋土は暗茶褐色土（砂と白色シルトが少量混じる）の単一層である。遺物は須恵器、土師器の小片の他、小木片、10cm 大の礫石が少量と桃核が１点出土した。

ＳＫ８（第 50 図、図版 18）

ＳＫ８は調査地１区東端に位置し、ＳＫ７に切られる。平面形態は不整形で、規模は径 65 ～ 85cm、深さ 30cm を測る。断面形態は東西方向では逆台形状、南北方向では皿状である。埋土は３層に分層され、①層：暗褐色土＋白色シルト（黒色土少量混じる）、②層：暗褐色土＋黒色土、③層：白色シルトのブロックである。遺物は須恵器、土師器の小片が少量出土した。

ＳＫ９（第 50 図、図版 18・22）

ＳＫ９は調査地１区東端南壁際に位置する。一部を先行トレンチにより欠除するが、平面形態は楕円形で、規模は長さ 220cm、幅 110cm、深さ 27cm を測る。断面形態は皿状である。埋土は２層に分層され、①層：黒灰色土（白色シルトブロック混入）、②層：明灰色細砂質土（①層が混入）である。遺物は弥生土器、土師器の小片、木製品片、木片、礫石が少量出土した。

出土遺物（13）

13 は木製品（下駄）の破片である。端部には直径 1.3cm の円孔が斜め方向に穿たれている。

ＳＫ 10（第 50 図）

ＳＫ 10 は調査地１区中央やや東寄りの南壁際に位置し、南側は調査区外に続く。平面形態は楕円形と考えられ、規模は東西 175cm、南北 87cm、深さ 43cm を測る。断面形態はレンズ状である。埋土は４層に分層され、①層：明灰褐色粘性土、②層：灰褐色粘性土、③層：明灰褐色細砂＋①層、④層：明灰褐色砂礫（礫は小角礫）である。遺物は須恵器、土師器、木片の小片が少量出土した。

ＳＫ 11（第 50 図）

ＳＫ 11 は調査地１区東端に位置し、ＳＫ６に切られる。平面形態は楕円形で、規模は径 55 ～ 60cm、深さ 30cm を測る。断面形態は逆台形状である。埋土は暗茶褐色土の単一層である。遺物は木片、小角礫が少量と桃核１点が出土した。

３） 溝（ＳＤ）

ＳＤ１（第 50 図）

ＳＤ１は調査地１区北西部に位置し、北はＳＲ２、南はＳＲ３によって消滅する。方向は北東から南西を指す。規模は検出長 2.8 m、幅 0.23 ～ 0.35 m、深さ 0.08 mを測る。断面形態はレンズ状である。埋土は２層に分層され、①層：明灰褐色細砂質土、②層：明灰色細砂（白色シルト混入）である。遺物は須恵器片、土師器片が少量出土した。

ＳＤ３（第 50 図、図版 18）

ＳＤ３は調査地１区中央に位置し、ＳＤ４を切る。わずかに南東方向に湾曲する南北方向の溝である。北側と南側は調査区外に続く。規模は検出長 11 m、幅 0.15 ～ 0.4 m、深さは最深部で 0.35 mを測る。断面形態は「Ｕ」字状である。埋土は２層に分層され、①層：白色シルトブロック状と黒褐色土の混合、②層：白色シルトブロック状と黒色土の混合である。遺物は須恵器、土師器の小片が少量と桃核１点が出土した。

ＳＤ４（第 50 図、図版 18）

ＳＤ４は調査地１区中央に位置するほぼ南北方向の溝である。ＳＤ３に切られ、南側はＳＲ１によって消滅する。北側は調査区外に続く。規模は検出長 10.1 m、幅 0.2 ～ 0.63 m、深さは最深部で 0.5 m を測る。埋土は５層に分層され、①層：黒褐色土＋白色シルトブロック状（大）、②層：白色シルトブロック状、③層：明灰色細砂（黒色土少量混入）、④層：黒褐色土、明灰色細砂、白色粘土の混合、⑤層：黄白色粘土（ブロック状）である。遺物は須恵器片、土師器片の他、木片、桃核が１点ずつ出土した。須恵器片、土師器片の出土量はＳＤ３より多い。

４） 自然流路（ＳＲ）

ＳＲ１（第 50 図）

ＳＲ１は調査地１区中央南壁際に位置し、検出部分は東西方向の流路である。ＳＤ４、ＳＲ３を切り、南側は調査区外へ続く。検出東西長 5.98 m、南北長 0.8 m、深さ 0.45 mを測る。埋土は２層に分層され、①層：明灰色砂質土、②層：①層に明灰粘土少量混入である。遺物は須恵器片、木片、10cm 大の円礫石が少量と、30cm 大の礫石が１点出土した。

ＳＲ２（第 50 図）

ＳＲ２は調査地１区北西部に位置する東西方向の流路である。ＳＲ３に切られ、ＳＤ１を切り、東側は調査区外へ続く。検出長 3.35 m、幅 0.8 m、深さ 0.11 mを測る。埋土は暗灰色細砂の単一層である。遺物の出土は無い。

ＳＲ３（第 50 図、図版 22）

ＳＲ３は調査地１区西部に位置し、西側は南北方向、南側は東西方向の流路である。ＳＤ１、ＳＲ２・４を切り、ＳＲ１に切られ、西側及び南側は調査区外に続く。検出長 16m、幅 7.5m、深さ 0.39m を測る。埋土は４層に分層され、①層：明灰色細砂質土（微粘性、やや黒っぽい）、②層：暗灰褐色土（細砂混じり）、③層：灰色細砂質土、④層：灰色砂礫（礫は小）である。遺物は須恵器片、土師器片、瓦片、石製品、有機質遺物の木製遺物、種子（桃核７点）が 10 ～ 20cm 大の礫石と混在した状態で出土したが、西壁側の南北方向部分からの出土が目立った。

出土遺物（14 ～ 17）

14 ～ 17 は木製遺物である。14 は薄板で、長さ 13cm、幅 1.5cm、厚さ 0.2cm を測る。柾目木取り。15 ～ 17 は丸棒状で、先端は一方向から斜めに削り杭状としている。15 は残存長 13.7cm、径 1.3cm。16 は残存長 79cm、径 1.8cm。17 は残存長 29.5cm、径 2.5cm を測る。ともに芯持ち材。これらの他に焼け焦げが残る自然木片や割り材片６点が出土しており、薪の残骸と考える。

ＳＲ４（第 57 ～ 60 図、図版 19・22 ～ 25）

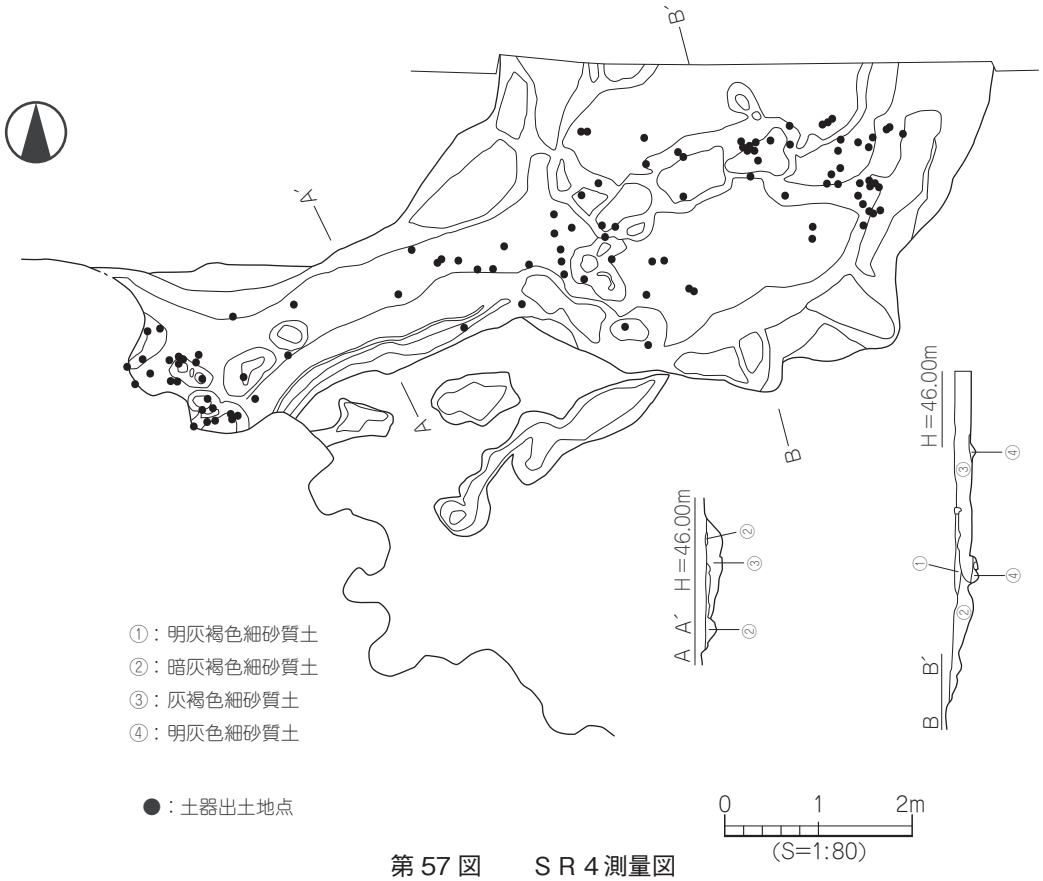
ＳＲ４は調査地１区西端部に位置し、若干南に偏る東西方向の流路である。西側と北側の一部はＳＲ３に切られるが、北側は調査区外へと続く。検出長 9.6 m、幅５m、深さは最深部で 0.32 mを測る。埋土は４層に分層でき、①層：明灰褐色細砂質土、②層：暗灰褐色細砂質土、③層：灰褐色細砂質土、④層：明灰色細砂である。遺物は土師器、須恵器、施釉陶器、土製品、有機質遺物の木片、種子が 10 ～ 30cm 大の礫石と混在した状態で流路全域から出土した。

出土遺物（18 ～ 64）

土師器（18 ～ 36）　椀（18 ～ 25）　ヘラ切り離しによる突出した円盤高台の底部片である。19 は底部と立ち上がりの境は明瞭で、形態は須恵器椀に似る。内底面は回転ナデ調整されていて、約半分には煤が付着している。23 ～ 25 は底部と立ち上がりの境の稜は回転ナデ調整により明瞭ではない。23・24 は高台は厚く作られ、内底面はナデ窪ませている。

坏（26 ～ 30）　ヘラ切り離しによる底部の坏である。26 ～ 28 の口縁端部は丸くおさめていて、26・28 はやや外反している。内外面ともていねいではないが回転ナデ調整されている。口径 10.6 ～ 11.0cm、器高 3.3 ～ 3.9cm、底部径６～ 7.3cm 台におさまる。27・29 はわずかに突出する底部である。

器種不明（31 ～ 33）　31 は高台から底部にかけての破片で、高台は貼り付けである。底内面は回転ナデ調整。下方へ外傾する高台は端部を丸くおさめる。内外面とも回転ナデ調整。高台の法量は下端径 9.6cm、高さ 2.7cm を測る。32 は高台部片でやや外反する高台は端部を外方へ尖り気味におさめる。内外面とも回転ナデ調整。法量は下端径 8.4cm、高さ２cm を測る。33 は貼り付け高台の欠失した底部片。外面、底部外面には多段ナデの痕跡が残っている。法量は底部径 10cm、残高 3.6cm を測る。31 ～ 33 は皿の可能性が考えられる。



第 57 図　　ＳＲ４測量図

壺（34・35）　口縁部片である。外面頸部から口縁、内面にかけてはナデ調整。外面頸部より下方はヘラ削りされ調整されている。34 の法量は復元口径 7.9cm、残高 3.2cm、35 の法量は復元径 6.9cm、残高 2.8cm、を測る。ともに釉薬の痕跡は見られない。

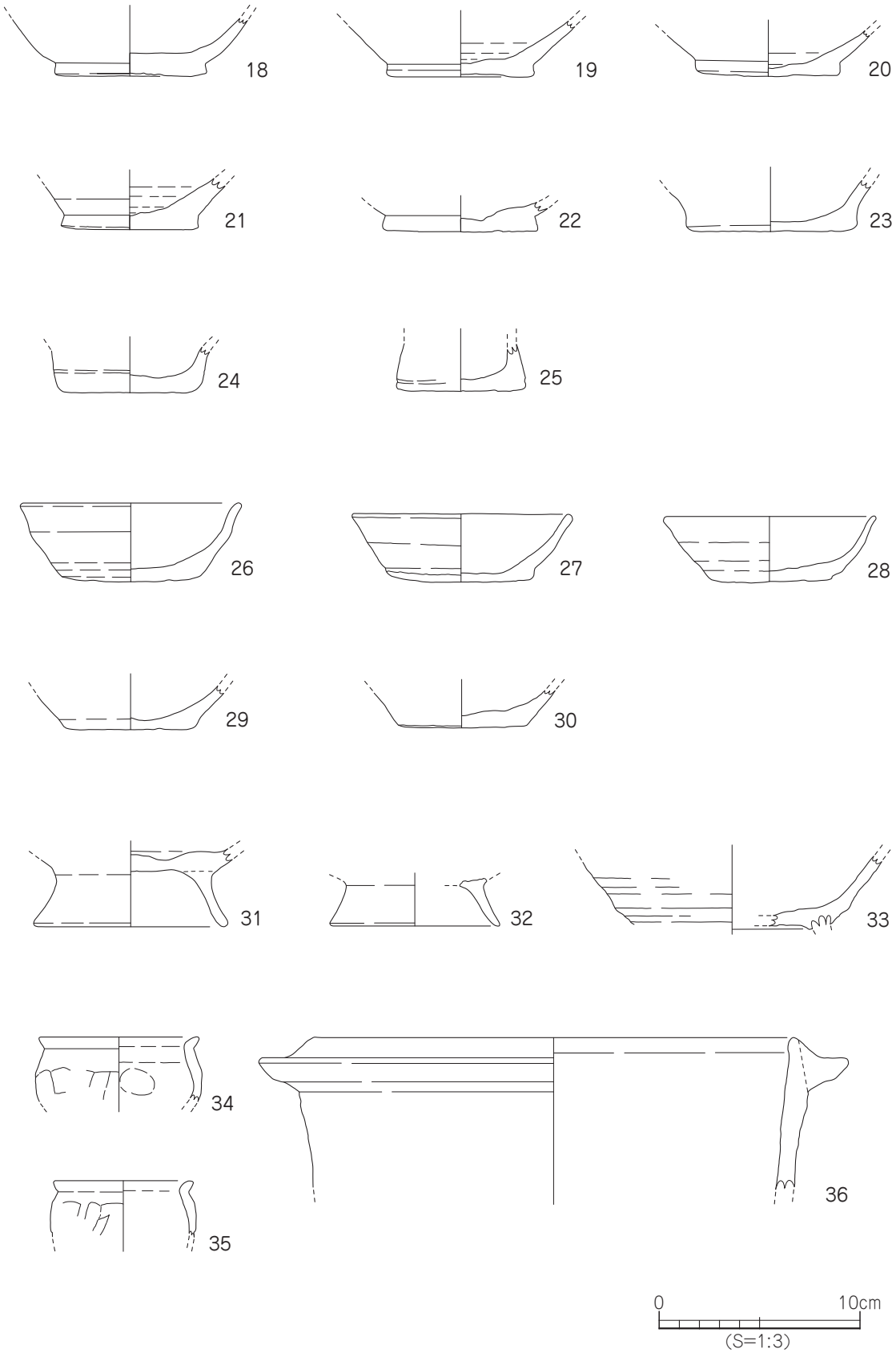
羽釜（36）　口縁直下に断面三角形状の鍔が貼り付けられている。鍔の上面はナデ窪み、端部は上外方へ尖り気味におさめている。

須恵器(37 ～ 47)　埦(37 ～ 42)　すべてヘラ切り離しの突出した円盤高台を持つ形態のものである。内外面とも回転ナデ調整されていて、底内面はすべて撫で窪む。法量は口径 13.6 ～ 15.4cm、器高 4.6 ～ 6.0cm、高台径 6.2 ～ 7.7cm を測る。

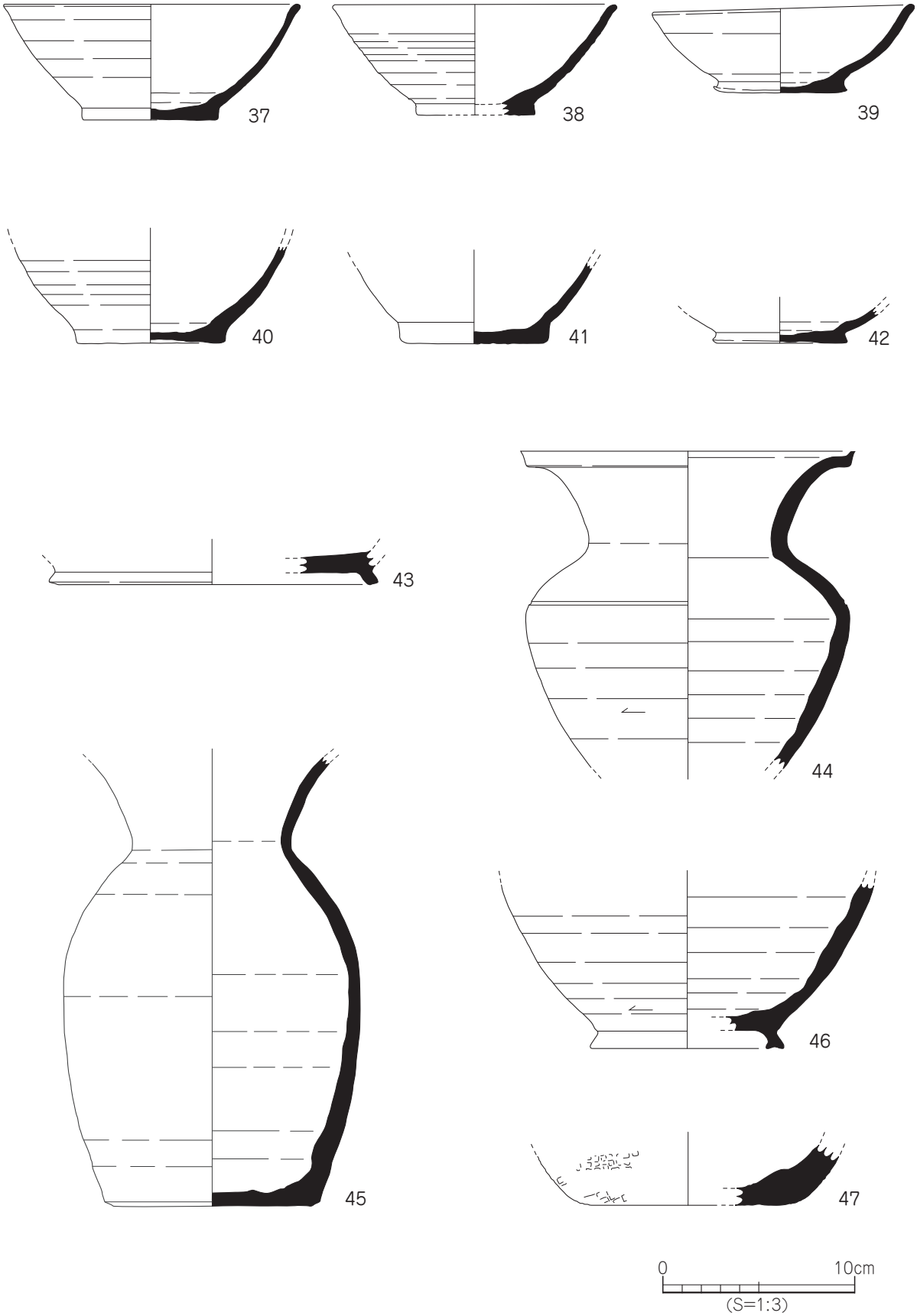
坏（43）　輪高台の坏の破片である。「ハ」の字状に付く輪高台端部は接地面は内端側である。

壺（44 ～ 47）　44 は肩部に一条の沈線が巡る。外反しながら立ち上がる口縁部は、口縁内面をナデ窪め、上外方へ拡張し外端面を作る。胴部下半部は回転ヘラ削り調整が残るが他は回転ナデ調整される。法量は口縁径 17.4cm、残高 16.4cm を測る。45 は平底の長胴で、内外面とも回転ナデ調整されている。法量は底部径 11.2cm、残高 23.3cm を測る。46 は輪高台の底部片である。高台下端面はナデ窪み、内外方へやや拡張する。高台よりやや内湾しながら立ち上がる胴下半分はヘラ削り調整が残るが、他は回転ナデ調整される。法量は高台径 10.0cm、残高 8.6cm を測る。47 は底部片である。底部と胴部の境は不明瞭である。器壁は厚い。底部も含め外面には叩きの調整痕が残る。法量は復元底径 11.8cm、残高 3.2cm を測る。

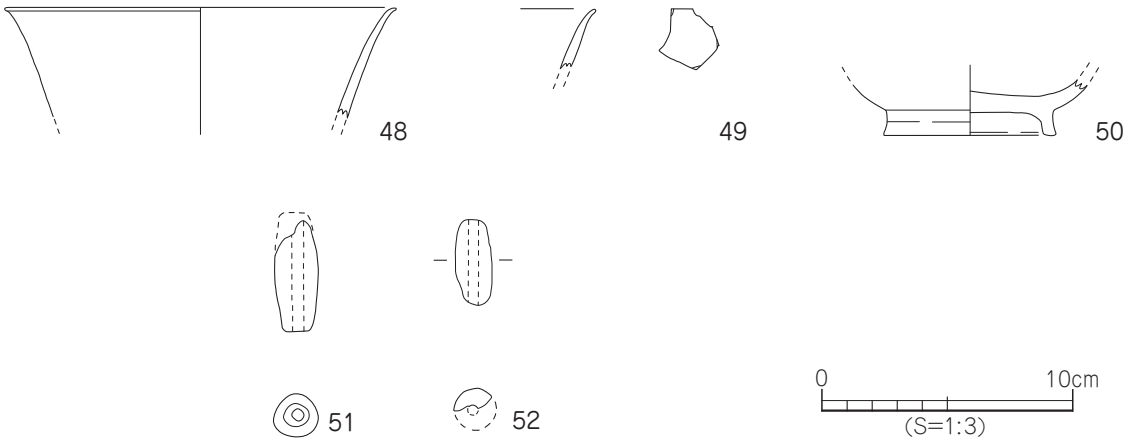
施釉陶器（48 ～ 50）　48 は口縁部片。外傾して立ち上がる口縁で端部は外反し尖る。埦と思われる。内外面とも灰色の釉がかかり、焼成は良好で須恵質である。49 も口縁部の小片と思われる。形態・



第 58 図　　ＳＲ４出土遺物実測図（1）



第 59 図　　ＳＲ４出土遺物実測図（2）



第 60 図　　ＳＲ４出土遺物実測図（3）

器種は 48 と同じと考える。内外面ともやや薄い緑色の釉がかかり、焼成は良好で須恵質である。50 は埦の底部片。内外面とも回転ナデ調整後、褐色味をおびた緑色の釉が、高台下端面までかかる。高台径 6.8cm、高台高 1.0cm、残高 2.2cm を測る。焼成は良好で胎土は褐灰色を呈し緻密である。内底面に重焼の目跡が残る。長門・周防産。

土製品（51･52）　51･52 は土錘である。51 はやや長めの樽型を呈する。法量は残存長 4.4cm、径 1.8cm、孔径 0.4cm、残存重量 11.3 g を測る。52 は破片である。残存長 3.4cm、復元径 1.5cm、復元孔径 0.4cm、残存重量 3.6 g を計る。51・52 とも漁労用の網の錘と考える。

木製遺物（53 ～ 64）

曲物（53 ～ 60）　53 ～ 55 は曲物の側板の破片である。柾目木取りの厚さ２～３mm の板を使用している。内面にケビキの痕跡、樺皮結合されている部分が残っている。56 ～ 60 は曲物の底板である。端部に弧を描く加工面が残っている。この加工面には側板に固定するための釘穴が穿たれている。残存長 35.4cm を測る材が見られる。

棒状品（61）　61 は柾目木取りの棒状品と思われるが、厚さは曲物の底板に近い。

板状品（62）　62 は板状片と思われる。法量は残存長 10cm、残存幅 4cm、厚さ 0.9cm を測る。最終には薪として使用されている。

加工痕の残る破片（63）　63 は木口面に鋸の加工痕が残る破片である。

杭状品（64）　64 は自然木の板を落として棒状にしている。先端はないが杭と考えられる。

この他、ＳＲ４からは桃核が 189 点出土した。核の先端は細長く尖り、断面は扁平である。法量は長さ 3.5cm、幅 2.5cm、厚さ 1.5cm を測る。核の形状、法量から栽培モモと思われる。

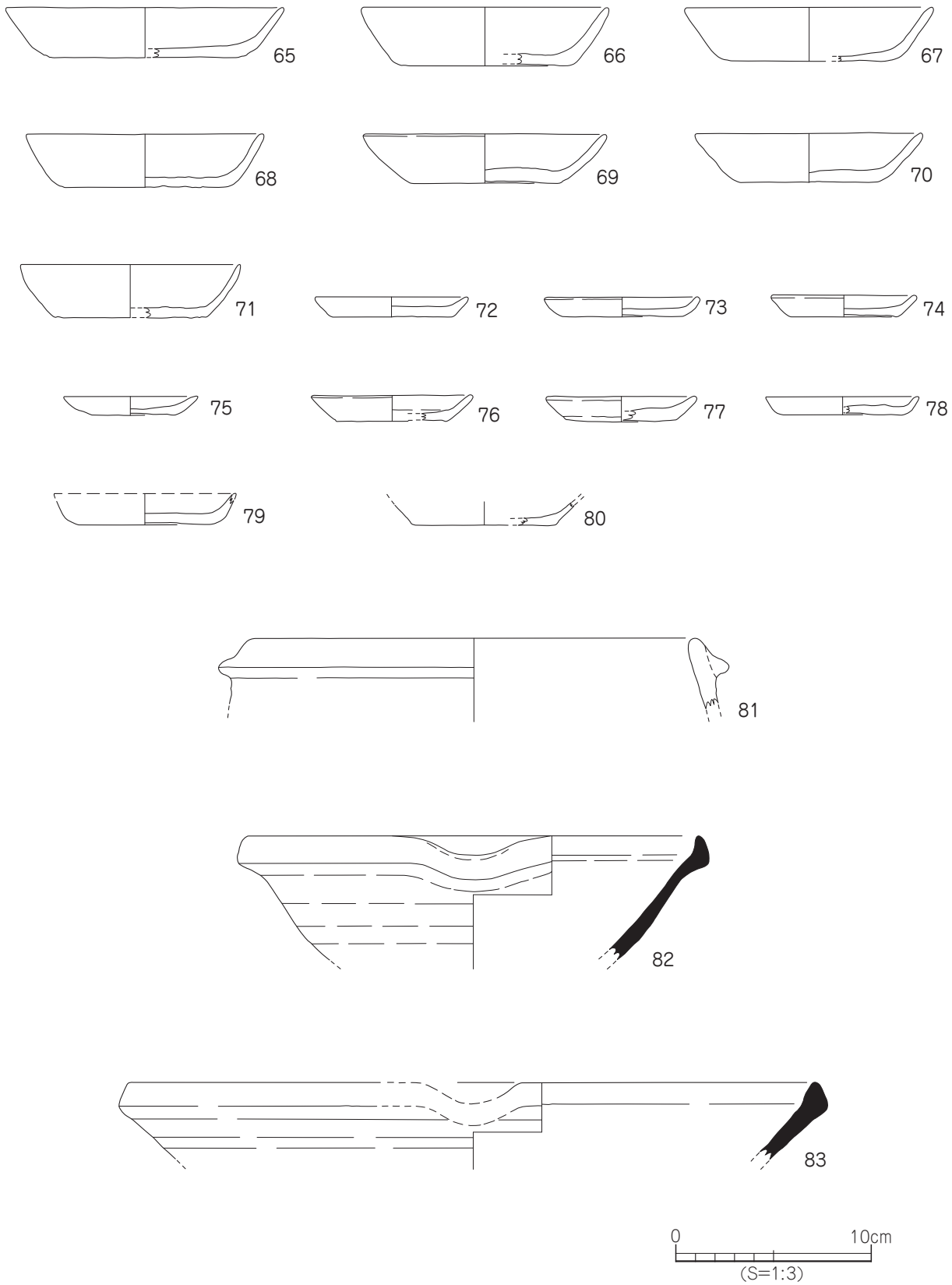
（３）中世

検出した遺構は、土器溜り一基である。

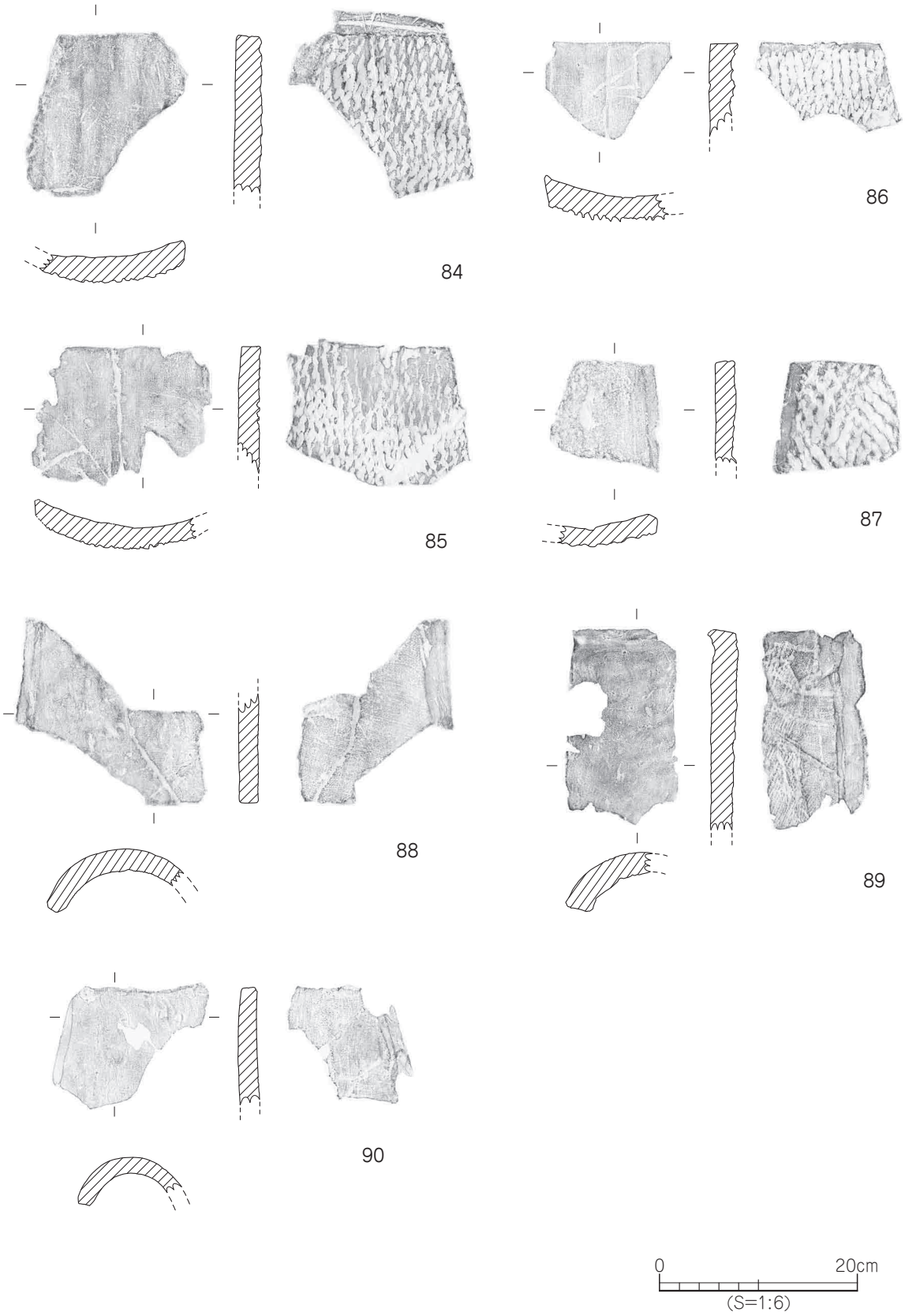
土器溜り（第 61 ～ 63 図、図版 20・25・26）

土器溜りは調査地２区に位置し、東側は未調査部分へ続く。明確な掘り方は未検出であったが、遺物を取り上げた床面は凸凹がみられた。検出長南北 4.5 m、東西 3.6 m、深さ 0.08 mを測る。埋土は灰茶褐色土（炭化物混じり）である。遺物は土師器、須恵器、瓦の破片、小木片が、10 ～ 15cm 大

第 61 図　　土器溜り測量図



第 62 図　　土器溜り出土遺物実測図（1）



第 63 図　　土器溜り出土遺物実測図（2）

の円礫石と混在して出土した。土師器の出土量が一番多く、中にはその場で押し潰された状態で出土したものもあった。接合作業の結果、完形には至らなかった。

出土遺物（65 ～ 90）

土師器（65 ～ 81）

坏（65 ～ 71） 摩滅を受けていて判別できないものもあるが、回転糸切りによる切り離しの坏である。外傾して立ち上がる口縁端部は丸くおさめるが、71 のみやや尖る。法量は口径 11.2 ～ 14.1cm、底径 7.1 ～ 9.8cm、器高 2.5 ～ 3.0cm におさまる。胎土は密である。焼成はあまい。69・71 の外底面には板状圧痕がある。

皿（72 ～ 80） 摩滅を受けていて判別できないものもあるが、回転糸切りによる切り離しの皿である。外傾して立ち上がる口縁端部は丸くおさめる。法量は口径 6.8 ～ 8.2cm、底径 4.2 ～ 7.5cm、器高 0.9 ～ 1.6cm を測る。胎土は密である。焼成はあまい。図化していないが、外底面には板状圧痕が見られる底部片が出土している。

鍋（81） 内傾して立ち上がる口縁は外面直下に断面三角形の鍔を貼り付けている。この他に、図化していないが、足（脚）片も出土している。

須恵器（82・83）

鉢（82・83） 82・83 は東播系のこね鉢である。体部は外傾して立ち上がり、口縁端部は肥厚させ上方に尖る。端部外面は自然釉がかかる。焼成は 82 はややあまく灰色、83 は良好で青灰色を呈する。

瓦（84 ～ 90）

平瓦（84 ～ 87） 凸面側は太縄の叩き目の平瓦片である。焼成はあまいものが多い。隅を短辺に対して約 75 度に切り落としていることから、隅切瓦の破片と考えられる。図化していないが、斜格子の叩き目の平瓦片も出土している。

丸瓦（88 ～ 90） 88 ～ 90 は丸瓦片である。90 の凸面側は丁寧にナデ調整されていて、焼成も良好で須恵質を呈する。88・89 の焼成はあまい。

時期：出土した土師器、須恵器の形態より、土器溜りの埋没時期は 13 世紀代とする。

（４）その他の遺構と遺物

１） 古代の柱穴（ＳＰ）（第 50 図、図版 13・14）

古代の柱穴は 61 基を確認した。調査地１区中央から１区東端に位置し、掘立柱建物址の周囲に集中している。柱穴の平面形態は円～楕円形で、規模は径 10 ～ 66cm、深さ７～ 32cm を測り、掘立柱建物址を構成する柱穴の規模よりひとまわり小型の物である。埋土は褐色土が主体となる。遺物は、須恵器、土師器、木片、種子があるが、少量の出土である。

２） 中世の柱穴（ＳＰ）（第 50・64 図、図版 16・26）

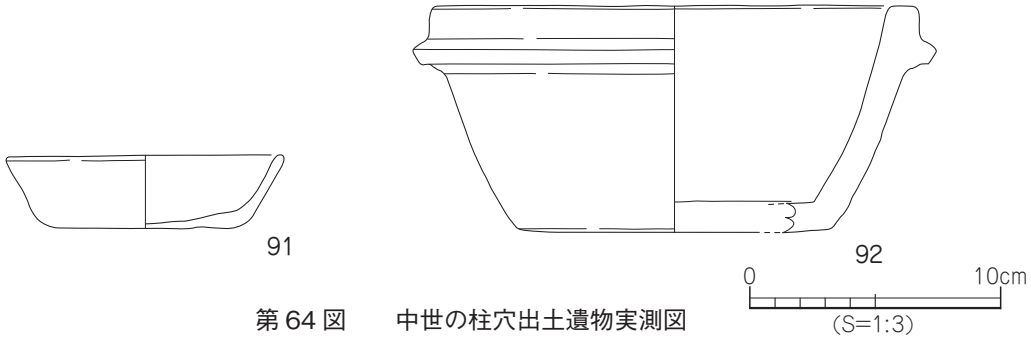
中世の柱穴は 11 基を確認した。中世の柱穴は３区に集中して検出された。平面形は円形～楕円形を呈し、規模は径 12 ～ 40cm、深さ 10 ～ 51cm を測る。埋土は明灰褐色粘性土である。遺物は土師器、石鍋、柱材がある。

出土遺物（91・92）

土師器坏（91） 調査地３区ＳＰ 111 より出土した。回転糸切りによる切り離しである。底部と立ち上がりの境は明瞭ではない。口縁端部は丸くおさめる。口径 11cm、器高 2.9cm を測る。外部底面

には柾目状圧痕がある。

石鍋(92)　調査地３区ＳＰ110より出土した。復元口径19.4cm、器高9cmを測る滑石製の鍋である。口縁端部より2cm下がった位置に断面台形状の鍔を削り出している。外面には煤が付着している。



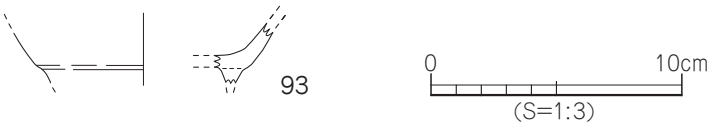
第64図　　中世の柱穴出土遺物実測図

３）　倒木痕（倒木）（第50図）

倒木痕は１区で検出した。平面形は楕円形で、規模は径0.7～3.5mを測る。倒れた方向は倒木１、４は北西方向、倒木２、３は北方向である。時期は遺構の切り合いから古代以前である。

４）　Ⅳ②層出土遺物（第51・52・65図、図版26）

緑釉陶器（93）　輪高台の坏の破片で摩滅を受けている。胎土は密であるが、焼成はあまく土師質である。内面と高台内面の一部に薄い緑色の釉が残っている。



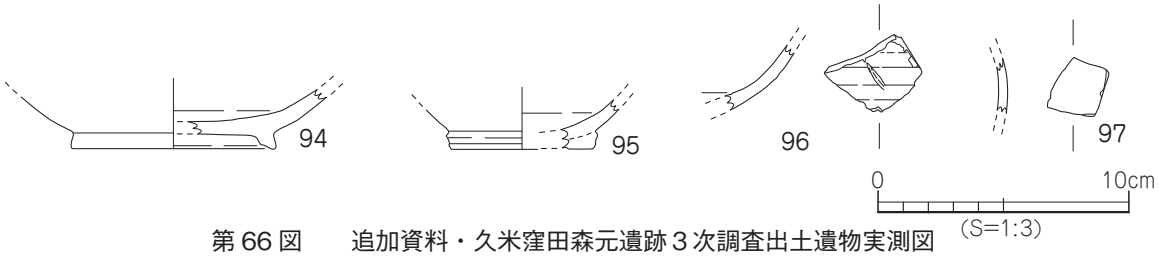
第65図　　Ⅳ②層出土遺物実測図

５）　追加資料（第66図、図版26）

久米窪田森元遺跡３次調査地より出土したものである。本報告書にて追加資料として掲載する。

埦（94～96）　94は近現代の暗渠排水路より出土したものである。やや「ハ」の字状に付く輪高台は端部内面が回転ナデ調整により外側へ尖り気味におさめる。内外面とも緑色の釉がかかるが、高台内面と底外面は薄い緑色に仕上げられている。復元底径8.1cm、残高2.4cmを測る。焼成は良好で須恵質である。近江産。95は表採資料である。貼り付けによる円盤高台のものである。内外面とも光沢のあるオリーブ灰色の釉がかかる。復元底径5.8cm、残高2cmを測る。焼成は良好で須恵質である。京都産か。96は包含層（第Ⅲ層）より出土した。内外面とも回転ナデ調整、緑色の釉がかかる。残高3.1cmを測る。焼成は良好で須恵質である。

器種不明（97）　出土地点、層位不明である。2.2cm×2cmの小破片である。摩滅により色落ちしていると思われる。外面オリーブ灰色、内面明オリーブ灰色を呈する。焼成は良好で須恵質である。



第66図　　追加資料・久米窪田森元遺跡３次調査出土遺物実測図

第４節　小　結

今回の調査では弥生時代～中世の生活関連遺構と遺物を確認した。調査地は、北から南へと広がる来住舌状台地の南端部の落ち際に位置している。

古代の遺構は１区に集中して検出された。検出した掘立柱建物址は方位、規模に多少の差はあるものの掘立２から掘立１へと移動・建替えが行われ、建物の建替えに伴い溝ＳＤ３からＳＤ４へ付け替えたものと考えられる。おそらくは自然流路ＳＲ３の氾濫等により水際が移動した事が建替えの理由の一つではないだろうか。生活等に必要な水の確保が出来る流路からはあまり離れていない位置である。自然流路ＳＲ４からは須恵器、土師器、施釉陶器、土製品、木製遺物の破片、植物遺体等の遺物が礫石と混在した状態で出土した。これらの生活関連遺物は投棄されたと思われる。なかでも土師器、須恵器の椀・坏はすべてが底部ヘラ切り離し技法によるもので、これらと供伴して長門・周防産の緑釉陶器が出土しており、一括性が高い資料である。

今回の調査で古代10世紀後半代の集落内での遺構配置状況の一部を確認する事ができた。調査地周辺には古代８世紀から10世紀代の集落の存在が明らかとなっており、また出土する遺物等から一般的な集落ではなく官衙周辺の施設群の一部である可能性がより考えられる。

【文献】

「一般国道１１号松山東道路関係遺跡」　愛媛県埋蔵文化財調査センター
「鷹ノ子町遺跡１次調査、久米窪田古屋敷遺跡Ｃ、来住町遺跡１・３次調査、久米高畑遺跡８次調査」『来住･久米地区の遺跡』松山市文化財調査報告書２７
「来住廃寺遺跡１８・２０次調査、久米窪田森元遺跡３次調査」『来住・久米地区の遺跡Ⅱ』　松山市文化財調査報告書４４
「石井幼稚園遺跡、南中学校構内遺跡２次調査」　松山市埋蔵文化財調査報告書４５
「久米窪田古屋敷遺跡」　松山市文化財調査報告書１４８
「南久米片廻り遺跡、久米窪田森元遺跡」　松山市文化財調査報告書１５７

遺構一覧・遺物観察表　　－ 凡例 －

（１）以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

（２）遺物観察表の各掲載について。

法量欄　（　）：推定復元値

調整欄　土製品の各部位名称を略記した。

例）底→底部、胴→胴部、口頸→口縁部から頸部。

胎土欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土。

（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（1～3）→「1～3mm大の石英・長石を含む」である。

焼成欄　焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良

表 42　掘立柱建物址一覧

掘立	規模（間）	方　向	桁　行		梁　行		床面積（㎡）	時　期	備　考
			実長（m）	柱間寸法（m）	実長（m）	柱間寸法（m）			
1	3 × 2	東西	6.55	1.5 ～ 1.8	4.0	2.0	26.2		
2	3 × 2	東西	4.85	1.5 ～ 1.6	3.75	1.8	18.2		

表 43　土坑一覧

土坑（ＳＫ）	地　区	平面形	断面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備考
1	1 区	楕円形	逆台形	0.82 × 0.75 × 0.29	明灰褐色細砂質土	須恵器片・土師器片		
4	1 区	楕円形	U 字状	0.71 × 0.65 × 0.40	黒灰褐色土＋白色シルト	須恵器片		
5	1 区	不整形	皿状	0.75 × 0.75 × 0.14	茶褐色土	須恵器片・土師器片		
6	1 区	楕円形	逆台形	0.95 × 0.56 × 0.25	暗茶褐色土	須恵器片・土師器片・木片・種子・石		
7	1 区	隅丸方形	逆台形	0.82 × 0.75 × 0.23	暗茶褐色土＋砂＋白色シルト	須恵器片・土師器片・木片・種子・小礫石		
8	1 区	不整形	逆台形	0.85 × 0.65 × 0.30	暗茶褐色土＋白色シルト	須恵器片・土師器片		
9	1 区	楕円形	皿状	2.20 × (1.1+ α) × 0.27	黒灰色土	弥生土器片･土師器片･木製品片・小礫石		
10	1 区	楕円形	レンズ状	(1.75+ α) × (0.87+ α) × 0.43	明灰褐色粘性土	須恵器片・土師器片・木片		
11	1 区	楕円形	逆台形	(0.6+ α) × 0.55 × 0.3	暗茶褐色土	木片・種子・小礫石		

表 44　溝一覧

溝（ＳＤ）	地　区	断面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	方　向	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	1 区	レンズ状	2.8 × (0.23 ～ 0.35) × 0.08	南西	明灰褐色細砂質土	須恵器・土師器	古代	
3	1 区	U 字状	11.0 × (0.15 ～ 0.4) × 0.35	北→南	白色シルトブロック状＋黒褐色土	須恵器・土師器・種子	古代	
4	1 区	レンズ状～U 字状	10.1 × (0.2 ～ 0.63) × 0.5	北→南	黒褐色土＋白色シルトブロック状	須恵器・土師器・木片・種子	古代	

表 45　自然流路一覧

流路（ＳＲ）	地　区	断面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	方　向	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	1 区	皿状	5.98 × (0.8+ α) × 0.45	東西	明灰色砂質土	須恵器片・木片	古代	
2	1 区	レンズ状	(3.35+ α) × 0.8 × 0.11	北東→南西	暗灰色細砂		古代	
3	1 区	皿状	(16.0+ α) × (7.5+ α) × 0.39	北→南 西→東	明灰色細砂質土（微粘性）やや黒っぽい	須恵器・土師器・石器･布目瓦･木片･種子・獣骨	古代	
4	1 区	皿状	(9.6+ α) × 5.0 × 0.32	北東→南西	暗灰色細砂質土	須恵器・緑釉陶器・土師器･土鍋･木片･種子	古代	
5	2 ～ 3 区	皿状	(9.8+ α) × (19.0+ α) × 0.95	北東→南西 西→東	暗茶褐色土	弥生土器・木片・種子	古代	

表 46　土器溜り一覧

土器溜り	地　区	平面形	断面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	2 区	楕円	皿状	4.5 × 3.6 × 0.08	灰茶褐色土	土師器・須恵器・瓦・小木片・円礫石	中世（13 世紀代）	

表 47　ＳＲ５出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
1	甕	口径 (33.0) 残高 6.8	短く外方に屈曲する口縁部。端部は面をもつ。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 灰黄褐色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
2	甕	口径 (26.8) 残高 5.9	短く外反する口縁部。端部は面をもつ。頸部外面に刻目凸帯が巡る。	ナデ	マメツ	黒褐色 にぶい黄橙色	石・長 (1 ～ 3) ◎		21
3	甕	口径 (16.4) 残高 4.0	口端面に２条の凹線文。頸部下に刻目文を施す。	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色・灰黄褐色 にぶい黄褐色・灰黄褐色	石・長 (1 ～ 3) ◎		21
4	甕	底径 7.2 残高 12.6	くびれで上げ底の底部。	ハケ (6 本 /cm) →ミガキ	ナデ	灰白色・灰色 灰白色・灰色	石・長 (1 ～ 3) ◎		21
5	甕	底径 6.4 残高 6.1	やや上げ底の底部。	マメツ	マメツ	灰黄褐色 灰黄色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
6	甕	底径 4.2 残高 4.3	ややくびれの上げ底の底部。	ナデ	ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
7	壺	口径 (5.4) 底径 6.0 器高 16.6	体部が算盤玉のように横にはっている。平底。「く」の字状？	ナデ？	ナデ？	淡黄色 灰白色	石・長 (1 ～ 2) ◎	黒斑	21
8	高杯	底径 8.9 残高 6.9	柱部に５条の凹線。脚端部内面は強いナデにより凹む。	マメツ	マメツ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長（1～4）金 ◎		21

表 48　ＳＲ５出土遺物観察表　木製品

番号	器種	残存	樹種	法量 長さ (cm)	法量 幅 (cm)	法量 厚さ (cm)	備考	図版
9	加工品片	破片	未同定	12.0	5.3	2.3	柾目木取り	21
10	匙	〃	〃	6.5	3.7	0.8	杭状・芯持ち材	21
11	杭	先端部	〃	16.5	径 3.0		芯持ち材	21
12	杭	〃	〃	42.0	径 4.0		芯持ち材	21

表 49　ＳＫ９出土遺物観察表　木製品

番号	器種	残存	樹種	法量 長さ (cm)	法量 幅 (cm)	法量 厚さ (cm)	備考	図版
13	下駄	破片	未同定	10.5	2.1	0.9	斜め方向の円孔	22

表 50　ＳＲ３出土遺物観察表　木製品

番号	器種	残存	樹種	法量 長さ (cm)	法量 幅 (cm)	法量 厚さ (cm)	備考	図版
14	木簡片？	完形	未同定	13	1.5	0.2	柾目木取り	22
15	杭状	先端部	〃	13.7	1.3		杭状・芯持ち材	22
16	杭状	上端部欠損	〃	79	径 1.8		芯持ち材	22
17	杭状	先端部	〃	29.5	径 (2.5)		芯持ち材	22

表 51　ＳＲ４ 出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
18	埦	底径 7.5 残高 2.9	平高台。	回転ナデ ㊞ 回転ヘラ切り→ナデ(板状圧痕あり)	回転ナデ	灰白色 黄灰色	石・長 (1 ～ 5) ◎		
19	埦	底径 7.2 残高 2.8	平高台。	マメツ ㊞ 回転ヘラ切り	回転ナデ	灰白色・灰色 灰白色・黒褐色	微砂 ◎		

ＳＲ４ 出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
20	埦	底径 7.0 残高 2.3	平高台。	回転ナデ ㊞ 回転ヘラ切り→ナデ(板状圧痕あり)	回転ナデ	灰白色 黄灰色・灰白色	微砂 ◎		
21	埦	底径 6.8 残高 2.5	平高台。	回転ナデ ㊞ 回転ヘラ切り(板状工具痕あり)	回転ナデ	灰白色 灰白色	微砂 ◎		
22	埦	底径 7.7 残高 1.5	平底の底部。	回転ナデ ㊞ 回転ヘラ切り	回転ナデ	暗灰黄色 灰黄色	微砂 ○		
23	埦	底径 8.5 残高 2.5	平底の底部。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) ◎		
24	埦	底径 6.8 残高 2.3	平底。外面強いナデにより凹線あり。	回転ナデ ㊞ マメツ	回転ナデ	灰黄色 灰黄色	長(1) ◎		
25	埦	底径 6.4 残高 2.4	平底の底部。	回転ナデ ㊞ 回転ヘラ切り	回転ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色・にぶい橙色	微砂 ◎		
26	坏	口径 (11.0) 底径 (6.8) 器高 3.9	平底。外面に強いナデによる稜をもつ。	回転ナデ ㊞ 回転ヘラ切り(板状圧痕あり)	回転ナデ	褐灰色・灰黄褐色 褐灰色・灰黄褐色	微砂 ◎		22
27	坏	口径 10.9 底径 7.3 器高 3.4	やや丸味のある平底の底部。内湾して立ち上がる口縁部。	回転ナデ ㊞ 回転ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	灰白色・暗灰黄色 灰白色	石・長(1) ◎		22
28	坏	口径 10.6 底径 6.0 器高 3.3	平底の底部より内湾気味に立ち上がる。	回転ナデ ㊞ 回転ヘラ切り	回転ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	微砂 ◎		22
29	坏	底径 6.5 残高 2.2	平底の底部。	回転ナデ ㊞ 回転ヘラ切り	回転ナデ	灰黄色 灰黄色	微砂 ◎		
30	坏	底径 6.4 残高 1.8	平底の底部。	回転ナデ ㊞ 回転ヘラ切り	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1) ◎		
31	皿？	底径 9.6 残高 3.9	高台付。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	微砂 ◎		
32	皿？	底径 (8.4) 残高 2.2	高台部片。「ハ」の字状に広がる。端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ◎		
33	皿？	底径 (10.0) 残高 3.6	高台部欠損。	回転ナデ	回転ナデ	橙色・にぶい黄橙色 にぶい黄褐色・にぶい黄橙色	微砂 ◎		
34	壺	口径 (7.9) 残高 3.2	わずかに外傾して短くのびる口縁。外面はケズリによる稜。	ケズリ	ヨコナデ	淡黄色 淡黄色	微砂 ◎		22
35	壺	口径 (6.9) 残高 2.8	わずかに外傾して短くのびる口縁。外面はケズリによる稜。	ケズリ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	微砂 ◎		22
36	羽釜	口径 (23.8) 残高 7.5	鍔は水平方向に取り付く。端部は丸い。	ナデ	ナデ	黄灰色 灰黄色・黒褐色	石・長（1～5）金 ◎		
37	埦	口径 15.4 底径 7.1 器高 6.0	平高台。内湾して立ち上がる口縁部。端部はわずかに外反して丸い。	回転ナデ ㊞ 回転ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1～2) ◎		23
38	埦	口径 (14.7) 底径 (6.2) 器高 5.7	平底の底部より外上方へのびる。口縁端部は外反気味に丸くおさめる。	回転ナデ ㊞ 回転ヘラ切り	回転ナデ	灰白色・黄灰色 灰白色・黄灰色	微砂石(1) ◎		23
39	埦	口径 13.6 底径 6.9 器高 4.6	平高台。内湾気味に立ち上がる口縁。口端部は丸く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		23
40	埦	底径 (7.7) 残高 5.0	平高台。中心がやや凹む。	回転ナデ ㊞ 回転ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1) ◎		

ＳＲ４ 出土遺物観察表　土製品　(3)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
41	埦	底径 (7.7) 残高 4.2	平底の底部。	回転ナデ ㊁ 回転ヘラ切り	回転ナデ	灰白色 灰白色	微砂 ◎		
42	埦	底径 7.0 残高 1.9	平高台。	回転ナデ ㊁ 回転ヘラ切り →ナデ	回転ナデ	灰色 黄灰色	長 (1) ◎		
43	杯	底径 (17.0) 残高 1.8	輪高台付きの底部片。高台端部は「コ」の字状。	回転ナデ	ナデ	黄灰色 灰黄色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
44	壺	口径 17.4 残高 16.4	大きく外反する口縁部。端部は上外方へ尖る。肩部に１条の凹線が巡る。	口頸 回転ナデ 胴 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長 (1 ～ 2) ◎		23
45	壺	底径 (11.2) 残高 23.3	外反する口縁。平底。	回転ナデ ㊁ ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色・灰色	長 (1) ◎		23
46	壺	底径 10.0 残高 8.6	高台付壺	回転ヘラケズリ ㊁ 回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色・灰色 灰色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
47	壺	底径 (11.8) 残高 3.2	平底の底部。外面にタタキ調整がみられる。	タタキ→ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	長 (1) ◎		
48	埦	口径 (15.5) 残高 4.3	直口口縁。先細りでやや外へ開く。口縁。端部はうすく欠損する。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	釉	
49	埦	残高 2.4	外反する口縁。端部は尖り気味におさめる。	回転ナデ	回転ナデ	緑色 (施釉) 緑色 (施釉)	ち密 ◎	釉	
50	埦	底径 (6.8) 残高 2.2	輪高台付底部。 高台端部は面をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	暗オリーブ色 灰オリーブ色	石・長 (1) ◎	釉	23
51	土錘	最大径 1.8 残存長 4.4	タル型	マメツ	穿孔	黒色	密 ◎		23
52	土錘	最大径 1.5 残存長 3.4	不明	マメツ	穿孔	淡黄色	密 ○		23

表 52　ＳＲ４出土遺物観察表　木製品

番号	器種	残存	樹種	法量 長さ (cm)	法量 幅 (cm)	法量 厚さ (cm)	備考	図版
53	曲物 (側板)	破片	未同定	(6.7)	(1.7)	3.5	樺皮結合・柾目木取り	24
54	曲物 (側板)	〃	〃	(7.0)	1.6	0.2	樺皮結合・けびき・柾目木取り	24
55	曲物 (側板)	〃	〃	(12.0)	2.3	0.3	けびき・柾目木取り	24
56	曲物 (底板)	〃	〃	(13.5)	5.7	0.6	柾目木取り	24
57	曲物 (底板)	〃	〃	(19.5)	(7.7)	0.5	柾目木取り	24
58	曲物 (底板)	〃	〃	(10.0)	2.0	0.6	柾目木取り	24
59	曲物 (底板)	〃	〃	(31.5)	3.8	1.0		24
60	曲物 (底板)	〃	〃	(35.4)	2.4	0.8		24
61	棒状品	〃	〃	(30.2)	2.0	1.1		24
62	板状品	〃	〃	(10.0)	(4.0)	(0.9)	焼け焦げあり	25
63	破片	〃	〃	(8.9)	3.5	1.3	鋸目痕か？	25
64	杭	〃	〃	(35.0)	径 3.0		芯持ち材加工痕あり	24

表 53　土器溜り出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（㎝）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
65	坏	口径 (14.1) 底径 (9.8) 器高 2.6	口縁端部は先細り気味で丸い。	マメツ ㊟ 回転糸切り	マメツ	灰白色 灰白色	長 (1) ◎		
66	坏	口径 (12.6) 底径 (9.0) 器高 3.0	口縁は上外方へ立ち上がり端部は丸くおさめる。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	微砂 ○		
67	坏	口径 (12.7) 底径 (8.8) 器高 2.8	口縁への屈曲はあまい。端部は先細り尖る。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	微砂 ◎		
68	坏	口径 (12.1) 底径 8.8 器高 2.7	上外方へのびる口縁。端部は丸くおさめる。	マメツ	回転ナデ	灰白色 灰白色	微砂 ◎		
69	坏	口径 (12.4) 底径 (7.7) 器高 2.5	口縁端部は丸い。	ナデ ㊟ 回転糸切り スノコ痕残る	ナデ	灰白色 灰白色	長 (1) ◎		25
70	坏	口径 (11.6) 底径 7.1 器高 2.5	口縁端部は先細り気味。	マメツ ㊟ 回転糸切り	ナデ	灰白色 灰白色	長 (1 ～ 2) ◎		
71	坏	口径 (11.2) 底径 (7.6) 器高 2.7	口縁端部は先細り丸い。	回転ナデ ㊟ 回転糸切り スノコ痕残る	回転ナデ	浅黄橙色・明黄褐色 浅黄橙色・橙色	石・長 (1 ～ 2) ○		25
72	皿	口径 (7.8) 底径 (6.4) 器高 1.0	平底の底部。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色・浅黄橙色	長 (1)(微砂) ◎		
73	皿	口径 (7.9) 底径 6.1 器高 1.0	口縁端部は丸い。	ナデ ㊟ 回転糸切り	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	微砂 ◎		
74	皿	口径 (7.4) 底径 5.5 器高 1.1	口縁端部は丸い。	ナデ ㊟ 回転糸切り (板状圧痕あり)	ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1) ◎		25
75	皿	口径 6.8 底径 4.2 器高 0.9	口縁端部は丸い。	マメツ	マメツ	浅黄色・灰黄色 浅黄色・灰黄色	微砂 ○		25
76	皿	口径 (8.2) 底径 (5.8) 器高 1.3	口縁端部は丸い。	マメツ ㊟ 回転糸切り	ナデ	淡黄色 淡黄色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
77	皿	口径 (7.7) 底径 (5.7) 器高 1.3	口縁端部は丸い。	マメツ	マメツ	明褐灰色・黄灰色 灰白色	長 (1 ～ 2) ◎		
78	皿	口径 (7.8) 底径 (6.2) 器高 0.9	口縁端部は丸い。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 灰白色	微砂		
79	皿	底径 (7.5) 残高 1.6	口縁端部欠損。	マメツ ㊟ 回転糸切り (板状圧痕あり)	マメツ	灰白色 灰白色	微砂 ◎		
80	皿	底径 (7.4) 残高 1.2	平底の底部。	マメツ	マメツ	黄橙色 灰黄色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
81	鍋	口径 (22.6) 残高 3.6	やや内へ傾く口縁部片。口縁部外面に突帯状の鍔を張り付けている。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1 ～ 2) ○		
82	鉢	口径 (24.0) 残高 6.3	片口鉢の口縁部片。 口縁外面自然釉。	回転ナデ	回転ナデ	灰色・灰白色 灰白色	石・長 (1 ～ 3) ◎		25
83	鉢	口径 (36.0) 残高 3.9	片口鉢の口縁部片。 口縁外面自然釉。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 灰色	石・長 (2) ◎		25

表 54　土器溜り出土遺物観察表　土製品　瓦

番号	器種	法量（cm）				調　整		色調	胎土 焼成	備考	図版
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	凸面	凹面				
84	隅切平瓦	(16.0)	(14.6)	2.7	821.24	太縄タタキ	布目	浅黄橙色	密 △		
85	平瓦	(9.4)	(12.0)	2.7	428.53	太縄タタキ	布目枠板痕	灰白色	密 ○		26
86	隅切平瓦	(12.8)	(16.2)	2.5	822.49	太縄タタキ	布目枠板痕	灰白色	ち密 ◎		26
87	平瓦	(10.3)	(10.0)	2.1	376.20	太縄タタキ	布目	灰白色	やや密 △		
88	丸瓦	(11.0)	(14.0)	2.2	285.97		布目	灰色暗灰色	ち密 ○		
89	丸瓦	(20.2)	(9.4)	2.6	746.79	ナデ	布目	灰白色	密 ○		26
90	丸瓦	(11.7)	(10.3)	2.0	371.03	ナデ	布目	灰色	密 ◎		26

表 55　ＳＰ出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調　整		色調（外面） （内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
91	坏	口径　(11.0) 底径　(8.2) 器高　2.9	平底の底部。口縁端部は丸い。	マメツ ㊡ 回転糸切り	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ◎		26

表 56　ＳＰ出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法　量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
92	鍋	破片	滑石	(19.2)	9.0	1.2	389.2		26

表 57　Ⅳ②層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調　整		色調（外面） （内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
93	坏	底径　(7.2) 残高　2.4	輪高台。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	微砂 ○	釉	26

表 58　久米窪田森元遺跡３次調査出土遺物観察表（追加資料）　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調　整		色調（外面） （内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
94	埦	底径　(8.1) 残高　2.4	輪高台付底部片。高台端部は内側に面をもちナデにより凹む。内外面ともに釉を施す。	回転ナデ →施釉	回転ナデ →施釉	薄い緑色 薄い緑色	長 (1 ～ 2) ◎		26
95	埦	底径　(5.8) 残高　2.0	貼り付けによる平高台。内外面共に釉を施す。	回転ナデ →施釉	回転ナデ →施釉	オリーブ灰色 オリーブ灰色	石・長 (1) ◎		26
96	埦	残高　3.1	緑釉陶器の小片。内外面に緑色の釉が均一にかかる。	工具痕あり	回転ナデ	緑色 緑色	◎		26
97	不明	残高　2.2	内外面共に釉を施す。			オリーブ灰色 明オリーブ灰色	◎		26

第５章　まとめ

ここでは、来住町遺跡８次調査、来住町遺跡１２次調査と久米窪田森元遺跡４次調査を中心として、来住廃寺・久米官衙遺跡東側の来住町遺跡、久米窪田遺跡の調査成果をあわせてまとめを行う。

１．来住町遺跡

（１）縄文時代

来住町遺跡では、これまでの調査からは縄文時代の遺構は検出されていない。

（２）弥生時代

来住町遺跡では、来住町遺跡８次、１２次調査の西側に位置する来住Ｖ遺跡から弥生時代前期末から中期初頭の２重に巡る環濠があり、その続きは来住廃寺２０次調査で内側、平成２３年度の試掘調査からは外側の環濠の続きが確認されている。来住町遺跡の西には弥生時代前期末から中期初頭の集落範囲が明らかになってきている。弥生時代の明確な遺構は１１次調査から検出されているだけである。８次調査、１２次調査からは弥生時代の遺構は検出されていない。来住町遺跡の中では、遺物がわずかに出土しているだけである。弥生時代の集落は来住町遺跡の西側と１１次調査より北側に展開するものと思われる。

（３）古墳時代

来住町遺跡では、８次調査で検出したSR1は隣接する７次調査、１０次調査に続いており、SR1の南側には７次調査と８次調査があり、掘立柱建物や土坑が多数検出されている。北側には８次調査、１１次調査、１２次調査、来住Ⅵ遺跡があり、掘立柱建物が多数検出されている。１２次調査から９次調査までの間は、５次調査から掘立柱建物が検出しているだけである。また、１次調査、２次調査、４次調査からは自然流路SRが検出されている。来住町遺跡の古墳時代の居住域は８次調査SR1の両岸と５次調査、１１次調査周辺の北側に展開している。

（４）古　代

来住町遺跡では、８次調査ＳＲ１の南岸の７次調査、北岸の１０次調査、来住Ⅵ遺跡から掘立柱建物を検出している。５次調査、１１次調査にて掘立柱建物が検出され、そのほかに３次調査、６次調査からも集落に関連する遺構を検出している。居住域は古墳時代に引き続き来住町遺跡の南東部の８次調査ＳＲ１の両岸と来住町遺跡の北西部から北部に集落が展開していることになる。また、来住町遺跡の中央部に、現在の水路が南西方向から北西方向にあり、この水路より東側の約３０件の試掘結果からは遺跡が確認されていないことから、流路の東側は居住には適さない区域が存在すると考えられる。

２．久米窪田遺跡

（１）縄文時代

久米窪田遺跡では、森元遺跡４次調査の北側に位置する、森元遺跡から後期の土坑を検出している。久米窪田Ⅰ遺跡からは後期の竪穴、久米窪田Ⅴ遺跡からは中期から晩期の土坑を検出している。

（２）弥生時代

久米窪田遺跡からは、前期では久米窪田Ⅳ遺跡から竪穴、土坑墓、久米窪田Ⅴ遺跡から竪穴、土坑墓、

ま と め

古屋敷遺跡から前期末から中期の土坑、溝、竪穴建物が検出されている。中期では、古屋敷Ｃ遺跡から中期後半のＬ字状に曲がる溝、森元遺跡４次調査から弥生時代中期の流路、久米窪田Ⅲ遺跡から竪穴、土坑墓、久米窪田Ⅴ遺跡から竪穴、土坑墓が検出されている。後期では、久米窪田Ⅳ遺跡から竪穴、土坑、久米窪田Ⅴ遺跡から竪穴住居、土坑墓が検出されている。

久米窪田遺跡の弥生時代の遺構は、森元遺跡４次調査から検出された流路ＳＲ１より東側に検出されており、前期末から後期にかけて集落が久米窪田遺跡の東側に広がりが見られる。

（３）古墳時代

久米窪田遺跡では、明確な古墳時代の遺構は、森元遺跡３次調査から検出した六世紀後半の溝１条と久米窪田Ⅴ遺跡の掘立柱建物だけである。

（４）古　代

久米窪田遺跡では、森元遺跡４次調査から掘立柱建物、土坑、溝、流路が検出されている。古屋敷遺跡、久米窪田Ⅱ遺跡、森元遺跡、森元遺跡３次調査からも土坑、溝、流路など数多くの遺構が検出されている。遺物では、古屋敷遺跡から円面硯、久米窪田Ⅱ遺跡から木簡、斎串、円面硯、墨書土器、森元遺跡３次調査から木簡、下駄が出土している。久米窪田Ⅳ遺跡２次、久米窪田古屋敷遺跡Ａ区、Ｂ区、森元遺跡３次調査、４次調査から自然流路が検出されている。久米窪田遺跡の中央部に自然流路が複数存在し、自然流路の西側に官衙関連の施設が存在したと考えられる。

古代には、来住町遺跡、久米窪田遺跡内からは多くの掘立柱建物が確認されている。遺物では円面硯、木簡、墨書土器、斎串が出土し、来住町遺跡、久米窪田遺跡は久米官衙遺跡群に関連する周辺の施設が考えられる。

今回、来住町遺跡と久米窪田遺跡の時代ごとのまとめを行った。来住町遺跡、久米窪田遺跡ともに古代には多くの自然流路が存在することが解った。さらに来住町遺跡、久米窪田遺跡の調査が進み明確な流路が確定されれば集落域の確定が明らかになると考えられる。今後は、来住廃寺、久米官衙遺跡群との比較検討を行い来住台地上の時代ごとの集落変遷を明確にすることが必要と考えられる。

【文献】

梅木謙一　1992 「来住町遺跡１次・３次調査」「久米窪田古屋敷Ｃ遺跡」『来住・久米地区の遺跡』松山市文化財調査報告書 27

梅木謙一　1994 「来住廃寺 20 次調査」「久米窪田森元遺跡３次調査」『来住・久米地区の遺跡Ⅱ』松山市文化財調査報告書 44

田城武志　2000 「来住町遺跡４次調査」『来住・久米地区の遺跡Ⅲ』松山市文化財調査報告書 76

栗田茂敏　2011 『久米窪田古屋敷遺跡』松山市文化財調査報告書 148

小玉亜紀子 2004 「来住町遺跡６次調査」『来住・久米地区の遺跡Ⅳ』松山市文化財調査報告書 100

小笠原善治 2011 『松山市埋蔵文化財調査年報 24』

栗田茂敏　2012 『久米窪田森元遺跡』松山市埋蔵文化財調査報告書 157

吉本拡・阪本安光 1981 「来住Ⅳ遺跡」「来住Ⅴ遺跡」「久米窪田Ⅰ遺跡」「久米窪田Ⅱ遺跡」「久米窪田Ⅲ遺跡」『一般国道 11 号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』

阪本安光・小林一郎 1981 「久米窪田Ⅳ遺跡」「久米窪田Ⅴ遺跡」『一般国道 11 号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』

稲葉靖司　2003 『久米窪田Ⅳ遺跡２次』埋蔵文化財発掘調査報告書 107　財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

第 67 図　　来住町遺跡周辺調査地位置図

(S=1:4,000)

❶ 久米窪田森元遺跡　❷ 久米窪田森元遺跡２次調査　❸ 久米窪田森元遺跡３次調査　❹ 久米窪田森元遺跡４次調査
❺ 久米窪田古屋敷遺跡　❻ 久米窪田古屋敷Ｃ遺跡　❼ 久米窪田Ⅰ遺跡　❽ 久米窪田Ⅱ遺跡
❾ 久米窪田Ⅲ遺跡　❿ 久米窪田Ⅳ遺跡　⓫ 久米窪田Ⅳ遺跡２次調査　⓬ 久米窪田Ⅴ遺跡

第 68 図　　久米窪田遺跡周辺調査地位置図

※久米窪田Ⅰ～Ⅴ遺跡の位置は　久米窪田Ⅳ遺跡２次の図４２を参考にした。
　稲葉靖司　2003 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

写真図版

写真図版 1～ 6：来住町遺跡８次調査
写真図版 7～12：来住町遺跡1 2次調査
写真図版13～26：久米窪田森元遺跡４次調査

写真図版データ

1．遺構は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35㎜判フィルムカメラ・デジタルカメラで補足している。一部の撮影には高所作業車・やぐらを使用した。

使用機材：

カ　メ　ラ	トヨフィールド45A	レ ン ズ	スーパーアンギュロン	90㎜他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67	55㎜他
	ニコンニューFM 2		ズームニッコール28～85㎜他	
フィルム	白　黒　ネオパンSS・アクロス			

2．遺物は、4×5判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カ　メ　ラ	トヨビュー45G
レ　ン　ズ	ジンマーS 240㎜ F 5.6他
ストロボ	コメット/CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム	ネオパンアクロス

3．単色図版は、一部を除き、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引　伸　機	ラッキー450MD・90MS
レ　ン　ズ	エル・ニッコール135㎜ F5.6A・50㎜ F2.8N
印　画　紙	イルフォードマルチグレードⅣ RCペーパー

4．製　　版：写真図版175線
印　　刷：オフセット印刷
用　　紙：マットコート110kg

【参考】『埋文写真研究』vol.1～20・『報告書制作ガイド』『文化財写真研究』vol.1～3

［大西 朋子］

図版1

１．　北半部遺構検出状況（南より）

２．　南半部遺構検出状況（南より）

図版２

１．北半部完掘状況（南より）

２．南半部完掘状況（南より）

１．　西壁土層（東より）

２．　ＳＢ１検出状況
（北より）

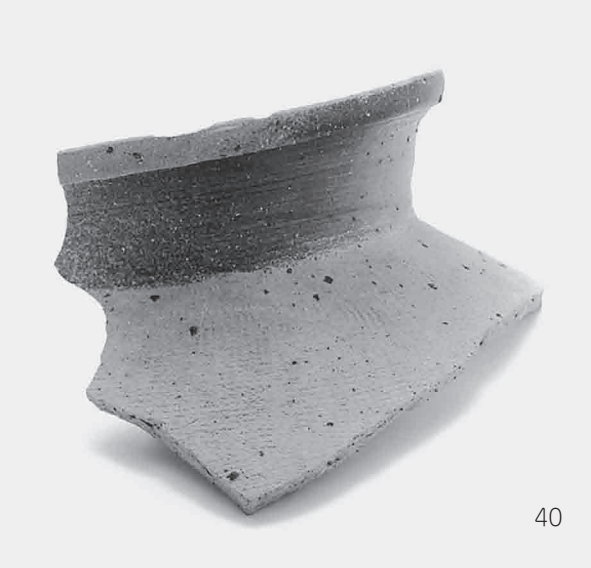
３．　掘立１検出状況
（北東より）

図版４

１．掘立２検出状況
（北西より）

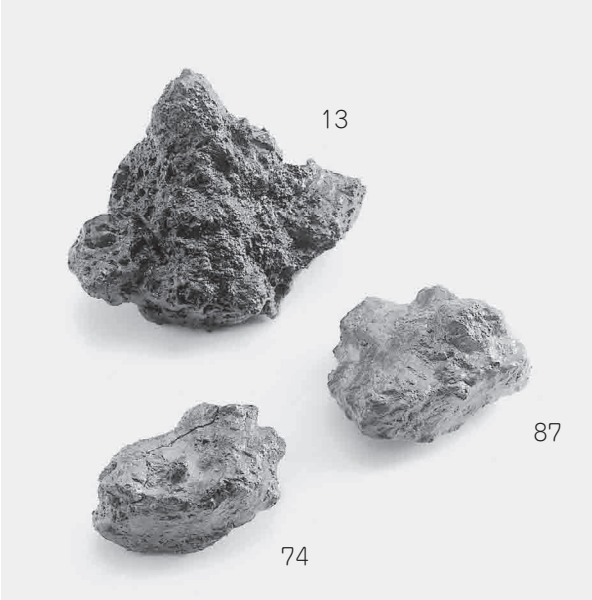
２．ＳＲ１検出状況
（東より）

３．足跡①検出状況
（西より）



１．　ＳＲ１下層出土遺物

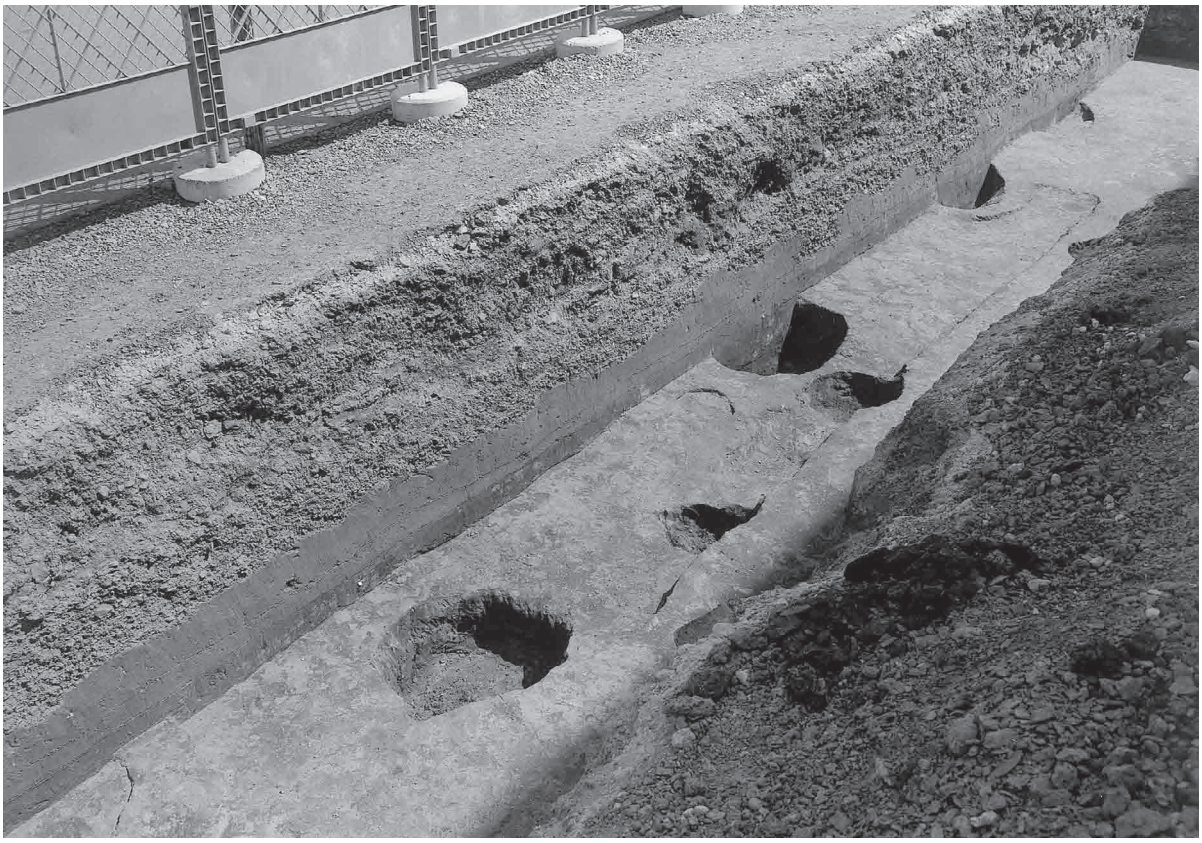
図版6



1．　出土遺物（ＳＲ１上層：55～57･70･74、ＳＲ１地点不明：75･78･86･87、ＳＫ１：12･13、包含層：92）

1．　A区遺構検出状況（西より）

2．　A区遺構完掘状況（西より）



3．　A区遺構完掘状況（南西より）

図版8

1．　B区遺構検出状況（北より）

1．　B区遺構完掘状況（北より）

2．　掘立１・掘立２完掘状況（北より）

図版10

1．　ＳＫ１遺物出土状況（南より）

2．　ＳＫ１完掘状況（南東より）

1．　ＳＸ３遺物出土状況（南東より）

2．　ＳＸ３完掘状況（南西より）

図版12

1． 出土遺物（ＳＢ１：3、ＳＫ１：14、ＳＸ３：20･26･38･40･41、地点不明：49･52）

１．　１区遺構検出状況（南東より）

２．　１区遺構検出状況（西より）

図版14

１．１区遺構完掘状況（西より）

１．　２区遺構検出状況（南東より）

２．　２区遺構完掘状況（東より）

図版16

１．３区遺構検出状況（南東より）

２．３区遺構完掘状況（南東より）

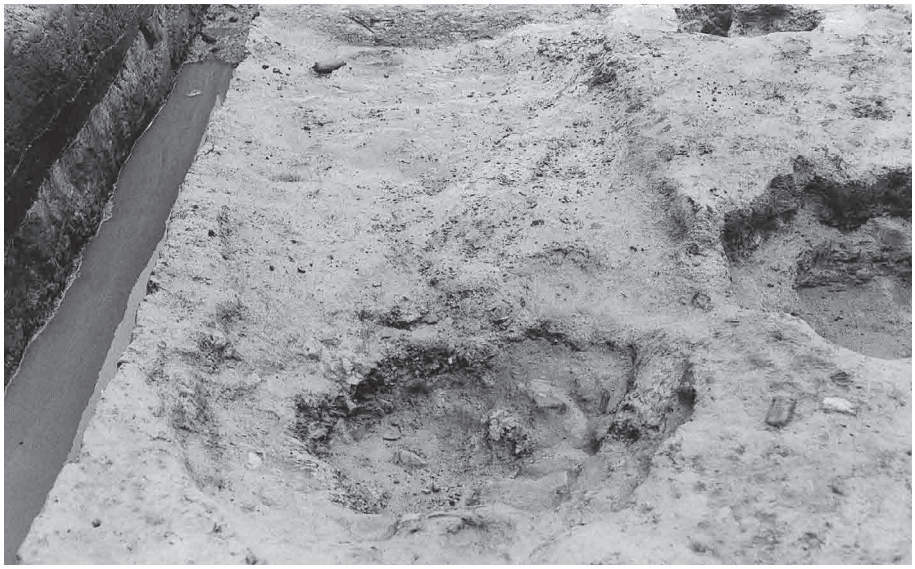
１．ＳＲ５北半部完掘状況
（北より）

２．掘立１・掘立２完掘状況
（東より）

３．掘立１、Ｐ１０８・Ｐ１０９
半裁状況　（南より）

図版18

1．　ＳＫ８完掘状況
（東より）



2．　ＳＫ９完掘状況
（東より）

3．　ＳＤ３・ＳＤ４完掘状況
（北西より）

1．　ＳＲ４遺物出土状況
（北東より）

2．　ＳＲ４完掘状況
（北東より）

3．　ＳＰ１１７柱材出土状況
（南西より）

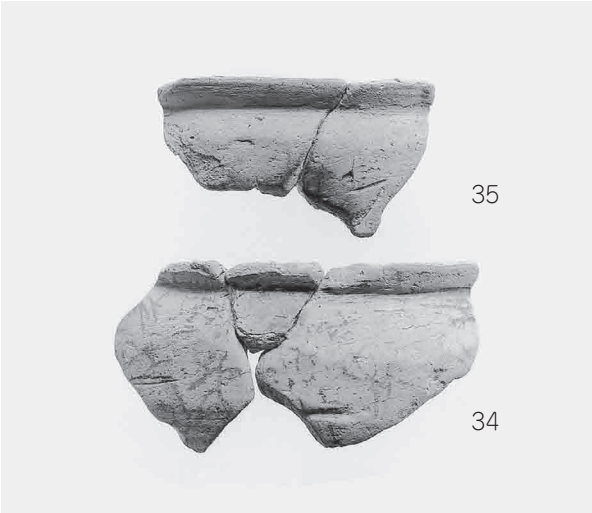
図版20

1．土器溜り遺物出土状況
（西より）

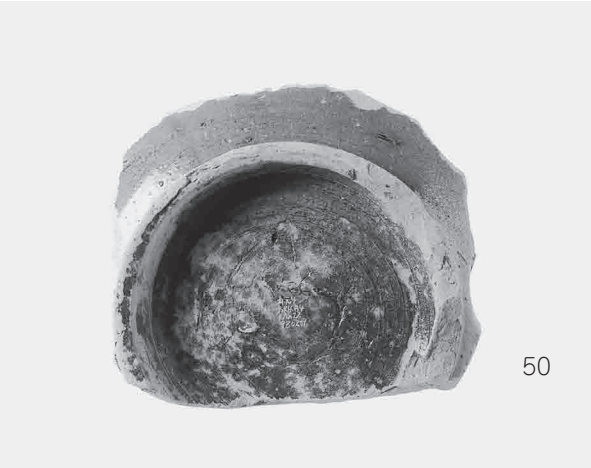
2．土器溜り遺物出土状況
（北より）

１．ＳＲ５出土遺物

図版22

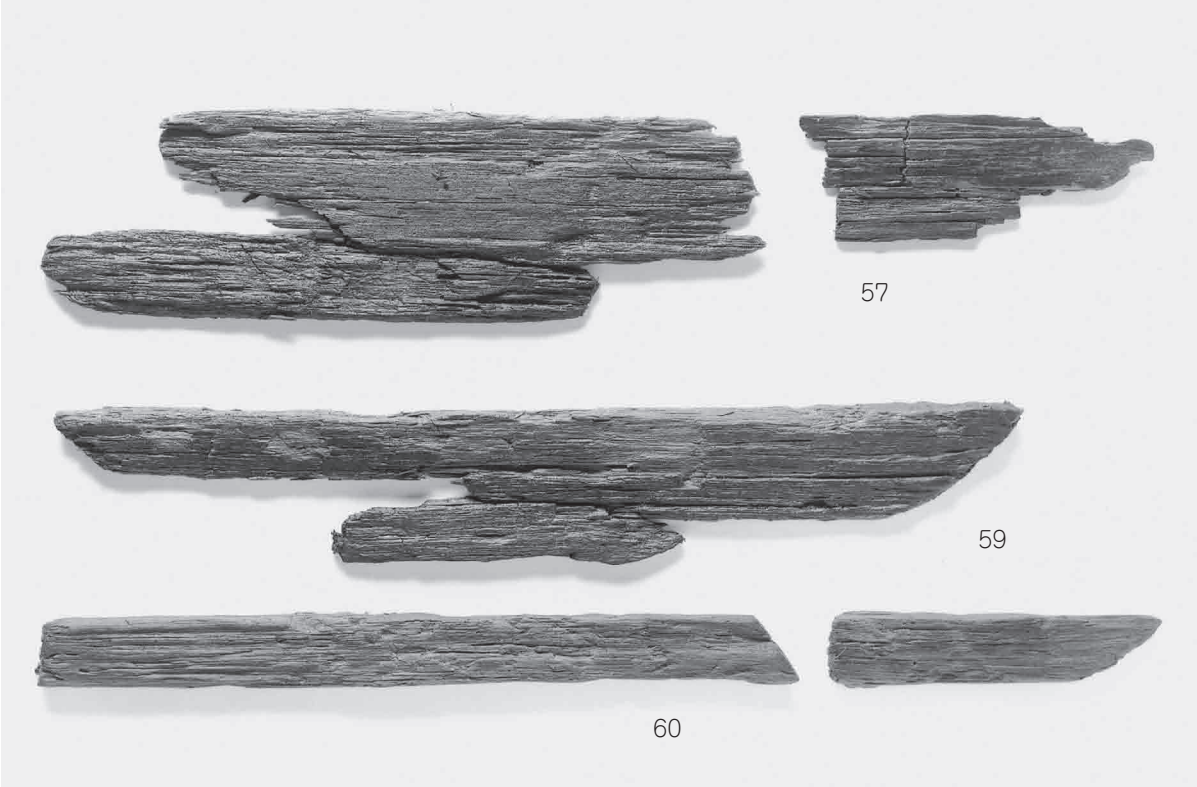


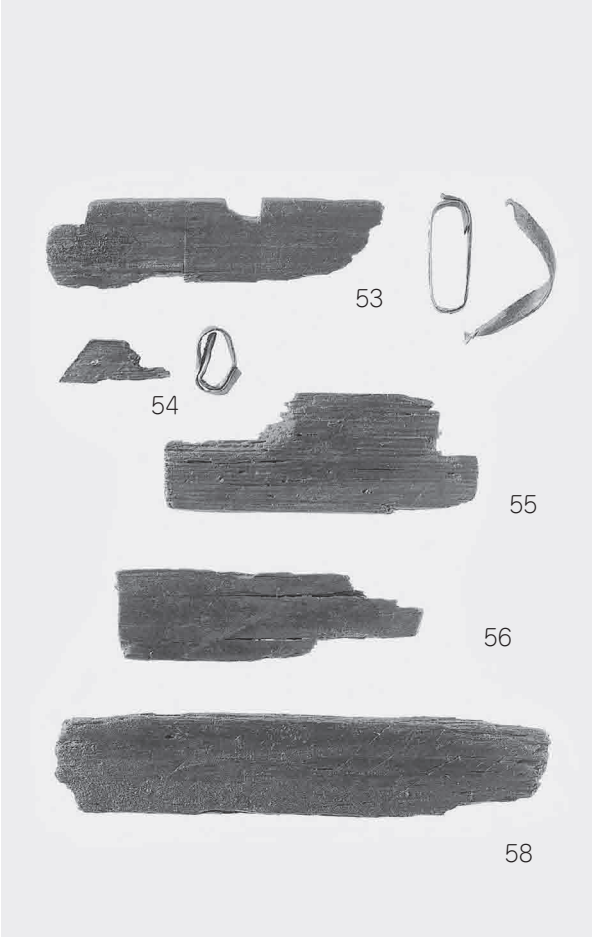
1．出土遺物（ＳＫ９：13、ＳＲ３：14～17、ＳＲ４①：26～28･34･35）

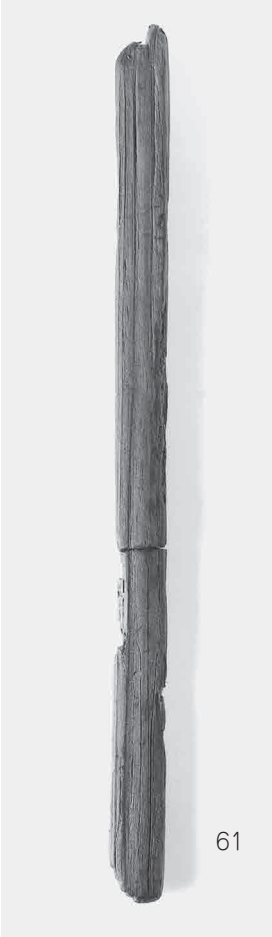


１．　ＳＲ４出土遺物②

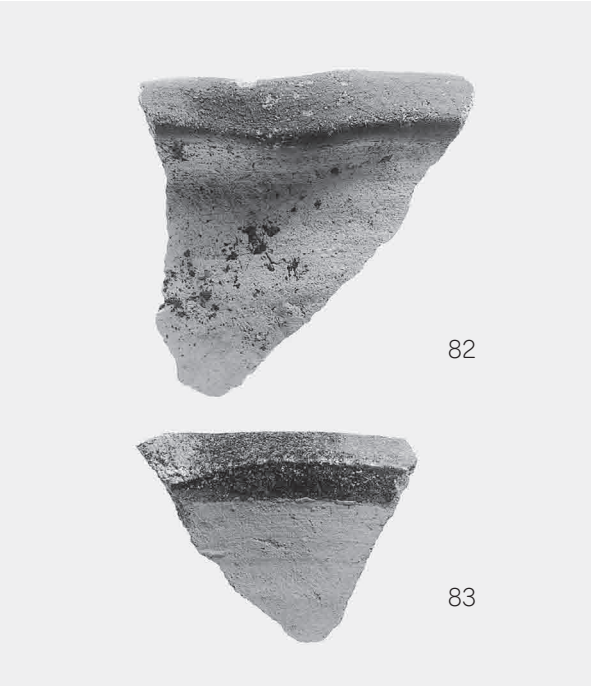
図版24





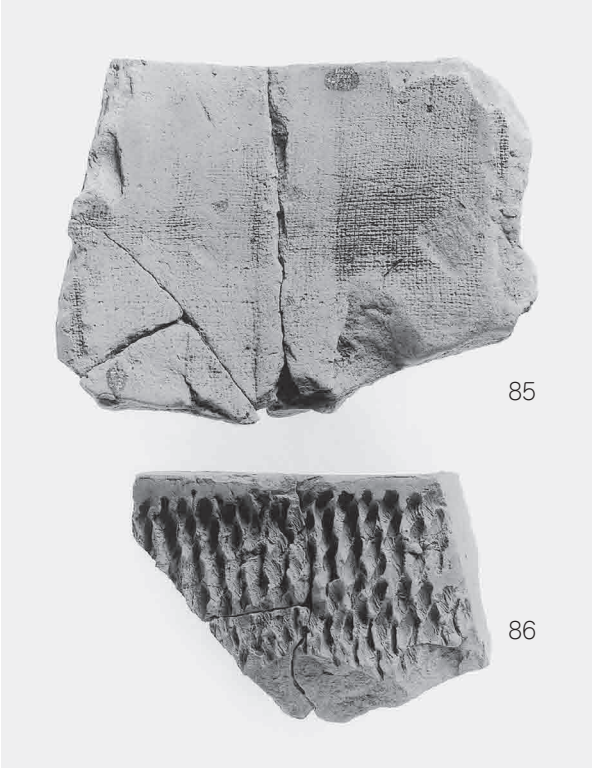


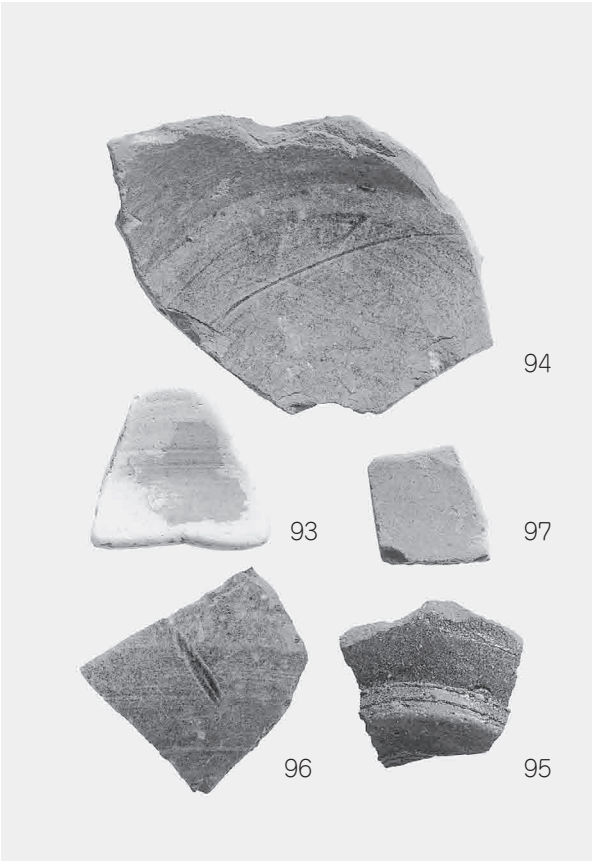
１．ＳＲ４出土遺物③



1．　出土遺物（ＳＲ４④：62･63･桃核、土器溜り①：69･71･74･75･82･83）

図版26





1．　出土遺物（土器溜り②：85･86･89･90、柱穴：91･92、Ⅳ②層：93、久米窪田森元遺跡３次：94～97）

報　告　書　抄　録

ふりがな	きしまちいせき　きしまちいせき　くめくぼたもりもといせき
書名	来住町遺跡８次調査・来住町遺跡12次調査・久米窪田森元遺跡４次調査
副書名	
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第１６１集
編著者名	髙尾和長・宮内慎一・山本健一・大西朋子
編集機関	公益財団法人　松山市文化・スポーツ振興財団　埋蔵文化財センター
所在地	〒791－8032　愛媛県松山市南斎院町乙67番地６　TEL089－923－6363
発行年月日	西暦2013（平成25）年３月１３日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
来住町遺跡 ８次調査	松山市来住町	38201		33°48′36″	132°48′19″	19980416 ～ 19980717	1,272	宅地造成
来住町遺跡 12次調査	松山市来住町	38201		33°48′31″	132°48′15″	20010409 ～ 20010525	387	立体駐車場建設・浄化槽設置
久米窪田森元 遺跡４次調査	松山市 久米窪田町	38201		33°48′30″	132°48′40″	19971215 ～ 19980331	1,330.01	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
来住町遺跡 ８次調査	集落	古墳 古代 中世	竪穴建物･掘立柱建物･土坑･溝・流路 掘立柱建物・溝・流路・足跡 掘立柱建物・溝・足跡	弥生土器・須恵器・土師器・石製品・鉄滓	
来住町遺跡 12次調査	集落	古墳 古代	竪穴建物・掘立柱建物・溝・土坑 性格不明遺構	須恵器・土師器・石製品	
久米窪田森元 遺跡４次調査	集落	弥生 古代 中世	流路 掘立・土坑・溝 土器溜り	縄文土器・弥生土器・須恵器 緑釉陶器・木製遺物	

要約	調査からは古墳時代から中世にかけての、集落に関連する遺構と遺物を検出した。来住町遺跡８次調査からは、 古墳時代後期から終末期において調査地一帯は竪穴住居や掘立柱建物が存在する居住区として土地利用されていた。その後、飛鳥時代、7世紀中葉以降は水田や畠を営む生産域として利用され、断絶期の後、中世段階になり再び生産域として土地利用されることになる。来住町遺跡１２次調査からは、古墳時代後期の竪穴建物、掘立柱建物を検出した。久米窪田森元遺跡４次調査からは今回の調査で古代10世紀後半代の集落内での遺構配置状況の一部を確認する事ができた。調査地周辺には古代８世紀代から10世紀代の集落の存在が明らかとなっており、また出土する遺物等から一般的な集落ではなく官衙周辺の施設群の一部である可能性がより考えられる。

松山市文化財調査報告書　　第１６１集

来住町遺跡 8 次調査
来住町遺跡 12 次調査
久米窪田森元遺跡 4 次調査

平成 25 年 3 月 13 日　発行

編　集　公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
・
発　行　埋蔵文化財センター
〒 791 － 8032　松山市南斎院町乙 67 番地 6
TEL（089）923 － 6363
松山市教育委員会
〒 790 － 0003　松山市三番町六丁目 6 番地 1
TEL（089）948 － 6605
印　刷　株式会社明朗社
〒 791 － 2112　伊予郡砥部町重光 150 － 1
TEL（089）958 － 6868